
帰葬本能

佐原古一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰葬本能

【Nコード】

N2590I

【作者名】

佐原古一

【あらすじ】

相棒を殺された暗殺者の俺。相棒の死の謎を解く鍵は「新しい相棒」。

新しい相棒は、刑期一万年を宣告された脱獄犯だった。

暗殺者の俺と、彼の横で微笑む脱獄犯。

愛を知らない少年と愛を失った青年のミステリファンタジー。

「二胎欲動」の「彼」が「僕」と出会う前の話です。

二胎欲動を読んでいなくてもこれ単体で読めます。

第一章 一話

風が吹く度に揺れる、廃墟になった教会。扉の表面にある蜂の巣のような弾痕は、そう遠くない昔に、ここで何があったのかを想像させる。

俺がそこで寝ているのは、昼寝をするのに丁度いい場所を見つけたからではなかった。俺が周囲に張り巡らせた、感覚というアンテナに触れる影のような男――。近づいてくるその男と俺との距離が、ジャスト五十センチに縮まった。

瞬間、瞬く隙も与えずに、俺は起き上がる。素早く男の鳩尾に拳を一撃くれてやった。そしてその体勢のまま、右手に取り出したナイフで、男の首筋を切りつける。

「……………」

首から流れる血の量を見て助からないと思ったのか、男は意識を失ったように、無抵抗のまま倒れこんだ。すかさず俺は周囲を見回す。追っ手や連れ合いは見当たらない。

あっけなかった。

「やあ」

背後から、声が聞こえた。雑踏の中で友人を見つけたような気安いい声に、俺はうんざりして振り返る。その声は死体が転がっているという状況に不自然なほど明るい。死体をよけて歩くそいつの足取りは軽快だった。俺は、横目にそいつを視界に入れた。

のりが利いたシャツとチョッキ、光が当たるとコバルト色に見える髪、人好きのしそうな笑顔。もう二十代後半のはずだが、笑う瞳は、全然そんなことを感じさせない。

年頃の俺が言うのもおかしいが、奴は少年のような目をしていて、それに相応しい喋り方をする。俺を見ながら、奴は笑った。

「簡単に仕事が終わったのに、不機嫌そうだね？」

そう言っただけ出して来たそいつの手を振り払い、俺は踵を返し

た。

「さっさと帰るぞ」

放り捨てるように言った俺の言葉に、一体、奴はどういう顔をしていたのだろう。

「待ってよ」

そいつはあくまで愉快そうに言いながら、俺の背中を追いかけた。

ソドム。そこは、かつて姦淫が溢れ、神火に焼き払われたという伝説の残る街。そこで俺は、息を潜めるように暮らしている。

両親に捨てられたことを俺が理解するのに、時間はかからなかった。この稼業に身をやつす俺を見て、人は言う。

「生活に困るから人殺しをせざるを得ないなんて」。「愛のある温かい家庭に育っていれば、犯罪に手を染めてまで生きようなんて思わなかっただろうに」と。

思い違えるな。

確かに俺は、食っていく為に働かなければならない。どんな手段を使っても、金を稼ぐ必要がある。

この仕事を選んだのは、俺自身の意志だ。仕事なら他にもある。

ただ、お前らが知らないだけだ。

一番元手がかからない仕事は、売春だろう。少なくとも、人殺しよりはリスクが少ない。病気にさえ気をつければだ。あとは、武器や麻薬の横流し。マフィアに入れば、厳しい掟の下だが「組織」に所属することができる。

それでも俺が「フリーの殺し屋」になったのは、自分の力だけで生きることを選んだからだ。

俺にとって必要なのは、絶望に慣れることでもなければ、希望を持ち続けて清く生きる健気さを持ち合わせることもない。まして、愛ある家庭で育つことでも無い。

俺は他人の悪意がもたらす「絶望」よりも、他人の善意が差し出す「希望」よりも——自分の中で息づく、もっと確かなものが欲しい。

いつぞやか、あの男に言われたことがある。俺を「友人」と呼びかけてくる、気安い男に。

「まるで炎のようだね。かつてこの街は、神の怒りによって焼き払われた。怒りが呼ぶ破壊は炎に姿を変えて、全てを焼き払う」

地獄の起源は、生きながらにして子どもを火あぶりにした儀式にある。不浄を薙ぎ払うのが炎なら、罪人にこの世のものならない責め苦を与えるのも炎だ。

「君の中にあるその欲心が大火となって、この街全体を包みこむことにならないことを祈るよ」

かつてこの街は、焼き払って無に帰さなければならぬ程の、罪悪が溢れる土地だった。

今、世情は先の戦争で混沌としており、貧富の格差と弱者を虐げる政策が、市民を暴徒の道へと走らせている。それは今では一部の出来事だが、確実に——火種は広がり続けていた。

「火種は大火を得ることで、より一層広がるものさ」

そう言つて、あくまで爽やかに笑う記憶の中の男から顔を背けるように、俺は窓の外を見遣る。

鳩がいた。足をひよこひよここと引きずり、羽を広げて地面を離れようとするが上手く飛べない。風切羽をやらたか。そうとあれば、こいつは二度と空を飛べはすまい。

自分が帰る場所と知りながら、そこへと飛び立てない鳩からも視線を外して、俺はベッドの上に寝転んだ。そして、机の上に放り投げたあるナイフを見る。

ここ最近、洗っても洗っても血の匂いがとれなくなってきたそれを見て、俺の意識はまどろんだ。

第一章 二話

表に表札は出ておらず、チャイムやノッカーもない。高さは七階建てくらいだろうか。「あいつ」はこの屋敷に一人で住んでいる。他の人間の姿は見当たらない。家人どころか使用人の姿さえ無いのは奇妙だった。

俺は一階に設えられた中央の階段を上がって、右に折れた。廊下を渡り、一番奥の部屋の前で立ち止まる。

ドアは開いていた。そこに、開け放たれた窓の風に揺すられる、カウチに座った男の姿があった。俺は男の正面に回ってみる。彼は眠っていた。寄せては返す、さざ波のように穏やかな寝息。

この男は「オールド・ワン」という。その名の意味は「古きものだ。正確には「オールドワン」と、続けて呼ぶべきなのだが、「この方が人名っぽい」という理由で、あいつは人に、そう呼ばせている。

奴の一族は、少なくとも、文字の歴史が始まった時には存在していたとされる。それは世界のいたる所に影を落とし、歴史が変わろうと止揚する様を見守り続けている、影のような一族だと言う。

何故連中がそんなことをしているのかというと、その理由は、とても単純だった。ただ単に「知りたい」からだと言う。冒険者や登山家。そういうものに似ているかも知れない。存在するのか分からない秘境を探し、そこにあるからという理由で山を登る。

自分の知らない世界がどこかにあると信じて、それに出会える日を待っている。オールド・ワンと呼ばれる者は、そんな風に、大人になり損った子ども達なのかも知れない。

はつきりしていることは、彼らが莫大な資産を持っていること、決して歴史の表舞台に干渉しようとしないうこと、ただ見守る為だけに、世界中に子飼いの監視者を放っているということだ。

いつかオールド・ワン自身が語ったことがある。こいつは一族の

中でも、「異端」なのだ。

「ぼくだけなんだよ。こうして、積極的に人と関わろうとするのは」
あくまで「観察者」たらしとする——直接世俗に関わろうとしない一族の中で、こいつは俺にそうしているように、積極的に他人と接している。

「だってさ、見てるだけじゃなくて、実際にお話した方が、色んなことが分かるだろう？」

記憶の中のオールド・ワンは、カラカラ笑いながら、そう言った。確かにそうだろう。山は見ているよりも、登った方が面白いのかも知れない。

「……………」

そんな、オールド・ワンの穏やかな寝顔を見て思う。こいつやその先祖が見てきたものに比べれば——卑屈になるつもりはないが——連中が俺に興味を持つ理由は、無いように思えた。こいつが俺に構い、俺を「観察」している理由は、何なのだろう。

窓から差し込んでいた光を遮られたことに気付いたのか、顔に俺の影を落としたそいつはゆっくり瞳を開け放つ。

「ん……、ああ、ごめんね……自分で来てくれって言うといて」
前にも言ったように、こいつの歳の頃は二十五、六といったところだ。それなのにそいつは、少年のように屈託のない喋り方をして笑った。

オールド・ワンは所謂スポンサーだった。こいつから回ってくる仕事がこの俺の生命線だ。

「さっさと用件を話せ」

スポンサーに対する態度とは思えない俺の口ぶりに、オールド・ワンは気を悪くした様子もなく言う。

「実は、キミに会ってもらいたい人がいてさ」

そいつは俺に、親しい友人に話しかけるかのような気安い口調で

続けた。

もつとも俺には親しい友人などいないので、あくまでそう思える
ような口調だといっただけの話だった。

第一章 三話

オールド・ワンは向かいの席を俺に勧めた。俺は謹んで辞退する。オールド・ワンは肩を竦めて、困ったように笑った。どんな生活をしているのか、オールド・ワンはいつ訪ねても自宅に居た。

「さつき『君に会って欲しい人がいる』って言ったけど、できればその人を、ここに連れて来て欲しいんだ。ただ……」

珍しく、オールド・ワンは歯切れ悪く言った。

「生きてるかどうかわからなくてね」

要するに、人探しをしるということだろうか。

「そういうのは警察の仕事だろう」

俺はうるさそうに言った。もつとも、この国の警察などあてにならないが。

「いや、人探しをして欲しいってわけじゃないんだよ。居場所だって分かってる。ほら、ここからも『そこ』が見えるんだよ」

オールド・ワンは窓の方を振り仰いだ。崖の上に立つこの屋敷の窓からだ、ソドムの街を一望することができる。

「……ただ、生きているかどうかがわからなくてね」

カーテンが風にそよいでいる。よく手入れされていて新品のようだった。この屋敷にはオールド・ワンしか住んでいないはずだ。これの手入れを、オールド・ワンは一人でしているのだろうか？この長身の男が縮こまりながら家中のカーテンを洗濯している所を想像すると、少し笑えた。

「でね」

俺は佇まいを直して、さも真面目に話を聞いていたかのような表情を作る。その間も、オールド・ワンは話を続けた。

「これが地図。迷わないと思うけど一応」

そう言ってオールド・ワンが差し出してきたのは、上質の紙に印刷された地図と小瓶だった。地図の隅の方に丸印がついている。

「じゃあ、お願いね」

オールド・ワンの口ぶりは「前の通りでパンを一切れ買ってきてくれ」とでもいうかのようだった。思わず俺は、身を乗り出しながら言う。

「待て。地図とこんな小瓶だけで人を探せっていうのか？」

俺はもう一度、オールド・ワンから渡されたものを確かめる。今俺の手にあるのは、地図と小瓶だけだ。

「……相手の名前も分からないのに？」

そう——人探しだというのに、奴は人相書きの一つも寄越さなかったのだ。

相手の名前も顔も分からないのに人探しだと？

俺は半ば喰ってかかるような態度に出て、オールド・ワンを問い詰める。実際、俺は奴の胸倉を掴んでいた。

「大丈夫だよ」

すんなり言って、オールド・ワンは笑った。自分の胸倉を掴んでいる俺の手に、優しく自分の手を重ねる。

口元は笑っているが、瞳は真摯に俺を見つめていた。

「間違えたりなんかしないさ。絶対にね。ぼくが保障する」

俺を見据えて微動だにしないオールド・ワンは、ゆっくりと、見るも鮮やかに微笑んだ。

微笑んだと言えるくらい、優しく笑った。

「期待してるよ」

時刻は既に日付をまたいでいた。吐く息は白く、白くなった瞬間に消えていく。

「……………」

建物の構造は頭の中に入っていた。ふと俺は、別れ際のオールド・ワンの顔を思い出す。

『期待してるよ』

全てを見透かしているような、余裕のある表情だった。オールド・

ワンという「観察者」である一族に生を受けたことで、自然と身につけた表情なのだろう。

あいつは何かを「外から眺める」ことに慣れている。だから、「観客」のような顔をして、こちらを観察している。そして、常に自分が「安全圏」にいるということも知っている。だから自分が常に観察者たりえていることも。

そこには欠片ほどの悪意もない。砂塵ほどの他意もない――。

しかし、頭でそう分かっていても、気に入らないものは気に入らなかった。

あいつの視線も。あいつが俺に構うことも。

周囲を警戒しつつ歩き回っていると、通用口を見つけた。鑄鉄製の堅牢な扉だった。これでさえ「非常口」だというのは、物々しさを尋常ではない。

「（これが……）」

俺は渡されていた小瓶を取り出す。中にはゲル状のものが入っていた。それを扉の鍵穴に押し付けてみる。ゲルの先端を取っ手のような形にしておいてやったので、それを摘んで捻った。

ズズズズ……

地面を擦るような音がして、すんなり扉が開いた。ゲルは固まっていてびくともしない。ポケットから取り出したマッチで炙つてやると、ゲルはすぐに溶け出した。どうやらこのゲルは、温度によって固さが変わるらしい。

あいつは一体、どこでこんなものを……。俺はさっさとゲルを小瓶の中にしまった。

「……………」

俺は、顔をほぼ真上に上げなければ見えない、建物の頂上を見つめた。

威圧しているかのようなだった。それはソドム全土を監視するかのようには聳え立っている。確かに、この頂上からなら街の全景を見渡せるだろう。

しかし。

そんなところから街を眺める人間は、いないだろうと思う。

ここはソドムの中で最も堅固かつ、あらゆる拷責に満ちた場所。
エルガストウルム刑務所だった。

地下に続く階段をそつと下りる。灯りらしい灯りは無かったので、マッチの火を頼りに下りていくことにした。エルガストウルム刑務所の最下層、囚人達に「地獄」と呼ばれる牢獄の、最も深い場所を目指して。

「会って欲しいのは、その最下層にいる人間さ」

記憶の中で蘇るオールド・ワンの声は、周囲の暗さとは正反対に明るい。

「他にいるはずのない人間だからね。いや、『他に人がいるはずが無い』と言うべきか」

オールド・ワン曰く、最下層にいる人物への面会は何人も許されず、食事や服の替えも、機械の昇降を使つて済ませているらしい。監視員すら、そいつに会うことが許されないのだ。

「おかしい話だろう？そんな所に閉じ込められるような凶悪犯なのに、誰もその姿を、目で見て確認したりしないんだ」

確かに、内部の人間にさえ情報を秘匿されているという状況には疑問を感じる。監獄の最下層にいながら誰からの監視も受けず、存在を知られているのに、姿が見えない男。

不意に階段がなくなり、足元が広い踊り場に変わった。どうやら俺は、地獄と呼ばれる場所の最も深い場所に辿り着いたらしい。

「……………」

一体、この中にいる人間は、どれ程の罪を犯したのだろう。きつとこの世の誰より、深い欲望の持ち主だろう。あるいは強い悪意の持ち主だ。

俺はゲルを瓶から取り出して、鉄格子の鍵穴に嵌める。五重にな

っている扉を、一つ一つ開けていった。

「それでも分かっていることは一つ」

記憶の中で思い出される、オールド・ワンの声。

俺は最後の一つの扉を、押し開けた。

「刑期は一万年」

オールド・ワンの話では、囚人は牢獄の中でも手錠をしているのだという。手錠なんかなくても、何もできないだろうに。

大人しくしているが、こちらに気付いているようだった。

格子の向こう。

俺に警戒されるのを怖れてか、そいつは、その場から動こうとしない。

「どなたですか？」

しかし、先に向こうから声をかけられた。俺は一瞬で呼吸を忘れる。思っていたよりも理性的な口調だった。声の主が続ける。

「灯りをお持ちなら点けていただけませんか？このままでは何も見えないので」

相手がどんな体術を心得ているのか分からないので、おいそれと火を点すことはできなかった。しかし、囚人が足枷もしているらしいことに気が付いて、ようやく俺は火をつける。

揺れるマッチの炎越しに、そいつの顔が窺いしれた。そいつは俺の顔を見て、驚いたように言う。

「……お若いんですね」

それは俺も同じだった。むしろ、俺の方にこそ、言わせて欲しい。相手はまだ若い男だった。櫛などないだろうに、髪はよく手入れされている。指にはささくれ一つない。ずっと光が差さないでいたはずの瞳は、そんなことを微塵も感じさせなかった。

穏やかな瞳だった。穏やかだが、こちらを見つめる意志を感じさせる、一点に向かう「意志」を感じさせる視線。笑顔も自然だった。「初めまして。もう随分前から名乗る名前がないので、自分から名乗れないのが心苦しいんですが」

そして名乗る名前の代わりと言わんばかりにと、男は苦笑する。

「……一体誰に頼まれて、こんな所へ来たんです？」

男は悠長にそう言った。俺は身構える。

「いえね。頼まれでもしなければ、こんな所へは来ないでしょう？」

男は笑った。俺は笑わない。

「どうぞご用件を」

そう言って男は笑う。愉快だという風でもなく偽るようでもなく。

飾ることもなく、笑う意味すら知らないように。

「どうかしましたか？」

男のその笑顔は。

ここでない場所なら、自然な笑顔だった。

第一章 四話

闇医者という存在はそれほど珍しくない。埃っぽい階段を上がってすぐが診療所だった。俺はノックして返事を待たずに扉を開ける。扉一枚開けてすぐがメレグ・メルトウル診療所だった。正確には診療所兼リビング。しかし、キッチンがあつてテーブルがあつて、その上に新聞が載っているだけの場所なので、プライベートな感じはあまりしない。

「今日はどうされましたか？」

透き通るような声で、メレグが声をかけてくる。薄い眼鏡のレンズ越しに、こちらを見つめていた。

メレグ・メルトウル。女性だ。伶俐な容貌が優形的美青年に見える。知覚鋭そうな瞳をこちらに向けていた。嫌いなタイプの女ではないが、俺より背が高い所が気に入らない。

「暫くぶりですね。まあ、君の容態も最近は落ち着いているようですし」

メレグにそう言われて思い出す。そういえば、最後にこいつのところへ来たのは、一ヶ月前だったか。

「まあ結構ですよ、君さえよろしいのであれば。こちらとて強要はしませんし。他の患者さんがいませんから、すぐに診て差し上げましょう」

言つてメレグは診察室へ入ろうとしたが、ふと足を止めた。

「ところで……君の後ろにいる方は、どなたです？」

それまで黙っていたそれは——メレグに指摘されて、にっこりと微笑んだ。ここ数年人と会話をしたことが無いとは思えないほど、自然な笑顔を見せて。

「彼の付添い人なんですけど……僕も診てもらっていいですか？」
メレグは何も言わない。しかし一言だけ。

「ご希望でしたら」

俺が連れ出した刑期一万年という男に、「カタロス」という名前がつけられた。

「名前がないと不便だろう？」

と言うオールド・ワンが勝手につけた名前だ。カタロス本人は、ただ笑って提案を受け入れるだけだった。

昨夜、俺はカタロスをオールド・ワンの家へ連れて行った。それがどれだけ危険なことか承知していたが……事は簡単に運んでしまった。

本当に、物のはずみでどうにかなってしまったという感じだ。いい加減な言い方だが、我ながら運が良かったとは思えない。刑期一万年の男を、監獄から連れ出すことに成功したのだから。

じろじろとカタロスを「観」て、オールド・ワンは満足そうに頷いた。カタロスはぴくりともせずにはオールド・ワンの視線を受け入れている。相変わらず微笑んですらいた。

刑期一万年の男と聞いてどんなむくつけき男かと思えば……目の前のカタロスは、小奇麗な顔立ちの青年だった。「人が好い」というのだろうか、そんな毒気の無い雰囲気を持っている。物腰は、明らかに年下であろう俺にも敬語で、紳士的だった。

奴の印象を一言で言えば、「良いとこのぼんぼん」と言った所だろうか。いや、そんな連中よりも、多少は賢そうに見える。カタロスは実に落ち着いていた。

そこは矢張り年相応なのか？ いや、どこの馬の骨とも分からない人間に、じろじろ見られているのに落ち着いている方がおかしいのでは？

俺は「こいつはもしかするとすごい奴なのか」と思ったが、隙だらけで、特に護身術の心得があるわけでも無いらしいその様子を見ていると、「いやそれはないな」と思い始めた。単にこいつを「呑気な男なのだ」と思うことにする。

こいつが持つ、一点を定めて揺るがない視線も、単なる怖いもの知らずな呑気さから来るのだと、そう思うことにした。

「あのさ、君のお友達にメレグちゃんっていたでしょう？」

唐突にそう言っ、オールド・ワンはメレグの名前を出してきた。友人ではないと訂正するのも面倒で話を聞いていると

「彼をメレグちゃんに診てもらえないかな？」

「診察代はぼくが持つから」と訊いてもいいことを言っ、オールド・ワンは勝手に話を進めた。カタロスに具合の悪い所はなさそうだった。しかし、長年牢獄で暮らしていたカタロスの身体を心配するのは、当然のことだと言えた。

「（だからって、俺を巻き込むなよ……）」

しかし、俺が言い返そうとする頃には右手に札束を握らされていたので、仕方なく奴の言い分に従った。

で、今、カタロスはメレグの診察を受けている。

「……………」

俺はカタロスの、その広い背中を見て思った。

広い背中に走る無数の傷跡。腰まで続いているその傷痕がどこで途切れているのか、俺は知らない。熱棒が何かを押し付けられたような痕もある。爛れた皮がケロイド状になっていた。

「大分昔についた傷ですね。命に別状は無いでしょう」

そして、それを診察するメレグの淡々とした声。俺はいたたまれなくなっただけではないが、目を逸らす。不憫だとは思わない。ただ、不思議だった。

人の中に悪意があることを知らないかのような、カタロスの笑顔。あるいは知らないのか。悪意そのものを。

そんな筈がなかった。カタロスはエルガストウルの最下層に閉じ込められていた刑期一万年の男だ。むしろこの男こそ、「そうしたもの」のような人間でもおかしくない。

「診察、終わりました。カタロスさんは問題ありませんね。健康ですよ、わりと」

と、メレグ。わりとつて何だよ。この女、腕は確かだけど、言うことは結構いい加減なんだよ……。腕はいいが、人格は信頼ならない。

「さて、次は君の番です。最近調子はどうですか？」

俺は重い腰を上げて、メレグの前に座った。

「まあまあだな。特に悪い所はない」

「見せてください」

メレグに請われて、俺はゆっくりと左手を彼女の前に翳す。

「そのまま、いつも通り『出して』みてください」

言われて俺は――メレグの前に差し出した左手に、炎を灯した。

何故こんな能力が身についたのか分からない。ただ、この能力のお陰で生きてこれたのは確かだ。

決して「物質」を燃やすことはできない、相手の精神のみを「焼き殺す」能力。

便利といえば便利だが、使いどころを選ぶ能力だった。そう頻繁に使っては怪しまれる。あくまで自然に死んだように見せる必要があった。普段はナイフを使い、ここぞという時に炎の能力を使う。

俺のこの能力を知っているのは、メレグとオールド・ワンだけだ。もともと、オールド・ワンは俺のこの能力を手品か何かだと勘違いしていて（気楽なもんだ）、人を殺せる能力だとは思っていない。

頻繁にこの能力を使わないもう一つの理由は、使うと、とんでもなく精神を磨耗させられてしまうから。今は加減しているので、虫一匹殺す力も無い。

「何度見ても不思議なものですな」

誰にともなく言つて、メレグはてきぱき診察を進めていった。

カタロスと揃いで診療所を出た時には、既に夕刻も近かった。先立つて歩く俺の後ろをカタロスの長身がついてくる。不自然なくら

いの沈黙が続いて三つ目の角を曲がった時、俺は振り返らないまま訊ねた。

「訊かないんだな。炎のこと」

カタロスは、俺の背後からあの炎を見ているはずだった。カタロスは囁くように言う。

「ええ。別に、訊かなくてもいいことでしょう?」

「……………」

「訊いてもいいのなら訊きますけど」

澄ました声で続けやがった。相変わらず穏やかな瞳が、俺を見つめて笑っている。

俺は前に一步踏み出した。しかし、二歩目を出すのと同時に立ち止まる。

「気がついたら、あつた能力だ」

ちょうどこの辺りだった。

この辺りで行き倒れていた俺を助けたのが、メレグだった。

「教えてもらえますか?」

そう言うメレグが、霞む視界の端で揺れている。傷だらけの顔を起こした俺は、メレグの姿を認めるだけで精一杯だった。

まだこの街に来たばかりの頃だ。裏路地を歩いていて「囲まれた」と思った瞬間、容赦なく正拳をくらった。腹に一発、顔に一発。腹には蹴りをもう一つ。

見知らぬ男達だった。ほぼ同時に喰らって殴られ続けて、意識を失ってしまうその前に――力を使った。使ったかどうかは覚えていなかったが、傷一つない男達が周囲に倒れているのに気付いて、使ってしまったのだと悟った。

「今君が使った力。それは、なんと呼ばれるものなのですか?」

周囲で倒れている男達に目もくれず、こちらに近づいてくる静かなメレグの声。

「私と取引しませんか? 私はあなたの怪我を治してあげますし、今

後も診療に際して、私を頼ってくださいって結構です。お代も不要。その代わり、『それ』が何なのか教えてください。その力が一体、何なのか」

何年かかっても構いませんからと。それが、俺がメレグの厄介になり始めた理由だった。理由と言うか、原因と言うか。

あの女は俺が持つ能力を解明しようとしている。しかし、具体的なことは今も分からないはまだ。

そう、ちょうどこんな日だった。夕方の、少し埃っぽい空気。

死にかけた俺に差し出された女の手は、芯も凍るほどに冷たかった。あの女は、あくまで俺を、「研究の対象」としてしか必要としていない。

「気がついたらあつた。それだけだ。俺にもよく分からない」

淀みかけた歩を進めようとして、前に踏み出す。カタロスが早足で俺の隣に追いついてきた。俺が振り向くよりも早く言う。静かに笑って。

「それだけ明るい炎が出せるなら、どんな暗がり歩いていても心強いじゃないですか」
どうだかな。

何故だろうと、自分でも思う。

どうして「刑期一万年の男を連れ出す」という依頼を受ける気になったのか。

今までオールド・ワンの依頼を断ったことは何度かある。どれも「気が向かない」とか「割に合わない」とか、そんな理由で却下した。だから今回のことも俺が断れば、そのまま終わっていた話なのに違いない。俺が断ったからと言って、もう俺に仕事を回さなくなったりするとは思えづらかった。

きつと、手を伸ばしてみたかったのだろう。この世のどれより深い欲望。あるいは悪意。

それに最も近くある者の存在に。

今なら、少しだけあの男の気持ち分かる。

未知のものに対する好奇心が恐怖に勝る瞬間、オールド・ワンも、こんな感覚を味わうのだろう。

第一章 五話

目が覚めたら朝だった、と思ったらカーテンの隙間から入ってくる日差しは強い。もう昼だった。

「しまった……」

俺は素早く身を起こし、朝の内に片づけておくつもりだった洗濯カゴの中身に目をやった。しかし、ごっそりその中身は消えている。「!？」

俺は慌ててベッドから飛び降り、カゴに手を伸ばした、のと同じに声がした。

「目が覚めましたか？」

シンシユンと、キッチンで湯気の立つ音がする。テーブルの上には揃いの食器が二つ並び、その中にはサラダが行儀よく盛られていた。

「すみません勝手に野菜を使って。あと、お金もちっとだけ借りていきました」

何をしている。カゴの中身はどうした？何故こんなことを――？
どれから言うべきか迷って、結局どれも言えなかった。

「今日はいいい天気ですね。早くカーテンを開けちゃいましょう」
そう言って目の前の男は、カタロスは笑う。

あの日――俺がカタロスを連れていった時、オールド・ワンは言った。

「カタロスくんと一緒に生活してくれないか？」

奴が出してきた条件はそれだけだった。理由は分からなかった。

奴はただ、俺に金だけ寄越して笑った。

「まずは一か月。一か月経ったらまたおいで」

相変わらず人好きがしそうでいて、付け入る隙のない、断る余地のない笑顔だった。俺にはさっぱり理由が分からなかったが、オー

ルド・ワンの言い方は確信に満ちているようだった。

奴は何かを期待している。少なくとも、俺とカタロスと一緒に生活させることで、それが起きるのだと確信している。しかしそれが何なのか、俺には全く分からない。

だから苦手なんだ。

あいつも、あいつが見せる笑顔も。近くで見ているのに、底が知れない。

俺とカタロスは向かい合って、スープの皿をつついていた。スープは美味かった。人の手がかかった料理をあまり食べない俺でも——いや、だからなのか——店で出される即席のものとは違うことが、すぐに分かった。

「この皿どうしたんだ？」

俺はスプーンでカタロスの皿を指し示す。この部屋には食器が一つずつしかない。この部屋に住むのは俺一人なのだから当然だった。「さつき材料を買いに行った時に、一緒に買ったんです。食器棚の中によく似たお皿があったのを思い出したんで、これにしました」そんなことは訊いていない。が、確かによく似た皿だと思った。カタロスは少し困ったような顔で笑いながら言う。

「あの食器棚、大きいのお皿が一つずつしかないなんて、寂しいですよ」

そんなの、俺の勝手だろ。

「食べたものは置いておいてください。僕が片付けますから」

そう言ってカタロスは、俺より先に席を立った。

食べ終わった後の食器は軽く、俺はシンクへ向かった。あいつは放っておけと言っていたけど——。俺はシンクに水を張って食器を入れる。二人分の食器を収めたシンクは狭く見えた。

カタロスは俺の背後で窓枠に手をかけているらしく、キリキリと音と立てて窓を開けた。そう言えば、窓を開けるのは久しぶりだった。遮るものがない陽の光が床を打ち付ける。

「あ、それと洗濯物」

洗っておきましたら干しましょう。そう言って、カタロスは俺の後ろを通りすがっていった。洗濯物は列をなしてたなびく。風に吹かれて、思い思いの方向へはためいていた。

「……………」

いつも自分でしていたそれを他人がするのを見るのは、妙な気分だった。

部屋に残してくるつもりだったがついていくと言うので、俺はカタロスと一緒に街を出歩くことにした。仮にも脱獄者なのだから外をうろつかない方がいいと思ったが、そもそもこいつの顔を知っている人間はほぼ皆無らしいので、そんな心配もいらないう。

矢張りおかしい。こういう状況が発生した時の為にも、看守は囚人の顔を把握しておくべきなのだ。

カタロスの脱獄から二日経った。それなのに指名手配書が出回ることもなく、脱獄者が出たというニュースさえ流れない。

「わっと」

後ろで間拔た声がした。カタロスが通りすがりの人間とぶつかったらしい。

「何やってんだよ」

俺が意識して冷たく言っても、カタロスに堪えた様子はない。振り返る俺を見て、カタロスは照れたように笑う。奴は相変わらず隙だらけの笑顔で答えた。

「いやあ……こうやって長い間出歩くのも久しぶりで」

それはそうだろう。あの狭い監獄の中では、三步も歩けばすぐに壁にぶつかってしまう。どれだけあの中で鍛練をしていたとしても、長時間の歩行に足がついていけないのは当然だった。

「（というか久し振りって……どれだけあの中に居たんだ？）」

カタロスはまだ若い……ように見える。いくら多く見積もっても、まだ二十代のはずだ。もしこいつが二十代前半だとしたら、かなり早い時期からあの刑務所の中にいたことになる。

十代やそこらで、刑期一万年を宣告される。

一体どうすればそうなるのか。

見た限り、そうした過去の片鱗さえ見せないカタロスだが、警戒するに越したことはない。しかし俺のそんな懸念とは関係なく、俺に語りかけるカタロスの声は呑気で、しかもまた余所見をして通りの向こうから走ってきた子どもとぶつかりそうになっていた。俺は慌ててカタロスの腕を引っ張る。

「おっと」と

よろけたカタロスの身体は——見た目はひよろつちくても——それなりに、年相応を思わせる重量感があった。予想外の重さが身体にかかり、危うく俺まで転びそうになる。

それを悟られまいと俺は平静を装い、通りの端までカタロスをつぱった。そしてそのまま前を歩き始めようとする俺を、カタロスの声が呼びとめる。

「あ、そうだ」

俺は振り返った。カタロスはふふつと短く笑う。

「どうでしょう？この服」

そう言つてカタロスは、着ているコートの襟をつまみ上げる。牢から身一つで出てきたカタロスは、当然着替えを持っていなかった。今カタロスが着ているのはオールド・ワンのお古だ。オールド・ワンは「確かここにあったはずなんだけど」と言つて、長い間開けた様子のないクローゼットから、この服を取り出した。「いい感じだろう？」と奴が言う通り、シルエットはシンプルながら、刺繍された紋様は美しかった。

手触りも上等。まるで四、五百年前の貴族が着ていたような服だった。長身のオールド・ワンが着ていたコートは、カタロスの身体にぴったりフィットしていた。

よく似合っている。すれ違う女どもが面白いくらいに、カタロスの方を振り返る。控え目な、つまり飾る感じのない小綺麗な顔立ち、なんとなく奴を取り囲む上品な雰囲気、自然な笑顔、加えて長身。

女にしてみればこれ以上ないくらい、都合よく作られた存在なのだろう。もつとも、蓋を開けてみれば、シャツのボタンのかけ違いに最後のボタンに手をかけてから気づくような、子どもなのだが。

「別に……。お前だって、それが良いって言って選んだんだろ」

「ええ」

「まあ、悪くない」

俺の答えを聞いて、カタロスはにっこりと笑った。そして思いだしたように話しはじめる。

「今すれ違った人……黒いローブを被ってましたね」

「ああ、万密院の連中だろ」

俺は吐き捨てるように言った。

「万密院……」

カタロスはおつとりと俺が言ったことを繰り返した。

「ああ。『いつか救世主がこの世界に現れる』とか説き伏せる、頭のいかれた連中のことさ」

万密院が信奉するのは、神ではなく「救世主」だ。この街には「神によって一度滅びた」という伝説がある。万密院は「救世主が不在であった為、神はこの地を焼き払われた。『救世主の到来』により、悲劇の繰り返しは避けられる」としている。

普通、救世主というと「神の遣わしたる御子」ということになるが、万密院はあくまで「救世主は神の手によってではなく、人の中から生まれてくる」としている。

また、神の全能性を否定している為、万密院は商業による繁栄を認めていた。むしろ、奨励している。しかしそれも「いずれ来る救世主の為であれ」と説いて、万密院が——技術革新、及びそれによる世界の発展の為にという名目で設置した——院立研究所に納税するよう、商人達に強いている。

商人に技術や道具を与え、それを利用した商売で生じた利益を回収する。それが万密院のやり方だった。ただ、それは裏での話で、表向きは霊験あらたかな組織として認知されている。特に貧民層は、

万密院の教えに魅力を感じるらしい。

「救世主の到来により真に人類は救われる」という他力本願な教えは、弱者が掴む藁としては最適なもののだろう。そんな風だから搾取されるとも知らずに。

この国は議会制を敷いている。王の存在は形骸化し、完全なお飾りだ。市民の好感を買って議席を増やそうとする政党から援助を受け、商人達からは「協力」という形で道具を与えて金を巻き上げる。堅実ながら賢い万密院のビジネスモデルが、そこにあった。

そんなことを話してやると、カタロスは感心したように洩らした。

「へえ……。随分詳しいんですね」

「ふん……」

まあ、それはそうだろう。

ただ、思い出せることはそれほど多くない。

俺が万密院の人間だったのは、本当にほんのひと時のことだったのだ。

第一章 六話

俺が万密院にスパイとして潜入したのは、二年も前のことになる。場所は、ここから五十キロ近く離れた万密院統治下にある地方都市。奴らの技術と知識を万密院のものだけにしておくのが我慢ならない連中は多く、俺の依頼人も、そうした人間の一人だった。

潜入して早々、俺は万密院が所持する軍隊の一つ「グロワール・エペ」に配属された。表向き宗教団体として活動する万密院が軍事力を持つのは意外だろうか。勿論、公にはされていない。表向きは「自警団」ということになっている。

その名の意味は「栄光の前に翳される剣」。自警の為に存在するのは勿論、栄光〃万密院の言う「救世主が訪れた世界」に現れる万難を、排する為にあると言う。その為の慈恵に満ちた存在として、市民に宣伝されていた。

勿論、その為だけに、万密院が選りすぐりの兵を集めているわけではなかった。ただ、軍隊を維持する為に「自警の為」という理由が必要だったのは確かだろう。万密院は、あるものを探していた。

そして――それを邪魔する者を排除する為にグロワール・エペを創設した。俺のような人間がすんなりと採用されたのもそれが理由だ。親類は無く友人もない。そんな人間ならいつ消えても誰も不審がらないし、たとえ退団して周囲の人間にエペの真相を漏らそうと、社会的信用の無い俺の言うことなんか誰も信じない。

だからか万密院にいる人間の中でも、エペの連中は、どこか違っていた。

「お前か。今日からここに配属されると聞いている」

初出勤した時、廊下で俺を待ちかまえていたのは、ロングコートの軍服を着た男だった。

若い男だった。二十代後半だろうか。目深に被った帽子の底から、触れると切れてしまうような視線で俺を見つめている。どちらかと

いうと、軍人というより頭の切れる、若きエリート官僚といった感じだ。瞳の奥に冷えた知性が窺える。

「お前の部屋に案内しよう。ちなみに相部屋だ」

俺は黙って頷いた。互いに名乗らない。その必要も無いようだった。

エペの隊員には「寮」が与えられていた。決まった時間に寝起きと食事。寝る前には軽いストレッチをすることが義務づけられている。

通いは許されず、必ず入所しなければならないらしい。寮生というよりは囚人になったような気分で、俺は男の後をついて行く。俺が住むことになったのは、寮の一番奥にある部屋だった。

「入るぞ」

言うのと同時にノックをして、返事を待たずに、男はドアを開けた。恐らくこの部屋には、備品として支給された調度品しか置かれていない。この部屋にあるもので、人工的にデザインされた家具を見つけることはできなかった。

生きた人間の生活している部屋という感じがしない。それは多分、この部屋の中がそうだからというより、その部屋の中に住む人間のせいだったのだと思う。

「エスペリオ、今日からお前と生活することになった新人を連れて来た」

男に呼ばれて、ベッドのシーツがもそもそと動く。くるまっていたシーツを剥がして、それはこちらに顔だけ向けた。そして、エスペリオと呼ばれた人物は、そろそろと床に足を下ろした。

少年、のように見える。柔らかかそうな巻き毛は灰色。生白い足がシーツから覗く。陶器のようだった。床に指先が触れた瞬間、ぺたりという柔らかい音がするのが不自然に思えた。

そしてエスペリオは……笑った。俺を見つめて笑った。

俺の中にある何かを見透かしてそれに気がついたかのように、何かを探り当てたかのように嬉しそうなその視線に、俺は思わず肩を

退いた。

「こいつはルーチェ・イスタンテ・エスペリオだ。お前より二年ほど先輩に当たる」

仲良くしろとも自己紹介しろとも言わずにそれだけ言い、軍服の男は去っていった。

一瞬の沈黙。エスペリオはシーツを引きずって俺の目の前まで歩み寄る。そして、口を開いた。

「ゼーノはね、元々ああいう人だから気にしないで」

エスペリオは床に下ろした細い足を使って、俺の所に近づいてくる。ゼーノとは、俺を案内してきたあの男のことか。

エスペリオは俺の手を取ろうとする。俺は反射的に腕を退いたが、間に合わなかった。エスペリオに捕まった手の平が、彼の細い指の中に収まる。

「ゼーノも言ってたけど……僕はルーチェ・イスタンテ・エスペリオ。みんな、僕のことをエスペリオって呼ぶけど、誰か一人くらいはルーチェって呼んでほしいな」

エスペリオは笑った。鮮明に、それと分かるくらい微笑んで。

「だめかな？」

俺はルーチェの問いに答えなかった。答えられなかった。それを、俺に望むのかと。

ルーチェ・イスタンテ・エスペリオ。名前の意味は「鏡が照り返す一瞬の光」。

目の前に立っている鏡が俺の何を映し出そうとしているのか分からなくて、鏡の照り返してきた光が眩しすぎて、俺は彼を、正面から見据えることができなかった。

「……へーえ、なるほど」

静かに俺の話を聞いていたカタロスの声。奴は「信仰」という言葉の響きから程遠い俺が、何故万密院に居たのか納得したようだ。

俺達は肩を並べて中央通りを歩いている。正面に万密院下にある教会が見えた。その入口からぞろぞろと市民階層の人間が出てくる。説法でもあったのだろう。俺は教会の頂上を見据えた。そこに十字架はなく、救世主と思しき青年の姿を模ったレリーフが設えられている。

かつてこの街を焼き払った唯一神はこう語った。

『我は嫉妬する神である』

神のくせに狭量なものだ。神は自ら創造した人間が他の神を崇めることに嫉妬し、他の神への信仰を全て禁じたという。

「どうかしましたか？」

教会のてっぺんをぼんやりと見つめている俺に、横からカタロスが声をかける。

「別に」

俺は言うのと同時に踵を返す。その後ろをカタロスがついてきた。横に並んで、俺の方を振り向きながら奴は言う。

「スパイ活動は順調だったんですか？」

「いや、失敗した。というより、思いがけない事故に遭って中断させられたというか……」

「というと？」

「牢に居たお前は知らなかっただろうが……一年半前、万密院下にある一部の教会が武装勢力の襲撃を受けた。理由も首謀者も未だに分からない」

その当時、市民は元より、万密院自身がその出来事に驚かされた。正面切つて、堂々と教会を襲撃してくる奴らがいるとは思わなかったからだ。万密院やそのパトロン、万密院の力を利用することを考え始めていた政治家、あるいは万密院の教えに帰依する市民への何かの警告かと思われたものの、結局真相は掴めていない。

「それつきりだな。万密院とは」

俺はその混乱に乗じて、教会から姿を消した。恐らく死んだことになっているだろう。

教会が復興した後、その裏の墓地に俺の名前を刻んだ墓石があって、その下に空っぽの棺が埋まっているのかも知れない。

「もうグロワール・エペの方々とは、連絡をとってないんですか？」

「……ああ」

俺はそう答えたが、嘘だった。俺は一度、一年前にルーチェから連絡を受けている。

白い封筒の後ろに見慣れた名前。一体、どうやって俺の居場所を知ったのか。手紙の内容は「生きているのなら俺に会ってみたい」というだけの簡素なものだった。

返事はしなかった。その時すぐに、俺は住处を変えてソドムに移る。

しかし教会を見る度にルーチェのことを思い出していた。それは決して思い出などというような甘ったるいものではなく——強迫観念的に、彼を思い出していた。

今でも思い出す。

俺の目の前にあった、差し込む光を照り返す美しい鏡。

その鏡を覗き込んだ時。

鏡に映った自分の背後に見える、深い闇が恐かった。

第一章 七話

「ねえ……」

ルーチェの声がした。奴は、開いた聖書を顔にかぶせて寝たふりをしている俺を起こそうと、近寄って来る。

「本当はこんなもの、読んでないくせにさ」

そう言つてルーチェは、聖書の隅をつまみ上げた。中庭の隅にある大樹の下で寝そべる俺。その横に、ルーチェが座る。

「明日、ここをならすの者が襲うらしいよ」

俺の狸寝入りに気付いているのかいないのか、ルーチェは淡々と語った。

「明日はゼーノ達が『ネフィリム』の発掘調査に向かう日だからね。その隙を狙つてるんだと思う」

ネフィリムとは、この街が神に焼き払われる以前、存在していたとされる人々の事を言う。神話の時代、空から降りてきた天使と人間との間に子どもが生まれた。

人間は、自分達の監視者である天使「グリゴリ」をかどわかし、彼らの知恵を得ることに成功した。その結果生まれたのが「ネフィリム」と呼ばれる巨人達だ。人間が天の智謀を得た証とも言えるものども。

男は武器を振るう力を覚え、女は男を誘惑する術を身につけた。

神への信心は消え、街には略奪と姦淫がはびこるようになる。

それ故、神の怒りを買った。

「この間、大きな遺跡が見つかったでしょ？もしかすると、ネフィリムの中心都市だったかも知れない場所なんだってさ」

普段は子飼いの探掘家と護衛だけで済ませるものを、ゼーノ率いる第一部隊がわざわざ調査に出向くのはそのせいらしい。正確には、「指揮者がゼーノである」必要があったからだろう。彼はどんな逆境に遭つても揺るがない不屈の精神と、優れた策謀の持ち主だ。

「で、ゼーノの留守を狙った賊がここに忍びこんでくるってわけ。このタイミングは偶然じゃないと思う」

ルーチェは、一拍置いて、無言になった。

「この中に、スパイがいるのかも知れないね」

ルーチェの言葉を受けても、俺は寝そべったままだった。

「……で、上の判断は？」

「ゼーノが調査に向かうのに変わりはないよ」

ルーチェの歯切れの良い言い方に、俺はうつすら瞳を開けて彼の方を見遣った。ルーチェは笑っている。

「僕がいるからね」

俺は身を起こす。こちらに向かって誰かが駆けてくる音がした。

そして、軽い足取りに似合う声が俺を呼んだ。

「おいお前ら、もうすぐ昼メシ前の訓練が始まるぞ！」

ジェット・ガジェットイーノだった。エペの中にあつて、彼の懐っこさは人目を引く。

「声がでかい……。それに、言われてなくても分かっているさ。今行くつもりだった」

立ち上がる俺を見てジェットは満足そうに頷いた。

「おっし！じゃあ行こうぜ行こうぜ、なあ早く！」

散歩に連れて行けとせがむ犬のようにジェットははしゃぐ。

「分かった分かった……」

俺はジェットの前に向かって一歩踏み出す。

ふと、背後から視線を感じた。

背中の上を這い回るような視線。どこか面白半分はこちらを見つめている。それがルーチェのものだとすぐに気づいて、俺は少しだけ背後を振り返った。

ルーチェは笑っている。うつすら微笑んで、俺と俺の腕を掴むジェットを見つめていた。

翌日。賊が襲撃してくることはなかった。俺はその情報源がどこ

から出回ったのか調査してみたが判然としない。

「それどころか、誰も知らなかったっていう話だしな」

俺のベッドの上にジェットが寝そべる。ルーチェは留守だった。

「ってというか俺も、お前から聞くまで知らなかったんだけど」

続けざま、ジェットは「よっ」と言って身を起こした。

「となるとだ。あんまり呑気にもしてられないわな」

そして表情に似合わない、緊張味のある口調でジェットは言う。

同感だった。ジェットは、俺と共にエペに送り込まれたスパイだ。俺もルーチェに聞くまで襲撃計画のことを知らなかった。デマの出し所はルーチェだった可能性が高い。問題は、何故奴がそんな嘘をついたかということだ。

「気付いてるんじゃないか？ルーチェって奴、俺達の正体に」

ジェットの言う通りだった。ルーチェは俺達に揺さぶりをかけたつもりだったのかも知れない。するとそこに、疑問も生じる。

「だとすれば……どうしてルーチェはそのことを黙ってるんだ？俺達がスパイかも知れないことを、誰にも話していないように見える」

今の所、俺達に監視がついている様子は無い。手紙だって、検閲を通すが、出したり受け取ったりできる。夕方の散歩の時間にだって、自由に街中を出歩くことを許されていた。

「どうも嫌な感じだよなあ……」

そう言ってジェットは寝ころぶ。シーツの上にあった枕が奴の肩の下敷きになった。すかさず俺は警告する。

「おい、それは俺の枕だぞ。潰したりしたら承知しないからな」

「へいへい……。お前って、実は綺麗好きだよなあ。この窓の棧だって、毎週お前が掃除してるんだろ」

「実はって何だよ。それに俺は普通だ。お前がずばらなただけだよ」

「はいはい……」

そう言ってジェットは、俺の枕を抱きしめて寝転がる。潰れた枕が、ジェットの腕の中で窮屈そうにしていた。

「おい……」

俺は言おうかどうか迷った。

しかし、試しに——冗談っぽく、言ってみることにした。

「おい、殺すぞ」

ジェットは枕を抱えたまま俺を見る。ジェットは俺の能力を知っている。俺が手を翳すだけで人の命を奪えることを。

ジェットは黙っていた。しかし、奴は笑っている。沈黙するその口元は、笑っていた。

不意に伸ばされたジェットの腕に、俺は一瞬身じろぐ。ジェットの指の節々が、俺の頭に触れた。

「できないよお前には」

そう言つてジェットは、俺の頭を撫でた。

確か弟がいるのだと聞いた。だからなのか……慣れたような手の動きが、俺には新鮮だった。

「お前は殺したくて人を殺すような人間じゃないから無理だね。お前は犯罪者だけど、悪人じゃないから」

俺はジェットの手をはねのけた。ささくれだった指が潔く俺の頭を離れる。

「その能力があつて良かったって思ったことはあるか？」

そこに追従してくるジェットの声。もうその口元に、先ほどまでの笑みは無かった。

「『その能力を持って生まれて良かった』って、思ったことはある？」

黙った俺を見つめるジェットの表情は穏やかだった。俺を責める風でもなく——俺の答えを待っている。

「別に……」

俺はこの能力のお陰で食いぶちを繋ぐことができる。暗殺者として生きていけるのも、この力のお陰。この力すら無かったなら、こうしてジェットに出会うことも無かっただろう。それが望む望まないに関わらずの、偶然の出会いだったとしてもだ。

「……ごめん。変なこと訊いた」

そう言ってジェットは憂愁の表情を見せる。初めて見た彼のその表情が意外で、俺は思わず息を呑んだ。

ボスッ。

瞬間、俺の顔に枕が命中した。

「はははっ、甘いなあ」

なっ……！

「そんなことで俺がビビってると思ったら、大間違いだから」

そう言ってジェットは再び腕を伸ばしてくる。

「やめる触るな……！」

俺が抵抗を見せると、ジェットは楽しくして仕方がないと言わんばかりに微笑む。

そして。

素早くベッドから倒れ込んできたジェットが俺の脇腹をくすぐる。

「くそっ！」

なんとか向こう脛を蹴りあげてやると、ジェットは思わず俺から手を退いた。

「いつてー！にやろうー！」

自分から仕掛けてきたくせに……。そう言う暇もなく、俺達は床の上を転げ回ってどつきあった。

数分後。肩を怒らせて息をする俺を見て、ジェットは笑った。

「はは！ひでー顔！」

こいつ……。本当に殺されたいか。口元を拭うジェットは、俺を見て満足そうに言った。

「取っ組み合いの喧嘩なんて久しぶりだな。小さい頃はよ兄弟喧嘩もしたけどな」

ジェットの家は三兄弟だそうだ。幼い頃は、取っ組み合いの荒々しい喧嘩を毎日したという。ジェットはすつくと起き上って、俺に手を差し伸べた。

躊躇ったがその手を取ることにした。俺はジェットの柔らかい手の平を握って、背中を起こす。

「まあ、また暴れなくなったら、いつでもお兄さんに言いなさい」
そう言ってジェットは部屋を出て行った。ちゃんと閉めると言っているのに、今日もドアを半開きにしたまま帰って行った。

「ったく……」

何がお兄ちゃんだ。俺より年下のくせに……。

俺も正確な自分の年齢は知らない。ただ、赤ん坊の頃に組織に拾われたことを思えば、推定年齢と実年齢との間にそんなに差はないはずだった。

俺はふと、ジェットに握られた手の平を見返してみる。

まだ手に残っている感触は暖かった。この後俺に差し伸べられるメレグの手の冷たさを思えば、なおさらだった。当時の俺は、そんなことを知る由もなかったけど。

「またお兄さんに言いなさい」

いつ死ぬとも分からないこの世界で言うジェットの言葉は、この上なく不確かだった。何の保障もない。

ただその言葉がとても彼らしいものであることを、俺は静かに実感した。

俺とカタロスが揃いでアパートに戻ると、ドアの前に誰か居た。俺が身構える前に、そいつは澄ました声音で声をかけてくる。

「こんばんは」

オールド・ワンだった。しかしその表情にいつもの気安さが無い。カタロスも奴から尋常でない気配を察したようで、横に並ぶ俺に不安げな視線を寄越す。

「君たちと一緒に来てほしい所があるんだ。急を要するものでね」
いつも悠然しているオールド・ワンの「急を要する」という言葉と、否定を許さない強い口調。俺は横にカタロスを並べてオールド・ワンの案内する場所に向かった。

そこは見慣れた場所だった。階段を上がり、ノックをして返事を

待たずに扉を開ける。

「メレグちゃんは奥の部屋にいるよ」

そう言うオールド・ワンの先導で、俺とカタロスはメレグ診療所の奥に向かった。

そこは今まで一度も入ったことがない部屋だった。入ったことがあるはずが無かった。

部屋に置かれたベッドの前にメレグが立っている。

「では、これから報告させていただきます」

俺とカタロスは、並んでベッドの端に立った。

「…… よろしいですね？」

メレグの透き通った声に、俺は相槌だけを返した。

そして久し振りに対面する、死体となったジェットを、俺はしげしげと観察した。

一年半もあれば、この年頃の少年はあつという間に変わる。しかし良く見れば、変わったのは髪型と身長だけで、表情は変わっていないように思えた。きつと、中身だって変わっていないかったのだらうと、なんとなく想像する。

「ジェット・ガジェットイーノ。本人で間違いありません」

ここはメレグ診療所の遺体安置室。ジェットの検死をしたのはメレグだという。だとすればその言葉を信じるしかなかった。彼女は腕は確かなのだから。メレグはジェットの身体にかぶせたシーツに手をかけた。

「ご覧になりますか？あまり趣味のいいものではありませんが」

話は既にオールド・ワンから聞いていた。ジェットの身体に二目と見れない拷問の痕が残っているのだと。

「顔だけは傷つけられなかったのが不思議です」

そう言う静かなメレグの声。確かにその通りだらう。けれど、俺には想像できていた。きつとどんな拷問を受けても——ジェットは笑っていたのだらう。俺の記憶に残る、あの無邪気な笑顔で。執行

人達も、あの笑顔だけは傷つけられなかったのだ。

哀れに思えたからではない。

恐ろしくなったからだ。

どれ程傷つけても、決して口を割ろうとしない彼の意志と、彼らを見つめるまっすぐな視線とに。

最期までジェットは、そう在ったのだろう。この穏やかな表情が、何よりの証拠だ。

一度だけ考えてみたことがある。もし俺がジェットより先に死ねば、彼の言うとおり、こいつが俺よりも「お兄さん」になることもあるのだろうか。

その機会は永遠に失われた。

「では、検死の結果を報告させていただきます」

メレグの声が淡々と続ける。俺は横に並ぶカタロスの視線を感じた。カタロスは俯き、身を切られるような顔をして俺を見ている。

何故そんな顔をするのだろうか。目の前にいるこの男は、お前にとって赤の他人なのに。その表情は、誰に対するものなのだろうか？

ジェットか、あるいはジェットを失った俺に対するものなのか。

そんなものはいらない。

この世界に生まれ、この職業で生きていくことを選んだ時から、それは必要のないものだった。

俺もジェットも、果たされない約束はしない。

だからあの時——俺は「また言いなさい」という彼の言葉に、答えなかったのだから。

第一章 八話

カタロスと揃いで通りに出た。嫌な感じの風が吹いている。吹いたかと思えば止まり、止まったと思った途端、前髪が風にさらわれる。すっかり暗い通りの向こうを、ちぎれた新聞かすが舞っていた。冷めた空気が、通りを歩く俺達の頬を掠めていく

カタロスは何も言わない。黙って俺の、半歩後ろを歩いている。気遣っているつもりだろうか。

俺は別に、しみつたれた顔をしたりはしていない。生憎今の俺に、そんな顔はできなかった。

ただ、思い出していた。

組織に拾われて以来、俺はジェットと一緒にいることが多かった。仕事の上でコンビを組まされたのは、ほんの数回だったけれど。

俺が思い出せない時間の中でも、俺とジェットはどうでもいい話をして、どちらが身長が高いかで揉め、奴は俺が残した人参やピーマンを横から奪って、そして……いつも、俺の前を歩いていたのに違いない。

自分はお兄さんだからと言って、嫌がる俺の腕を掴んで、「ほらよ」と言って、俺の目の前に丘から見下ろせる街並を突きだす。

そこはお気に入りの場所だと言ってた。だから、秘密の場所なのだとも。

いつでも俺の前に先立つジェットの声。節くれだった無骨な指。もうその手に掴まれることもない。そんなことにも、たった今気づいたけれど。

「腹が減ったな……」

呟いてから、腹が減っていることに気付いた。呟いてから、「ああそういえば本当に、腹が減ったな」と思う。

朝（というか昼）はカタロスが用意したものを食べたが、夜のことは考えていなかった。男二人分（俺もカタロスもそんなに食べな

いが)の食糧が家にあるかどうか、少し怪しい。

カタロスは、スツと俺の横に並ぶ。俺が気丈そうだと知って安心したらしい。奴は弱々しい笑顔を見せて笑った。家に帰ってメシを食い、俺の隣でカタロスが横になる。

奴のベッドはオールド・ワンが寄越してきたものだ。「カタロスくんを床に転がしておくわけにはいかないだろう?」と言ってその日の内に運びこんできた、紫檀製のベッドだった。

奴はどうあっても庶民にはなれない男なのだろう。小市民のワールームにこんなものが似合うと思っっているのだろうか?

俺はそんなことをカタロスと話した。カタロスは笑って「血筋より育ちですよ」と言う。

そうだろう。きつと「オールド・ワン」に生まれたからではなく、ごく自然にあの男は、ぼんと高級なものを人にくれてしまう。部屋隅にある食器棚だって、その中にある陶磁の皿だって、あいつから譲り受けたものだ。「欲しい」と言ったら覚えはないが、「そんな物はうちにない」と言ったら寄越してきた。気前よく気兼ねなく、笑いながら。

カタロスと俺は黙った。どこか無理のある空気。傷口に触れぬよう気遣う、余所余所しげな態度。

「気遣わなくていい」

堪えかねて俺は言った。天井を仰いでいたカタロスの顔が横を向く。奴は俺の方を向いて、息を呑んだ。けれどそれっきりだった。

俺は前を向いたままで、カタロスも俺から視線を外して天井を見る。死。

こんな仕事をしておいてなんだが、死について考えたことはあまりない。

「死について考えたことはあまりない」

俺の独白を聞いてもカタロスは黙っている。俺は穿ったナイフがもたらす死の意味も、死という結果を以て得られる報酬の意味も、まるで考えたことがなかった。報酬を得てまで何故生きるのかとい

うことも。

考える必要は無かった。

生きていく為に、一々理由が必要だろうか？

理由がないければ、生きてはいけないのだろうか？

そうではないだろう。

だから考えない。

カタロスは黙って俺の独白を聞いていた。同意も反論もしない。

そう俺はただ、聞いて欲しいだけだった。理解してもらおう為にだ。俺がそういう人間なのだという事を、死による喪失に対して、何の慰めを必要としないことを理解してもらおう為に。

それでも、分かったことがある。葬送の道を歩み始めたジェットを見て、俺ははつきりと自覚した。

死んだジェットを見て初めに思ったことは、ジェットとの申し訳程度な思い出とか、悲しいという感情だとかそんなものではない。

そこにあるのは「実感」だった。

ジェットにあったかも知れない未来の「可能性」が、今ここで全て失われてしまったのだと。未来は、全て断たれたということ。死とは多分、失われることだ。命が奪われるとは多分、可能性が奪われるということなのだ。ジェットの遺体を見て、そう思い知る。たとえばジェットに女ができたとする。首尾よく付き合えるようになったら、どうやって「初めての夜」に持ち込もうか悩むだろう。そして女と身を固めるのを機に、この世界から足を洗って「まっとうな」人間として生きていくかも知れない。

あるいは、この世界のトップに上りつめ、名前を聞く度に誰もがギックリするようなギャングになっていたかも知れない。もう俺なんか手の届かない「一流の人間」になっしまい、そうなれば、二度と俺の腕を掴んだりなんかしないだろう。

けれど、どの未来も、もうこの世には存在しないのだ。

俺の言葉を聞いて何と思ったのか、カタロスは黙っていた。俺はそっと、横にいるはずのカタロスを見遣る。カタロスは俺の方を見

ていた。俺を見て笑っている。笑っているくせに、俺から目を逸らすようとしている。

正視に堪えない。けれど、目を逸らしてはいけない。そう思わせる表情だった。

「なんでお前がそんな顔してるんだよ」

夕方にも思ったことだが、問い詰めたのはこれが初めてだった。カタロスは厳かな声で答える。

見知らぬ他人とは言え、人一人の一生を語るからだろう——いや、知らないからこそか——失くしたたものを一つ一つ確かめるように、カタロスは言った。

「ジエツトさんが理不尽な運命を憎むことも、それをもたらした者達を恨むこともないような顔をして死んだことが、彼の死に顔からよく分かる。それが悲しいんです。そんな人が、この世から失われてしまったということが」

俺は佇まいを直してカタロスを見つめる。奴は「死んだから可哀相」だとか、知り合いが死んでしまった俺が不憫だとか、そういうことを言いたいわけではないらしい。カタロスは粛々と続ける。

つまりこの男もまた、この世界に存在していた「可能性」が一つ失われたことを実感したのだ。それを嘆いているらしい。

カタロスは想像力が豊かな男なのだろう。だから、そこにあったはずの可能性を思っただけ泣くことができる。そこにあったはずの人生を想像できるから——それが失われた悲しみを思っただけ泣くことができる。

起きたら目の前にカタロスの顔があった。いつの間にか近い距離まで寝返りを打ってきたらしい。俺はカタロスの横腹を蹴とばし、うんうん唸るカタロスを放置してキッチンに向かった。

顔を洗い、短く支度を整える。壁にかけておいた黒いジャケットに手を伸ばした時、寝ぼけた瞳がこちらを向いた。間抜けなカタロ

スの声がへろへろと俺の耳を掠めていく。

「あの、どこに行くんですか……？」

何故自分を置いて行くのかと言わずにそれだけ訊くカタロスに、俺は手短かに言った。

「調べなければいけないことがある」

そう返すと、カタロスはゆっくりと体を起こした。瞳はまだ寝ぼけているが視線は真摯だ。

「……気になることが、一つだけある」

昨夜——別れ際に告げられたオールド・ワンの一言。

「最近、新聞の片隅に小さく載る記事がある。連日のように載っているけど、新聞をとっていない君は知らないかも知れない」

確かにここ一週間、俺はレストランに寄りつかなかった。お陰で新聞を読んでいない。

「ここ数日、各地で変死体が見つかったている。それもただの変死体じゃない。問題なのは、死体そのものではなく、彼らに共通する特徴だ」

オールド・ワンの声はゆっくりと吐き出された。その緊張感に煽られて、俺の後ろにいるカタロスが肩を震わせる。

「全員、万密院に侵入した過去があるんだ」

ジェットの名前が昨日の新聞に載っていたことも、俺はその時初めて知った。

「たまたまなのか、意図的なものなのかは分からない。ただ、どうか気をつけておいて欲しい」

ジャケットを掴む俺の背後で衣ずれの音がする。振り返る俺を見つめて、カタロスは笑った。

「どこか心辺りがあるんですか？」

問われて俺はこっくりと頷く。ジェットの遺体は郊外の街道の上に野ざらしになっていた。しかし彼はそこまで歩いて行ったわけではない。

そう、彼は拷問を受けたのだ。誰かに殺されている。

そしてもう一つ分かっていることは、ジェットが何かの仕事の最中だったということだ。

「ジェットくんは、何かの任務の最中だった。これは確からしい」
オールド・ワンが何故そのことを知りえたのか……。それを察するの簡単だった。

懐かしいとか、そういう感情は特にない。ただ、久しぶりに訪れることを思ってたため息が出た。

そう、本当に訪ねるのが久しぶりだと。

カムラッドという名前だった。

そこが俺を拾い育て、俺が出て行く時も何も言わずに送り出した場所の名前だった。

第一章 九話

駅に着いたのは昼過ぎだった。俺はカタロスを連れて時刻表を探す。次の列車が来るまで一時間あったので、レストランで昼食をとることにした。メニューは魚料理が主流だった。悪くない。

機関車が登場したのは、万密院がネフィリムの遺物をほんの一部にせよ、解明することに成功した後だった。なんとか実用化できるレベルまで開発し、大陸中にレールを敷いてその上を走らせることができるようになった。

「グリーンピース、嫌いなのか？」

俺は緑色のちっこい奴だけかわしてフォークを動かすカタロスに言っただけだ。

「恥ずかしい話、この歳になっても子どもが食べられるようなものしか食べれなくて」

この歳っていくつだよ。俺は思ったことをそっくりそのまま言うてみる。

「いくつに見えますか？」

まじまじと……俺はカタロスを見つめた。俺の正視に耐えて微笑んでるその口元は若い（口元は意外と年齢が出るものだ）。視線を上げた先には筋の通った白い鼻。顔立ちは上品で洗練されているという印象なで穏やかな瞳。

兄、という感じがした。歳の離れた。兄弟なんかいたことはないが、なんとなくそう感じる。

カタロスは笑った。目尻が下がると、その印象も違って見えた。兄というより、父かも知れない。

「そんなに真剣に考えなくていいですよ」

「そうだな……」

会話はそこで打ち切り、会計を済ませて停車場に向かった。珍しく時間きっかりに来た列車に乗って、俺とカタロスは西に向かう。

アイゼンブルク。そこにある赤と白の町並みが見えてくるまで、俺は居眠りすることにした。カタロスは後方へ流れていく風景に夢中らしく、ずっと横を向いている。

引っ越しをする時、俺はカムラッドから足を洗った。カムラッドの連中が気に入らなかったからとか、報酬の払いが悪かったからとかではなく、足がつくのを恐れたからだだった。

ルーチエに居場所を知られるのが怖かった。手紙を受け取ったその日の内に――俺はカムラッドを訪ねた。当時の窓口担当だったフエルゼンは俺の話を聞いて、「そうか」とだけ言って書類を一枚、ポンと目の前に差し出した。俺が慣れない万年筆を使って名前をさらつと一度だけ書き、血判を押すだけで事が足りた。

曲りなりにも（頼んだ覚えはないが）俺を拾い、育てた組織なので、去り際に「世話になった」とだけ言い、俺はカムラッドを出た。二度とその床を踏むことはないだろうと思った。

目の前にあるカムラッドの建物は、何一つ変わっていないかった。しかも往來のど真ん中にある。銀行のようにも見えるその建物が犯罪者の斡旋を行っていると思っただろう。事実、そこは表向きは銀行を営んでいる。その裏の顔を知るには「チケット」が必要だった。

客はこの「チケット」を必ず持っていなければならない。チケットが欲しければ、既にもらっている人間から譲り受ける必要がある。カムラッドは「招待客」以外からの仕事を受けない。カムラッドは身元の割れた、ある程度信頼できる人間からのみ仕事を受けた。

そのせいか、カムラッドにいる連中も幼くして孤児になった者が多かった。カムラッドは過去の経歴をわざわざ調べなくてもいいような人間を好んで集めた。

で、孤児が集まり易い環境にあつて、自然同僚に親近感が湧いたかと言えば、そうでもない。カムラッド（仲間）という名前に反して組員はみな、それぞれ好きな場所に住んでいる。窓口となる支部は本当にただの「窓口」で、誰がどの仕事を請け負うかは、全て本

部で決められていた。俺達は支部からお呼びがかかった時だけ集まって、それ以外の時は好きなように過ごしている。生活費は与えられるが「寮」というシステムはなかった。

それに、俺のように外へ出て行く者も多い。人の出入りが激しい為、人間関係は希薄なものになり易かった。カムラッドは中から外へ出ていきやすい環境なのだ。他の組織ならこうもいかないだろう。だからこそジェットの人懐っこさは尚更珍しかった。本当に、あの男だけが特異だった。

「一年半ぶりか」

ルーチエから手紙をもらってすぐにこの地を発ったから、そのはずだった。

俺は一番左端の窓口に向かい、そこで頼杖をついている男に声をかける。きりつとしていればいい男に見えるものを、あくびをこいて締まりのない顔をしているのが、それを台無しにしていた。

「……よお」

どう切り出すか迷った。しかし、形式ばった言葉遣いをする気にもなれなかった。俺の声に気付いた男が、頼杖をついた掌から顎を上げる。

「おつ……と。これはこれは……」

俺に気付いて目を瞠るのも一瞬、男はすぐに営業スマイルを見せて笑う。銀行員の制服を着ているくせに、緩いパーマと浮薄な笑顔のせいで伊達つばい。相変わらずまだ自分が遊び盛りだと思っているのだろ。若い男向けの香水をつけて、仄かなその匂いを手首から漂わせている。確か今年で三十になるのだと聞いた。

「いや、まだ二十九だよ」

そろそろ年相応の恰好をしたらどうだという俺の言葉を前に、彼は笑った。

少しも変わっていない。

俺が去った後も窓口立つフェルゼンの笑顔、軽快な喋り口。ここは確かにカムラッドで、かつて俺が居た場所なのだと——実感し

た。

フェルゼンはジェットの上司に事情を説明して、俺に話を通るように取り計らった。俺は元々ここに居た人間、ここで育った時間も長いから、それほど執拗な審査も必要なかった。

それにその上司は、俺の「教官」でもあった。俺にナイフの使い方、足音の消し方、仕事を終えた後は絶対に現場に戻ってはならないことを――教えた人物だ。しかし、「顔を合わせたいが生憎接待中だ」とかでその面を拝むことは叶わなかった。尤も俺は、そんなことを望んではいなかったが。

「で、ジェットが受けていた仕事のことだけど」

フェルゼンはペシペシと人差し指の先で書類を叩く。

「彼は万密院統治下の教会にもぐり込んでいた。理由は不明だ。場所……今お前が住んでいるソドムという町」

そうなのだと聞いている。オールド・ワンがそう言っていた。

「まあ、クライアントが理由をしゃべりたがらない訳も想像はつくがね。因みにクライアントの名前も話せない。守秘義務ってやつさ」
クライアントがこの仕事を持ちこんだ理由と、それを話せない理由も、俺にはなんとなく想像できていた。今日に至るまでに多くの組織、企業が万密院が持つ技術の出所を探っていた。

どんな商売も、結局元締めが一番儲かる。万密院が持つ打ち出の小づちを狙う者は多かった。ネフィリムの遺物を独占している彼らは、先人が残したオートマータ（今一般に普及している機械と、ネフィリムが生み出した機械的な装置は区別されている）を所有しており、その設計図も一部は残存していた。

万密院は石炭に代わる新しい動力源の開発も進めているらしい。近い内にレールすら必要のない陸上貨物列車が登場するのではないかという噂さえある。

「ジェットが仕事を引き受けて向かった先は、中央通りに設えられたキャンディッド教会。ジェットがそこに向かったことは分かっ

いる」

ここに向かい——そしてそれが、ジェット最後の仕事になったのだ。きつといつものように、仕事を終えてここに帰ってくる自分を信じて疑わなかっただろう。いや、そんな想像をしてみることすらしなかったかも知れない。

「ところで彼氏、どちらさん？」

不意に報告を打ち切るフェルゼン。フェルゼンが視線を送った先にはカタロスがいた。

「そういうのは先に訊けよ」

俺の突っ込みを受けても、フェルゼンはへらへらと笑った。

「いや、なんか当たり前にお前と一緒にここへ入ってきたからさ。あれー？こんな奴いたっけなー」。とか思っスルーしてたんだけど、でもお兄さん、ここで働いたことがあるように見えないしね」

確かにそれはそうだ。コートの下はそれでも……カタロスの顔には傷一つない。その細い指も、力仕事には如何にも不慣れな感じだ。何より近寄るだけで邪気を抜かれるような笑顔。隙だらけに見える佇まい（事実、隙だらけだった）。

「ただの連れだ。こいつには何の力も無い。安心しろ」

「確かにそのようで」

「世話になったな」

確かこれは、いつかここを去った時にも言った言葉だった。その相手も今と同じく窓口に立つ、浮薄な笑い方をする男フェルゼン・ノールだ。

必要なことはもう全て聞いた。次に会う機会はあるだろうか。俺の方からそれを持つ機会は、多分無い。フェルゼンは笑う。俺を見て、けれどどこか遠くから俺を見つめるように。

「いつてらっしやい」

と、そう言ったのだ。

そうだ。確か——まだ俺がカムラッドの一員だった頃、俺が仕事の内容を確認しに来る度に、あるいは仕事の報告を終える度に、彼

はこんな風に笑って言ったのだった。

また来いとも言わず、また会おうとも言わずに。

丁重に頭を下げるカタロスに、フェルゼンはひらひらと手の平を振り返す。

この男は何一つ変わっていないかった。俺が去った後もこれまで通り、この窓口の前で頬づえを突いたり、若い女性客に声をかけて顰蹙を買うという馬鹿を繰り返すのだらう。

何度でも。いつか終わるとしても。それまでの間に、何度でも。

第一章 十話

自分の足音の大きさに驚くぐらい静かな夜の教会。その中を行く俺の後ろを、カタロスの長身がひよこひよこついてきた。暗闇に浮かぶランプの炎。下から煽るような炎の光が、聖母の顔に影を落とす。

俺とカタロスはキャンディッド教会に侵入していた。この教会はいわゆる「カテドラル」という種類のものだ。大聖堂とも呼ばれているが、その見た目はまるで砦のようだった。「聳えている」という表現がよく似合う。そんな要塞のような教会で、俺とカタロスは不法侵入をはたらいていた。夜の暗闇の中で、偽善たらしい聖母の像が不気味に微笑んでいる。

「ここですね」

小さな声でカタロスが語りかけてくる。一番奥の懺悔室の、さらにその奥にある掃除用具入れ。俺は足音を殺して用具入れの前に立った。そのままひっそりした用具入れの扉を開ける。

用具入れの中は乱雑だった。モップとモップが重なりあって、どれか一つを動かせば全部倒れる、ドミノのような状態だ。俺はそつと、モップ林の向こう側に触れてみた。壁に俺の指先が触れる。

カコンという音がした。続けざま、俺は足元にあるバケツに足をつっこみ、そのまま足首を右方向へ九十度曲げた。今度は引きずるような重い音がして、俺とカタロスは揃いで一歩、後ろに下がる。

ゴリツという、石がレンガの上を擦るような音がして――用具入れの向こう側に、ぼつかと口を開けた暗闇が広がっていた。そして鈍い音を一度立てたきり、暗闇は再び静かになった。

「これがジェットが持ってたのと同じ地図だ」

俺とカタロスがカムラッドを出る直前、フェルゼンは「少し待つ

てろ」と言って受付の奥に引っ込んだ。奴は俺達をロビーに十分間待たせて、右手に真新しいケント紙を持って戻ってきた。そしてそれを、ぼんと俺に渡してきた。ツルツルした表面に鮮やかな黒のインクが載っている。奥行きを感じさせない、点と線だけでできた白地図。

キャンディッド教会の平面図だった。

「お前が書いたのか？」

図面は走り書きだ。手書きのものだとすぐに分かる。しかも描かれてまだ間もない。フェルゼンはへらつと笑った。

「ああ。だから、乾くまで指でこすったりするなよ」

そう言っただけで人差し指を伸ばし、奴は右手で拳銃のポーズを作った。俺の心臓に狙いを定めてそのままバキューン、とは言わずに人差し指の銃口を天井に向ける。

地図の片隅には「フェルゼン・ノールより愛をこめて」と書かれていた。字は有名人のサイン風の一発書きで、名前の後ろにはハートマークさえ描かれていた。もう二度とこの建物の床は踏むまい。「この教会の奥には隠し通路がある。ジェットはその奥にあるものを調べていたんだ」

そして、そこで彼は、命を落した。

「じゃ、いつてらっしゃい。またなんかあったら連絡してくれ。縁があつたら、また会いましょ」

そう言っただけで微笑むフェルゼンは、俺にひらひらと右手を振った。そしてそのまま片目をつむる。そんなフェルゼンを二度と振り返らずに、俺は肩で風を切りながら出口に向かった。カタロスは「お世話になりました」と言っただけで頭を下げて、慌てて俺に追いつく。カムラッドを出たら、俺は自然と呟いてしまっていた。

「何なんだよ……」

口にするつもりは無かった。しかし、気がついたら声に出ていた。もう二度と俺に会っても会えなくても同じことのくせに、何故フェルゼンはあることを言うのだろう。

「いつてらっしゃい」

まるで、俺が帰ってくるのを待っているようじゃないか。

あの男はいつだってそうだ。俺がカムラッドに居た時からそうだった。俺がカムラッドを出て行った時も、そうだった。今もよく覚えてる。振り返らない俺に、あいつはそう言ったのだ。けれど、「また会おう」とは決して言わない。

受付という仕事をしているせいだろうか。人を見送り、あるいは受け容れることができて、引き止めることは決してできない職業だ。

扉の奥は長い廊下だった。等間隔に照明が並んでいる。電灯という奴だ。高級ホテルや公的機関では使われている所が多いが、まだ一般には普及していない。それらが惜しげもなく、墓石でも並べるように置かれていた。

「やつぱりここは『プレリー』なんですね」

カタロスが呟いた。俺は頷く。俺達——いや、俺はもう違うが——カムラッドの人間は、万密院統治下にある施設を「プレリー」と呼んでいる。「牧場」という意味だ。そして、プレリーの主を「エルブル」と呼んでいる。これは「牧場の主」という意味。プレリーに所属する者はエルブルに支配され、エルブルは万密院の命をこなす為に笛を吹く。プレリーという「柵」の中にいる子羊達を操る為に。俺がいた「エペ」もこれと同じ構造をしている。

ただの通路に電灯をつけておくくらいだ。このプレリーは、万密院と相当近い位置にあるのだろう。

「お前、電灯を見るのは初めてか？」

ふと気付いたので訊ねてみる。俺は「電灯」を数えるほどしか見たことがない。最初見た時は、驚いたというより、違和感を覚えた。電気という「目に見えない」ものが「灯り」をつけていることが、不思議だった。

「いいえ。ただ、贅沢だなあと思って」

全くだ。この建物の一步外出れば、マッチ一本買えないでいる乞食もいる。

「着いたみたいですね」

そうカタロスが言うのと同時に、俺は足を止めた。フェルゼンが寄越した地図によれば、この先に階段があるはずだった。目の前には「立入禁止」と書かれた扉が立っている。

「階段の前に扉があるのって、変な感じですね」

それは俺も思った。しかし、これはやむを得ずの処置だったのだと思う。俺はゆっくり、扉を開けた。

一步前に進むと、一気に空気が湿った。靴を履いているのに、石でできた階段がじつとりと濡れているように感じる。

先頭にランプを持った俺、そのしんがりへのつぼのカタロス。その隊列を維持したまま、俺とカタロスは地下への階段を降りていた。「……………」

カタロスは黙っている。さっきからなんだかんだと俺に話しかけていた彼も、口数が少なくなってきた。階段が途切れて踊り場に変わる。足音が途切れて、急に辺りは静かになった。命あるものの気配はない。俺は目の前の、鉄格子の扉を開ける。

ギィ……という鈍い音とは対照的に、扉はすんなり開いた。意外なくらいに軽い。薄明かりが灯っているので部屋の中を見渡すことは簡単だった。ひと目で見通せるくらい、中には遮蔽物の類がなく、むしろ、よく片付いているという印象だった。

本当に、よく片付いている。

よく、片付けられている。

この中に命あるものの気配はなかった。あるのはただ、殺戮された命の残骸だった。

それがジェットのものだったのかどうかは分からない。人の背丈くらいはある作業台の上に、御無体に置かれた人間の右腕。

確か遺体安置室で見たジェットの跡には、右手が無かった。腕ごとごとすり無くなっていたからだ。切断面から、それは切られたのではなく、もぎ取られたのだと分かった。

俺は作業台の上の右腕を見る。万力のようなもので力任せに引き抜かれたのであろうことが窺えた。ジェットが俺に向かって手を振る時に使っていた右腕が、台の上に転がっている。思わず息を呑んで口元を歪めたカタロスをその場に留まらせて、俺は部屋の中の探索を始めた。

壁に立てかけられた糸ノコのような刃物。よく洗ったつもりだろうが、黒ずんだ肉の塊が刃と刃の間にこびりついている。戸棚の中にある薬品。作業台には、それをこぼしたことで空いたと思われる穴がいくつも空いていた。人の体の上からかけても穴が空くのだろう。

拷問部屋。ジェットが仕入れていた、ここが万密院の私設拷問室であるという情報は正しかった。階段の前にあった扉は防音目的で作られたのだろう。それはここに侵入して、そして帰ってこなかったジェットが一番よく知っていただろう。

俺は部屋の中を一周して、全然存在感を感じさせないくらいぼんやりと突っ立っているカタロスの前にたどり着いた。カタロスは何も言わない。ただ、何も言わずに俺を見た。

「何だよ」

そう言っただけ俺は、少し困ったような顔をしてカタロスを見た。奴はそつと、唇の先を噛みしめている。

「……何だよ」

もう一度俺が同じことを言っても、カタロスは黙っていた。それでも目で訴えかけてくる。

『友達を死体にした部屋の中を調べ回るのは、どんな気分ですか？』
ジェットは俺の友達ではない。しかし、仲間ではあったと思う。勿論、同じ組織で仕事をしていたという意味においてだ。親しみとは無縁のビジネスライクな関係。俺はそれで良かったし、ジェット

もそれ以上俺に踏みこむことは無かった。ただ奴は、その「仲間」という関係すら楽しんでいるように見えた。

『いつでもお兄さんにいいなさい』

そう言つて、ジェットは俺との間に偶然生まれた関係を楽しもうとしていた。そこが俺と奴とで、決定的に違う所だろう。

「泣くなよ」

そう言つて俺は、踵を返そうとした。さっきもそうしたように、少し困つたような顔で。

カタロスが笑った。奴はほんのうつすら瞳を潤ませて笑っている。俺がそうしたように、奴も、少し困つたような顔で笑っていた。

しかし、この場もそう長く続かないことは分かつていた。まず第一に、地下に続く扉が開いていたこと。第二に、ジェットのものらしい右腕が作業台の上に放置されていたこと。

こうして俺達を、この部屋の中に招き入れたこと。

どうして俺達がここに来ると知っていたのかは分からない。オールド・ワンがチクツたのか？勿論、それは分からない。

だから、そこについて考えるのはやめておく。問題は、今ここで俺達を見ている人間のこと。

ジェットの右腕で俺の気を惹いたつもりだろうが、俺はきちんとその視線に気づいていた。そいつはこの部屋に入った時からずっと、俺達を見ている。

そいつがジェットから右腕をもぎとつたのは、この時の為だったのだろうか？こうして後から来た人間の——俺の注意を惹きつけて、油断させる為——？

牧場があつて牧場主がいるなら、当然そこには「牧羊犬」もいる。羊達が逃げ出さないように、外から来た侵入者を追い払う為に。

このプレリーにあてがわれた牧羊犬の名前は「グロワール・エペ」と言う。エペと呼ばれる人間の何人かが、この教会の警護の任務に当てられているらしい。ジェットはそれと知っていて、この仕事を

引き受けたそうさ。別段、奴はそんなことを気にもとめていなかっただろう。

教会に入る前——俺は誰にも言わなかったが、恐れていた。拷問の跡を見ることがやドジを踏んで捕まってしまうことをではなく。

怖かった。万密院、かつてエペに所属していたジェット之死。そしてこの二つを俺に結ぶもの。

いつそいつの影が見えたりはしないかと、内心気が気でなかった。もしそいつが今この瞬間、俺の前に現れたなら——。

「ねえ——」

そう言つて、俺の目の前に現れて笑ったなら。鏡を照り返す光のような笑顔をして。

カタロスも視線に気づいたらしく、右足を後ろに引いて身構えた。俺も懐に収めたナイフに手をやる。

部屋の奥にあつた扉が開いた。その表面に開いた僅かな穴の奥からこちらを見ていた視線が、動いているのを感じる。

動いても、こちらを見続けている。

そして——扉の中からそっと、人の身体の形をした影が現れた。

第一章 十一話

そいつは扉の前に立っている。声も出さずにただじっと。

視線が爬虫類に似ていた。こちらを見つめているようで、しかし意志が全く感じられない冷たい視線。扉の奥から現れた細い影が、そんな瞳でこちらを見ている。

「……………」

若い男だった。軍服のようなロングコートに身を包んで眼鏡をかけている。コートの沈んだ黒に、淡い金髪と薄い茶色の瞳が映えていた。背はカタロスより拳二つ分ほど低い。それでも成人男性としては十分に背が高い方だ。

男は整った顔立ちをしている。王子のような、気品を感じさせる目鼻立ちだ。しかし、男が持つ温度の無い視線と、全てに無関心そうな表情のせいで、その外見から放たれているはずの甘い雰囲気は見事に破壊されていた。男はそんなことに構う様子もなく、淡々と言う。眼鏡の向こうにある眼差しから想像できる通りの、冷えた声だった。

「ジェット・ガジェットーノの足取りを追って、ここまで来たのですね？」

男の生きている感じがしない薄い唇が、静かにそう言った。

「そうだ。お前がジェット・ガジェットーノを殺したのか？」

「……………」

男は沈黙する。

「お前らが何者かなのは分かっている。お前は、エペの一員なんだろう？」

エペの名前を出すと、ようやく男の表情に変化が見えた。ただし、呼吸をするようにほんの一瞬、眉が上下に動いただけだ。

面白いくらいに変化の無い男だった。眉の動かし方も、誰かにそう教わって動かしているように無駄が無い。この男の意志はどこに

あるのだらうと、思わず探したくなる。

そんな心の中の感想とは関係なしに、俺の唇はするする動いた。

「ジェットからもいだ腕をここに置いたのは、ここに入ってきた俺の注意を惹く為か？」

「……ご存じなのですね。亡くなったジェット・ガッジエティーノに右腕が無いことを」

抑揚の無い男の声がそう言った。本当に、放り投げてそのまま振り返りもしないような、つれない声でそう言う。

「そうだ。俺はジェット・ガッジエティーノの死体を直に見たからここに来た。そしてここで誰かに殺されたと聞いて……こうしてここまで来てやったっていうわけだ」

俺は堂々と言った。こいつは、ここまで事情を知っている俺を生かして帰しはしないだらう。当然、俺はそんなことは心得ているのだと、そう宣言してやっているつもりだった。男は静かに問い返す。「だとすれば、あなたがここへ来たのは何の為です？我々に対する復讐を望んでいるのですか？」

背後でカタロスが息を呑む音が聞こえた。狭い部屋の中では、お互いの呼吸をする音さえ聞き取れる。その振動も空気を伝わって感じられるかのように、部屋の中は静まり返っていた。

「……………」

俺がここへ来たのは、ジェットの復讐をする為だらうか？それは違う。

ジェットが何故殺されたのかを知りたかったら？それも違う。

自分も殺されるかも知れない可能性を潰しておきたいから？表向きにはそうだらう。殺された人間の共通点は「かつて万密院にスパイとして潜入したことがある」ということなのだ。だから、俺が連中の寝首をかいてやろうと考えることに、一片の不審も無い。

しかしそうではない。

そうでは、なかった。

俺がここに来た理由。それはたった一つ。

「お前はこの部屋に入ってきた俺達を、扉の奥から拳銃で撃ち抜いて殺すことができたはずだ。それなのに、わざわざこうやって、お前が俺達の前に出てきた理由は何だ？」

男は黙っている。

「俺を殺すなと言われているんじゃないか？お前は俺を殺しに来たんじゃない。その逆だ。俺を、待っていたんだろ？」

男は、やはり黙っていた。もしかすると、俺を傷つけることさえあつてはならないと命令されているのかも知れない。殺さないだけでいいのなら、脛や腕に二、三発銃弾を撃ち込んでやる方が遥かに手間がかからないからだ。

殺されたジェット、かつて所属していたエペ。そこから俺を手繰れる、唯一の糸。あみだくじのように、複雑に入り組んでいても、いつかは辿りつくゴール。その先に待っているもの。

自分でも驚くほど、俺の声は震えていた。

「お前は……ルーチェ・イスタンテ・エスペリオの指示を受けて、ここへ来たのか？」

ルーチェの名前を出した途端、俺は目が眩んだような錯覚を覚えた。全ての感覚が自分の体から遠ざかるような気分。ただ一人、その名前を出ただけでそう感じた。

殺されたジェットの右肩には、ジェットの血で書かれたと思しき文字が書かれていた。羽ペンでも使って書いたのか……ジェットの肩には、血文字をなぞるようなミズばれらしき跡が残っていた。

ペンに不慣れな子どもが書いたかのようにいびつな形の文字列が、ジェットの肩の上に並んでいる。それを俺は、そつと目で追った。

Hello my dear.

親愛なる友へ。

エペに居た頃、常に俺の背中を見ていたルーチェの視線。くすぐるような笑い声。

俺を見つめてまっすぐ笑う記憶の中のルーチェ。あの時奴が寄越した視線を、俺は今も鮮明に思い出せる。

だからこそ分かる。

見ている。どこかで。

ルーチェがこの部屋のどこかで、俺を。

俺を見つめて、笑っている。

笑顔が見えるくらい鮮明に、その様子を想像できる。

瞬間、男が懷に手をやっているのが見えた。俺はさっと軸足を後ろに引く。しかし間に合わなかった。いや、間に合わなかったのだと後で悟る。

その後どうなったのか……目の前が一瞬光って、遅れて見えていた景色が遠ざかる。動かない体とまどろむ意識の中で、俺は思い出すともなく思いだした。

「ねえ……」

甘ったるいというより、甘えるようなルーチェの声。記憶の中のルーチェの声は聞いた時のままで、忘れようにも、今も変わらず鮮明だった。

一年半前の事だ——。何故か、今、俺はその時の事を思い出している。

ルーチェは笑っていた。その笑顔の後ろに炎。炎上して、黒い影を炎の中から覗かせている教会。崩れ落ちてきた屋根の梁が、地面に叩きつけられる。

ルーチェの細い指が俺の頬に触れた。周りの状況が見えていないかのように、優雅になぞるように、俺の顎に指を添えている。指は血に濡れて、真っ赤なままだ。

「大丈夫。君を殺したりはしない」

ルーチェの細い指が俺の鼻の頭に触れた。つんと指先だけで触れる。

「君以外の人間は、みんな死んだけど」

まるでからかうように——そう言ってルーチェは笑っていた。死

体が転がる、崩れ落ちるさなかの教会で。

この時以来——俺が二度とルーチエを見ることは無かった。いつの間にか気を失っていたらしく、俺が目覚めた時、教会は焼け落ちていたという。一体どうやって外に出たのか……俺はなんとか事無きを得て、そのままの恰好で国を出た。誰にも知られない遠くの街を目指して。

しかし、常に視線だけは感じていた。どこにいても常日頃のように。

どこかでルーチエが、俺を。

見つめている。

そう思って生きていた。いつも心のどこかで。

その視線に捕まりながら生きている自分を、想像しながら。

俺がここへ来た理由は、復讐の為ではない。

誰しも振り返らなければいけないものがある。置いてきたもの、忘れたままにしておきたいもの。

今も変わらずにそこにあるもの。

俺は囲われた世界から抜け出さなければならない。閉じた世界から抜け出す方法はたった一つだ。

世界の中心へ逃げるのではなく、世界の「壁」に向かうこと。壁に触れて、その壁を壊すこと。

つまり、世界と「接する」ことだ。その先へ進む為に。

閉じた世界から抜け出す方法は、たった一つ。

俺は記憶の中にあるルーチエの笑顔と、真つ赤な指と、甘えるような細かい声から、

ルーチエの支配する囲われた世界から、抜け出さなければならない。

第1章 十二話

部屋の窓から、一台の馬車が門をくぐろうとしている所が見えた。彼が時間を守らなかったことは一度も無い。馬車から下りてこの部屋に来るまでの時間も、正確に計算しているだろう。

馬車に乗って来た男——ヘンドリクセンは俺の部下だ。命令に忠実、仕事は正確。時間は必ず守るという、全く手のかからない部下だ。いや、手がかからないというよりは「手のつけどころが無い」と言う方が正しい。

手のつけどころが無い。つまり、とっかかりが無い。何と触れ合っても引つ掛かることがなく、誰と出会ってもただすれ違っただけだ。

この組織の中で彼との付き合いが一番長い人間は多分俺だろう。しかし、初めて会った時の印象から、彼に少しも変わりはない。

庭に入ってくる馬車の音を聞きつけたのか、本を顔にかぶせてソファに寝転んでいる少年が、そのままの体勢で言う。

「お帰りなさったようですね」

そう言っただけは、えいやと身を起こした。その勢いで空中に舞った本を、はっしと片手で受けとめる。しかしその視線は壁掛けの時計を見つめていて、本から興味を失っていた。

「相変わらずアンリ様は時間に正確——。体の中にぜんまい時計でも入ってるんですかね？」

そう言っただけは、大して面白くもなさそうな顔をして笑った。

「……ねえ旦那？」

少年は、そう問いかけながら俺を見た。

彼は名をイズルと言う。俺も彼のことを詳しくは知らない。彼が俺の元で働くことになったと上から知らされたのは半年前のことだった。

出身の国すら不明で、イズルという名前も本名なのかはっきりし

ない。東方人の名前のようにもあるが、本名は「イズルート」などであり、普段は略称を名乗っているだけなのかも知れなかった。当のイズルが、再び笑う。

「何じろじろ見てるんですか？俺の顔に、何かついてます？」

そう言っただけでイズルはソファに寝転んだ。肘掛に頬杖をついてこちらを見つめている。

その視線は場数を踏んだビリヤードシューターに似ていた。玉が転がる位置を正確に予期する視線。狙った位置に玉を飛ばせる指遣い。そしてただそれを、ルーチンのように淡々とこなす。

イズルの視線は、そんなものを思い起こさせた。俺は、台の上に置かれて品定めされている玉の一つになったような気分になる。

「いや……」

俺はイズルから視線を逸らす。同時に、被った帽子の底を掴んだ。そのまま帽子を目深にかぶる。

「旦那、『いや……』なんて歯切れ悪く言われたら気になるじゃないですか。おせーてくださいよ」

イズルはくつくつと、声だけは年相応らしく笑った。そして、表情を改めると同時に言う。

「ねえ、何考えてたんです？」

そう言っただけで彼の、濡れたように光る紫色の瞳の奥が薄く笑った。探るような、捕えるような視線だった。

「……考えてたの？ではない。『考えていたんですか？』だ」

つつばねるように言っただけで、俺は帽子を深く被った。帽子の鏝に隠れて、もうイズルの口元すら俺の目には見えていない。

「へーい」

すぐさまどっすん、という音がして、イズルがソファの上で飛び跳ねたのだと分かった。そのまま再び横になったようで、イズルの細い体がソファに沈む音が聞こえる。背が低いイズルの体はすっぱりソファに埋もれてしまっただろう。

グロワール・エペの第一武隊指揮官室。その中のいっとう立派に設えられた椅子に座る俺——ゼーノは、両手の指を組んだまま目を瞑った。これから、俺の部下の中でもとりわけて腕の立つ人間だけを集めて、会議をするつもりだった。話の内容は二日も前から決まっている。ただ、直前になっても、俺の迷いは消えなかった。

「只今戻りました」

ノックを三回、丁寧ビジネスマナーを守ったノックの後、遅れて長身の男が部屋に入ってきた。その背後から、更に彼より拳一つ分ほど背の高い、若い青年が顔を出す。俺とイズルの姿を認めて、青年はにっこり微笑んだ。敬礼の仕草も優雅に、彼は笑顔のまま報告する。

「ヘンドリクセン及びリゼルグ隊員、任務を終えて帰還しました。活動報告は別途提出する報告資料を参照されたし」

そう言つて青年——リゼルグはイズルの寝転がるソファに座ろうとした。イズルは「やめろよ」と面倒くさそうに言いつつ、スペースを空ける。ヘンドリクセンと呼ばれた男——アンリは黙って壁際に立っていた。いつか、「ヘン」はローマン語で「アン」と呼ぶのだと、リゼルグが言っていた。

「ヘンドリクセンは長いから、彼のことはアンリと呼ぼう」

そう言いだしたのもリゼルグだったが、当のアンリはどうなろうと全く興味が無いらしい、反論も肯定もせず、ただ彼の呼び名が「アンリ」に変わったという事実だけが残った。

アンリは眼鏡の薄いレンズがよく似合う、伶俐な風貌の青年だ。誰がどう穿つて見ても美しい顔立ちをしている。加えて任務に忠実。今日もきっちり、予告通りの時間に仕事を終えて帰ってきた。

ただ、それ以外に彼にとっての生活らしい生活は何一つとして無い。任務を終えた今、彼は次の任務を待つて待機している。

オートマータに似ている。スイッチが入っているか入っていないか。そのどちらかしかないように、彼は壁際に立って大人しくしている。

「まだ全員揃っていないようですね」

リゼルグが周囲を見回しておっとりと言った。確かに、あと一人足りていない。

「……………」

全員が全員、誰が来ていないのかすぐに気付いた。

だからこそ黙った。

「お待たせしました」

そして——見計らっていたかのように扉が開いた。

「ごめんなさい、ちよつと転寝をしていて……」

扉の向こうから低い身長が顔を覗かせた。体重を感じさせない軽い足取りで部屋の中央へ寄ってくる。アンリは相変わらず正面を向いており、それに対して見向きもしない。リゼルグはそいつの姿を目で追って、イズルは頬杖をついて窓の外を見ている。そしてそれは、俺の目の前で立ち止まった。

「夢を見ていたんだ」

そいつは笑う。俺の目の前で、白い頬と赤い唇を、俺の前に突き出して。

「黒い毛並の、金色の目をした猫の夢」

その猫の視線は燃えるように熱い。そう言つて、そいつは笑った。

「それでね、その猫は壊れた教会の中で、鳴いていたんだ」

寂しいんだね、きつと。そう言つてそいつは、俺を見た。

「……あるいは、怯えていたのかも知れん」

「そうかもね」

そう言つてそいつは笑った。俺の答えを予期していたように悠然と。

アンリ、リゼルグ、イズル。そして、ルーチェ・イスタンテ・エスペリオ。

必要な人物が揃い、ようやく俺は、本題を切りだした。

「お前達も知つての通り、先日、エルガストウルムの最下層にいる『咎負い』が脱獄をした。正確には

獄したのだと『思われる』、とのことだ」

俺達が咎負いと呼んでいる男——それが監獄の中から消えていることに看守が気付いたのは、つい数日前のことだった。

「しかし奴が逃亡を図った形跡は無い。確かに独房の扉は開いていない。鍵を壊した跡はなく、そもそもあの部屋の中で鍵開けの道具を調達できるはずがない。奴の食事にはスプーンすらついてこないのだからな。あの独房の中に、棒きれ一つありはしない」

「……つまり、外から扉を開けた人間がいるのではないか、と？」
リゼルグの言葉に俺は頷いた。イズルは退屈そうにゆっくり瞬きをしてから言う。

「なるほどねえ……。脱獄の方も問題だけど、共犯者の存在の方も厄介ってわけですか」

「その通りだ」

「はあ……。どうりで最近、宿舍が騒がしいとは思っていたんですがねえ。ということは、最近俺の部屋の天井裏に住みついている男も、エペが用意した監視者ってところですか？」

「……………」

イズルはうるさそうに、しかし表情は努めて冷静に畳みかける。

「もう三日もこの調子ですからね。いい加減嫌になつてきた所だったんです。ちょうどそれについて訊こうと思つてたんですけど、旦那の方から話してくれるとは」

「……すまない」

咎負いの脱獄が発覚した時、上層部は真つ先に内通者の存在を疑い、万密院に所属する全ての人間——エペの隊員にも監視をつけた。咎負いの存在は一般には知られていない。よって、上層部の判断は当然のことだと言えた。

「でも、いいじゃないですか」

リゼルグがイズルを、笑顔で制して言った。

「隊長がこうして話してくださったのは、僕達を信用してくれてい
るからなんでしょう？黙っているのが堪えられなくて、だから本当
のことを話してくれたんじゃないんですか？」

イズルは膝の上で頬杖をつき、飽きたようにうるんげな表情で顔
を背けて——しかし視線は、こちらを見つめていた。ルーチエは俺
の斜め前に立つて、にこにこ笑っている。アンリは、静かに俺に
対して目礼をした。

「……話を理解するのが早くて助かる」

そう言つて、俺は帽子の唾を握った。しかし帽子を目深にかぶろ
うとして、イズルの言葉に遮られる。

「で、共犯者の目星はついてないんですか？全然全く？」

「そうだが、そうとも言えない」

「何ですかそりゃ」

「ここ数日、上層部は過去に万密院を出入りした人間を片っ端から
始末している。ここに入つて数年も経たない内に出て行つた人間ば
かりだからな。大概ろくなものではない。大方が、どこぞの国家や
商家に雇われた賊どもばかりだ。本来その程度の者は野放しにして
おくのだが、事態がこうあつては、誰彼問わず疑わなければならな
い。だが……上層部は、どうしてもある人物を始末できずにいる」
「と、言いますと……？」

「何度そいつに暗殺者を放つても、返り討ちに遭うそうだ。いや、
それどころか、『標的にたどり着く前から殺されてしまふ』らしい。
こう何度も立て続けに、その人物に送つた者だけ殺されるとあつて
は作偽的なものを感じざるを得んとのことだ」

「ふうん……。つまり、始末をしようとして、逆にこちらが始末さ
れてしまふ、と」

そう言つたりイズルの視線が鋭くなった。音がするのではないか
と思えるほど、その変化は微少ながらも明確だった。少なくとも、
彼らの指揮官たる俺の目には。

「ああ。情けない話だが、今まで標的の生活圏内一キロメートル以内に近づけた者すら一人もない。お陰で彼^がの人物は、こちらが刺客を放っていることにも気付いていないようだ。呑気なことにな」

俺の言葉を聞き終えたイズルは、ソファの背もたれに小さなその背を預けてふんぞり返った。そのまま頭の上で腕を組んで天井を見つめて、再び俺を見つめて――彼は氣だるげに口を割る。

「……こりゃ、面倒なことになってるのかも知れませんが。咎負いが脱獄して、そこには共犯者がいた。話はそう単純じゃないかも知れませんが。もしかすると、もっと厄介なのかも知れませんがねえ」

「……俺もそう思っている」

「それで、隊長は僕達にどうしてほしいんですか？」

リゼルグがわざわざ挙手をして俺に訊ねた。相変わらず好青年らしい笑顔だが隙がない。恭しい口調だが、堂々とした瞳で俺を見ている。

「ただこの話をされただけでは、僕達に混乱と不安と、不信を与える一方です。隊長は何か、状況を打破する手立てをお考えなのではありませんか？」

「……いい勘をしているな、リゼ」

リゼはふふつと、声を立てて笑った。しかし、そんな和やかな雰囲気が続けられるほど、話は穏やかではなかった。

「さっきも言った通り、過去に万密院に出入りした人間を、上層部は始末し続けている。しかしどうしても殺せない人間がいるときたそこで、俺達エペの力を借りざるとえんとそう言うてきたのだ」

本来、表向き「街の自警団」として国民の信頼を集めているエペに泥仕事をさせたくは無かったのだが、エペほどの手だれでなければ殺せないだろう――上はそう判断したのだった。

「とはいえ、今まで送りつけた連中も馬鹿ではない。上層部の言う通り、相手はかなりの業物だ。よって今回の任務に、命の保障は全くない」

俺が普段と何ら変わらない調子でそう告げると――しいんと、部

屋の中が静まり返った。リゼは笑顔を浮かべてはいるものの思わず息を飲んだらしい、微笑を浮かべたままじつとしている。珍しくイズルは、神妙そうな顔つきで俺を見た。

俺から無責任な言葉が出たことに――彼らは少なからず驚いたのだろう。これまで、成功率を測れない不確かな状況で俺が任務を与えたことは一度も無い。必ず、勝利の算段と成功できなかった場合の逃げ道を用意する……。そうやって俺は、第一武隊の勝率を維持し続けてきたつもりだった。

「まあ、こうして黙ってたって埒があきませんや。旦那、ターゲットの特徴をおせーて……教えてください」

動かずにいた空気をイズルの一言がチェスの一手のように、あつけなく打破してきた。俺は話を続ける。

「ターゲットはこいつだ。ここにフォトグラフがある。以前入団した時に撮らせたものだ。今も顔は、あまり変わっていないだろう」
一同は俺の机の前に寄って来て、俺が差し出したフォトグラフと彼の人物の経歴書をしげしげと覗き込んだ。

「かつて俺の下で働いたことがある人物だ。ほんの一時だけだったかな」

しかしその人物は――その一時の間に、一生忘れられない体験をしたのだ。きつとどうあっても消せない、思い出と呼ぶのに相応しくない、凶々しいものを。

「偽名だろうが、名前も一応書いてある」

フォトグラフから目を離して経歴を読み始めるイズルとリゼの前に……じつと、モノクロのフォトグラフを見つめる視線があった。

男の生き写しであるそれを見つめて、息を止めている。

いや、息を殺している。草むらから獲物を狙い定める獣のように。
「僕が行くよ」

そして、決断は即刻下された。見た目は穏やかに、しかしその内心は俺では推し量れないほど激しく、恐らく燃えるように。

「僕がやるよ。必ず成功させてみせる」

リゼは自分の目の前の人物の背中を見つめ、イズルは目を細めた。アンリは何も言わない。そして当の本人——ルーチェは続けた。
「まずはおびき寄せる所から始めてみるよ。でもね、ゼーノ。一つだけお願いがあるの」

「……何だ？」

「僕が必ず彼を捕まえてみせる。でも、彼を殺さないで」

捕まえた人はみんな殺しちゃうんでしょう？無垢な声でそう言うルーチェに、俺はたった一度頷いた。

「それはダメ。それは、絶対に許さないから」

ルーチェは淡々と言った。皆は黙っている。俺もまた、逡巡して、ようやく言葉を返した。

「分かった。上にそう取り図ろう。彼らも俺達の進言とあらば、悪いようにはすまい。ただ、保障できるものは命だけかも知れん」

「うん。でも……あんまり彼に、痛い思いはさせないで」

「分かった……」

そう、ルーチェの言葉であれば上の連中も無視はできない。何故なら、それは——。

「ねえゼーノ、偉い人達は万密院に関わったことのある、今はいい人達を始末しているんでしょう？」

「そうだ」

ルーチェの綻ぶように笑う瞳がこちらを見ている。光が照り返るような美しい瞳だ。

その美しい光の、向こうにある闇。闇が、一層深く色づくように笑う。

「じゃあ、これから始末する予定の人のリストを見せてよ。もしかすると、その中に使えるものが混じっているかも知れない」

ルーチェのこの発言から翌日。

ジェット・ガジェティーノの遺体となった姿が、街外れの街道の上に野ざらしにされた。

第1章 十三話

イズルとリゼルグが第一武隊指揮官室を出た時、時刻は四時を過ぎていた。イズルはため息をつく。そのままうつかりあくびもする。イズルの小さなあくびを見て、隣に並ぶリゼルグが微笑んだ。イズルはぷいと、顎をリゼルグから背けながら言う。

「……眠れてないんだよ、最近」

「僕も」

リゼルグは前を向いたまま答えた。司令棟と呼ばれる、指揮官居住区である特別な宿舎の廊下の奥を、二人は歩いた。漂白されたように人工的な白さの床と壁に挟まれて、居心地の悪い思いがする。

「咎負い、か」

天井裏に居座る監視者のせいで寝不足に痛む頭をさすりながら、けだるそうにイズルが言った。リゼルグは懐っこい笑顔を浮かべたまま言う。

「エルガストウムルの最下層……聞いたことはあるけど、どんな人なんだろう。その咎負いつていう人」

「さあな」

エルガストウムル刑務所と万密院の関係は一般に公開されておらず、その関係を疑う者はいない。エルガストウムルと呼ばれる監獄はその咎負いの為に作られた、とイズル達は聞いている。

彼一人だけの為に、それをカモフラージュする為に、王宮一つに匹敵する大きさの刑務所が作られたのだ。

そこに凶悪な犯罪者達が実際に収容されてはいる。が、それらは全てフェイクなのだ。咎負いの存在を隠す為に。木を隠すのなら森の中だ。

もつとも、イズルもエペに入隊するまで咎負いの存在を知らなかった。

「上の連中は、何から咎負いの存在を隠そうとしているんだろうな」

「確かに……彼の存在は内輪でしか公開されていないはずだしね」
「それも『史上稀に見る凶悪犯であるから嚴重に管理すべし、何人たりとも近づくべからずっていうおふれが出ているだけで、内部の人間ですら実態が掴めやしない』」

二人は宿舎を出て、中庭に入った。そのまま生垣に囲まれた遊歩道の上を歩く。夕日に染め上げられた黄色いバラがそこかしこに生えている。夕日によって全てが赤く見えていた。隣を歩くりゼルグの金髪も、恐らくは自分の瞳の奥の色も、まるで擬態をするようにふと振り返った、白塗りの筈の宿舎の壁も赤かった。

「それに、決定的に分からないことがある」

不意にイズル声のトーンが落ちた。リゼルグは視線だけ動かして、隣にいるイズルの様子を伺う。

「咎負いがいる。共犯者がいる。そうだとしてもだ。咎負いと共犯者は、どうやって連絡をとっていたんだ？ 咎負いがどうやって外部の人間に助けを求めたのか、どうして共犯者はその声を聞くことができたのか」

イズルは立ち止まった。立ち止まって、しかし、リゼルグの方を振り返らずにそのまま続けて。

「矢張り内通者がいるとしか思えない。それも恐らく、刑務所の構造や規則に詳しい人間だろう。何時に食事があっていつ清掃屋が入るのか、そうしたことも全部把握している人物だ。脱獄を成功させる為には勿論、少しでも脱獄の発覚を遅らせたいはずだからな。これほどの人間を脱獄させるのなら準備も念入りだったはず」

リゼルグは黙ってイズルの話を聞いている。もうその顔に人好きのしそうな笑顔は無い。あるのはただ、自分よりいっとう背の低い、しかしその見た目に似合わない口調と冷静さで淡々と喋る少年の言葉の続きを待つ戸惑いの表情だ。

「それに、決定的に分からないことがある」

イズルの言葉はリゼルグに向けられているようだった。しかしイ

ズルの意識の縄張りから、既にリゼルグは消えている。

イズルは時々こんな風に、その場に居ながら、周囲の全てを置き去りにして思考を始める。リゼルグへの言葉も、イズルの中の一部が、イズル本体の代打で投げかけているだけの出来合いの言葉だろう。触れば崩れる砂のように、実体を感じさせない言葉だ。

意志があることは分かるのに、その意志がどこを向いているのか全く分からない瞳。今このままイズルから目を離したら、どこかへ行って、そのまま帰ってこないような気がする。猫のように鈴の音だけ残して、そのままどこかに行ってしまうような。

「依然、内通者の存在を疑わざるを得ないことは確かだな」

「……つまり、僕達の中に裏切り者がいると？」

ようやくリゼルグはそれだけ返した。遅れてきたリゼルグの返事を訝りつつ、イズルは再び正面を向く。

「そうかも知れないっていう話だ。咎負いとの接点が少ない俺達工ペの中に紛れ込んでいる可能性は、低いと思うけどな」

「……………」

「何にしたって、重要なのは共犯者だ。もし咎負いに行く宛てがないのなら、今も共犯者と一緒にいる可能性が高い。もし共犯者を捕まえられれば、二人まとめてお縄につけさせることもできるだろう」

「ふふ……………」

一瞬何が起こったのか分からなかったらしい、イズルの動きがぴしりと固まった。しかしすぐに彼は気付く。イズルが振り返った先——隣に並んだりゼルグが、肩を震わせて笑っていた。

「……………何だよ」

「いや、旦那とかお縄につくとかさ、一体どこの国の言葉なんだろうつて」

それはもう何度となく訊いて、確か、初めてその言葉を聞いた時にもした質問だった。イズルはうるさそうに答える。

「いいだろ別に何だって。好きで使ってたんだ」

「うん」

リゼルグはイズルの顔を横から覗きこんだ。その素振りに気付いたイズルが顔を上げる。イズルが「何だよ」と言う前に、リゼルグが言った。

「いいんだ別に。その方が、イズルらしいと思う」

そう言うリゼルグの顔には、いつもの懐っこい笑顔が浮かんでいる。「はあ？」と怪訝そうに、面倒そうに答えるイズルを置いて、リゼルグは一步前に踏み出す。

「それで、いいんだと思うよ」

そのリゼルグの言葉にイズルは一言だけ返す。見飽きたように慣れたように。

「……わけが分かんねーや」

イズルはリゼルグの背中を追いかけた。見飽きたように。慣れたように。

第一武隊指揮官室に残っていたのはゼーノとアンリだけだった。

他の三人が部屋の前を去ったことを確認して、アンリは徐に口を開く。

「よろしかったのですか。任務を任されたのがエスペリオで」

「不服なのか？……珍しいな、お前が異議を申し立てるなんて」

ゼーノはアンリの物珍しい態度に惹かれたように、そつとアンリの方を見遣る。アンリは相変わらず鉄面皮で、その表情に一分の揺らぎも無い。

「エスペリオの特筆すべき戦闘能力に不足はございません。しかし精神面において、至らない点が多々あるのではないかと」

「確かに……そうだろう。現にルーチエは、ターゲットの顔を確認しただけで名乗りをあげてきた。放った刺客が殺された状況などを聞くこともなしにだ。そして必ず成功させると、そう断言している」

「データの分析による戦略の補完。それを越える実力がエスペリオにはあります。しかしそれは、彼が単独で行動する場合においての

み有効です。他の人間と組ませた場合、必ず彼の行動は足並みを乱す」

「確かにそうだ。しかし、それがお前ならば、問題無いだろう?」

ここぞとばかりにゼーノの視線に居抜かれて、アンリは押し黙る。薄い眼鏡のレンズの奥でゼーノの真意を図っているようだった。

ルーチェが任務を志願してきた時——ゼーノは一つだけ条件をつけた。

「いいだろう。ただし条件がある。この任務には、必ず二人一組で当たれ」

ゼーノは組んだ指で口元を隠しながら言う。

「相手は『彼』だ。ルーチェは俺達の前でこそ抑えていたものの、今のあいつは、相当頭に血がのぼっている。『彼』を目の前にすれば、到底冷静ではいられないだろう。だからこそ俺はお前を宛てがった。お前なら、もしルーチェが前後の見境をなくしても、全力で止めてくれるだろう」

「……………」

「お前なら、ルーチェを殺してでも止めてくれる」

刺すようなゼーノを視線を受けて、アンリは瞳を閉じた。

「了解」

いつも通り粛々とした返事をして、アンリは自分の腹の前で右腕を折り曲げて敬礼をする。ゼーノは「くれぐれも……」と言い添えた。

「直接ターゲットとルーチェを接触させないようにしてくれ。表向きの行動はお前主導で動くよう、俺からルーチェに伝えておく」

「かしこまりました」

ゼーノは指を組み直して椅子に深く座った。アンリは声を忘れた鳥のように黙り、しかし、大地を見下ろす鷲のように落ち着いている。

「……どうした?まだ何か訊きたいことがあるのか?」

ゼーノに問われて、アンリは間髪を置かずに口を割る。至極丁寧

だが、遠慮の無い物言いだった。

「隊長はエスペリオに拘っていらつしやるようにお見受けします。今回の任命もそうです。確実に任務を成功させたいのであれば、私とイズルあたりを組ませた方がよろしかったはず。ここまで面倒なことをしてまで、エスペリオの要求を聞き入れた理由は何なのですか？」

何か理由がおりですかと最後に言つて、それきりアンリは石のように黙った。

「……拘っているわけではないさ」

ゼーノは席を立った。そのまま背後にあつた窓辺に寄る。中庭をイズルとリゼルグが横切つて行く所が見えた。夕刻の日差しは強く、思わずゼーノは目を眇める。

「拘っているのではない……。ただ、恐れているだけだ」

ゼーノは思い出す。焼けただれ崩れていく教会の中、そこへ駆け付けたゼーノは確かに見たのだ。

血だまりの中で息絶える死体。部屋の内部を囲むように折り重なつた死体の輪の中で、こちらを振り返るルーチェが笑う。

何故ルーチェが笑うのか、ゼーノにははっきり分かつた。

そして、

分かつたから恐ろしかった。

「今回、お前にはルーチェと二人で行動してもらつた。そしてターゲツトは、あるうことか『彼』だ」

彼……。それは幾度となくゼーノが繰り返している言葉だった。

そう口にする度に、ゼーノは、金色の瞳でこちらを窺う少年の視線を思い出す。あの焼け付くような、くすぶるような瞳――。その視線が、鮮明に思い出される。

「お前には話しておこう。お前も知っているだろう？二年前に起きた賊の襲撃で、教会一つが消し墨になった事件を」

直にその惨状を目にしたわけでは無いが、無論その話は当時エペの中にいたアンリの耳にも届いていた。

「今から俺が語る話は極めて断片的なものだ、と先に言っておく。
ただ……」

たとえそれが全てでは無いにしても十分なのだ。俺がルーチェに
畏怖する理由を知ること。

そうゼーノが告げても、アンリは表情を変えなかった。そしてゼー
ーノもまた、もうアンリのことを見ていない。その意識は既に、焼
け落ちる教会の温度を思い出していて、駆け付けた時には体中から
噴き出していた汗の感触と、暑さで朦朧とする意識の片隅で見つけ
たものを、思い出すともなく思い出している。

いや、それは思い出すなどといった甘い響きのあるものではなく
——体に受けた古傷をなぞるように、後悔をするように、暗澹たる
ものだった。

第1章 十四話

月が出ている晩だった。俺は明かりをつけたままベッドの上に寝転んで、聴くとなしにフィルター越しの声を聴いていた。

ラジオ、というらしい。これもネフィリムの遺物で作られた先進技術の秘蔵っ子が一つ。尤もこんなものを使えるのは万密院の人間が大概で、放送している内容も「万密教則第一版第三章四十二条」というものだから全然気が利いていない。何が悲しくて夜な夜なスイッチを入れて、おっさんの語る教則なんかを聞かないとけないんだ。

何が悲しくて。

俺の背中の後ろには、同じように背中を丸めて寝そべっているルーチェがいる。壁の方を向いて寝息のように静かな呼吸をして、じっとしている。ラジオの声は、俺とルーチェの間にある沈黙の中の隙間を縫うように流れていった。

俺とルーチェが組んで任務に出るようになって二ヶ月経つ。つまり俺がエペに配属されて、ルーチェと生活をするようになって二か月が経った。

ルーチェは俺と同じく短刀使いで、奴は二刀流だった。刃渡り三十センチはある大型の短刀を振り回す。最初は何故ルーチェと組まれたのか分からなかったが、すぐにそれも知れた。同じナイフ使いでもルーチェは戦闘向きで、俺は偵察向きの人間なのだ。ルーチェが敵を陽動し、その隙に俺がターゲットに忍び寄る。赤子の時からカムラッドで育った俺は、殺し以外の技や知恵を散々叩き込まれていた。解錠、聞き耳、罨解除、尾行……。そして、決して足がつかない上に確実に相手を殺せる炎の殺しの力。尤もこの能力のことは誰にも話していない。能力を使って殺した後は、必ず相手の胸や頭にナイフを突き立ててやる。ナイフによる傷で死んだのだと思わ

せておくのだ。

一度だけ考えたことがあった。俺のこの力を知れば、誰も俺に近寄らなくなるのではないか――。殺そうと思えば誰でも、証拠を残さずに殺せる能力があると知って、そんな人間の横で眠ることができるだろうか――。

「あつたかい手だね」

そう言つて、時々勝手に俺の手に触れてためつすがめつするルーチェ。

「そうだな。人殺しの手とは思えないだろ？」

俺がそう言つて振り払つてやつても、あいつは笑つたままだつた。

その日も矢張り、俺はルーチェと組んで任務に出ていた。避けることはあつても防御することは一切考えられていないルーチェの動き。身のこなしを活かすべく、俺とルーチェは至つて軽装。勿論ジヤケットは万密院お得意のネフェリム産特殊繊維でできている。しかし、顔に受けるダメージは防ぎようがない。それでもルーチェは躍り出るのだ。細い腕に不似合いなナイフ二本を振りかざして。

一度戦闘態勢に入ったルーチェに指示の声は届かない。研ぎ澄まされた感覚には、必要な情報しか触れられないらしい。敵の命乞いも同様だ。尤も、命乞いができるくらいにルーチェの猛攻に耐えられた奴なんか数えるほどしかない。今生きている人間の中ではゼーノがそうだと、一度だけルーチェの口から聞いたことがある。

少なくとも戦闘態勢に入っている間は、ただ圧倒的に殺戮する。そのことにかけて、ルーチェの右に出るものはいない。

もし俺が標的だったとしても、ルーチェは同じように、俺のことを殺すのだろうか――？

俺はそんなことを考えつつ、乱れ舞うルーチェを置いてターゲットの元に向かった。近頃自分達の近辺や同業者の周囲が物騒だということを知っていたからか、屋敷の中に控えていた用心棒の数が多くて多少手間取る。ただ、どれだけ集まってもゴミはゴミにしか

らない、結局そいつらもただの時間稼ぎだった。標的の頭をつかんでナイフを穿つべく、そっと切っ先を額にあてがう。額の先に、ナイフが触れた。瞬間。

「へえ……今の、どうやったの？」

思わず、弾かれたように瞳が開かれた。

俺は標的の前髪を掴んだまま、後ろを振り返る。

それは戸口に寄りかかって頬に手を当て、うつすりと笑っている。羽織っている黒いジャケットの所々がぴかぴか光っていた。恐らくは乾き切らない返り血の反射だろう。

ルーチェがこちらを見て笑っていた。まるで明ける夜を見たように晴れやかな笑顔だ。ルーチェの白い歯白い頬、赤い指。爪と指の間に入った血を拭うこともせずに、ルーチェは細い指を、俺に向かって指し示す。

「さっき君が出した炎……それをそいつの頭の上に翳しただけで、倒れたように見えただけだ？」

「だけど」と疑問形だがルーチェは確信している。奴の瞳は「俺からどんな理屈が聞けるのか楽しみで仕方がない」という感じに色めいていた。

俺は黙っていた。ルーチェもそれ以上は何も言わない。ばれた。完全に。

この炎の能力が……。

「……何が『へえ』だ。いつからそこで見ていやがった」

今しがた出てきたような顔をしているルーチェに、俺はそう言っ
てやる。ルーチェは少しだけむくれるような顔をした。しかし口元は笑っている。

「そいつが撃ち誤って、戸棚のワイングラスを割った所」

そして、何の臆面もなくそう答えた。

「ちっ……」

標的がワイングラスを割ったのは、一発目の銃弾を放った時だ。つまりこいつは、俺が標的を始末する一部始終を全て見ていたとい

うことになる。

「黙って見てたのかよ。てめえの相方がクソ野郎の弾にぶち抜かれるかも知れないっていうのに」

そう言つてやると、ルーチェは意外そうに目をきよんとさせた。そのまま息を止める。しかし、すぐに「ふふふ」と笑いながら俺のすぐ傍まで歩いてきた。そのまま俺と百八十度対照になって、つまり俺とまっすぐ向かい合った。

「初めて僕のこと、『相方』って言ってくれたね」

そして、そんなとんちきなことを言い出した。

「はあ……？」

「君、普段はそういう喋り方しないよね。少なくとも、ジェット君の前ではしない」

「見ていやがった」とか「てめえ」とか、確かにだ。言葉は使う人間の品位を映す。時として品位を貶める。俺にだってそれくらいは分かる。生まれはどうあれ育ちはいいつもりだ。少なくとも、俺を育てた人間はこういう喋り方をしない。

「君ってさ、僕の前だと、わざとそういう汚い言葉を使うよね」

ルーチェは笑っている。

「君は、僕のことを嫌いだ」

ルーチェは笑っている。

俺は、黙っている。

「だからね。僕のことを、物のはずみでも『相方』って言ってくれるとは思わなかったんだ」

だから

「だから嬉しい」

嘘でもいいからと。そう言つて——ルーチェは瞬く。その口元は依然笑っていた。しかし両の眉が肩を寄せ合うように、眉間に集まって皺を作っている。

「……………」

後にも先にも、そんな表情をするルーチェを見たのはこれっきり

だった。そして、それもほんの一瞬だけだった。

しかしその一瞬に、確かに俺は見たのだ。血溜まりのカーペットが敷かれ、死体の無造作に転がる豪華な部屋の中で。

俺とルーチェは背中を向かい合わせてベッドの上に転がっていた。ルーチェに炎の能力のことがばれて三日経つ。しかし、ルーチェの振る舞いに変わりはなかった。少なくとも、俺の目にはそう見える。ルーチェは寝ているのだろうか……。寝息を立てているように聞こえるが、それも全然信用ならない。こいつなら寝息のような呼吸をして狸寝入りをするのだってできるだろう。

ルーチェがあんな顔を見せたのはあれっきりで、俺があいつのことを相方呼ばわりしたのもあれっきりだった。

「……………」

俺は前のめりになって、ルーチェの背中から少し距離を置く。

『ルーチェは俺達がスパイだということに気づいているのかも知れない』

三日前にしたジェットとの会話。俺自身もそうではないかと疑っていた。ただ、他人の口からそう聞くと俄然現実味が違ってくる。俺の想像に、真実味という色が帯びてくる。その推測のかけかたちも正確に、あの背中を這い回るような視線も記憶に忠実に……。ふっと、背後のシャツが軽くなる感じがした。そのままずっと、横になった俺の体の上を何かが動く。

ルーチェが起き上がった……。

そう思った瞬間、俺の耳は、枕の柔らかい圧力に塞がれた。

「……………」

静かだった。世界中の人間の命がぴったり一遍に止まったんじゃないか……。そんなことを思う程に。

ただ状況はそんなことを考えていられる程、悠長ではなかった。

「……………」

俺は一瞬で事の次第を悟った。今俺の下半身にまたがって体重をかけているのはまぎれもない、ルーチェなのだろう。

殺される。

どう気が変わったのかは分からないが、ルーチェが枕を俺の顔にかぶせてマウントポジションをとっている。一方的暴力を行使する為の体勢だ。

「ねえ……………」

ルーチェのくぐもった声が聞こえてくる。この枕の上には、刃渡り三十センチのナイフが突き立てられているのに違いない。

ルーチェは俺に問いかけてきた。ひと思いにやれば面倒が無いものを。遺言でも聞くつもりか？受け取る人間がいないのに？ルーチェは

「君が使った炎の力なんだけど……………」

と、そう言った。何故「このタイミングで」そのことを訊く——？俺は答えてやった。

「ああ。今更隠してもどうしようもない。お前が考えている通りだ。あの炎をかざしてやるだけで、俺は生きているものの命を奪える。原理は俺にも分からない」

「……………それって、『使いたい』と思った時にいつでも使えるの？」
「ああ」

ふん……。大体想像がついた。こいつは、俺の力を恐れているのだろう。俺がスパイだと勘づいているのだから尚更だ。俺の正体に感づいていることがばれた瞬間、俺に殺される。ルーチェはそのことに思い当たったのだろう。

そう、いつでも使える。たとえば、今でも自由が利く左腕を伸ばして、お前の頭を掴めば確実に……………。

「だから俺を始末する気になったわけか。まあそれが正しいんだろう。ただ、こうして皆が寝静まった後にそうするべきじゃなかったな。ここでお前が俺を仕損じても、助けに来てくれる人間はいない」

そうだった。どういうわけか、ルーチェは俺とジェットがスパイである可能性を誰にも話していないらしい。確証が無いからか？ いや、火の無い所に煙は立たない。疑わしきは即刻報告すべし。手遅れになってからでは遅い——それは他ならぬ、ゼーノの言葉だった。

しいんと澄んだようにさえ感じられくらい、空気は穏やかだった。耳を澄まさなくてもルーチェの息遣いが聞こえる——そう錯覚を覚えるくらいに。大人しくしている俺の上に覆いかぶさって、ルーチェが囁く。

「君、乱暴な喋り方をするの、辞めたね」

俺は答えない。

「どうして……？」

俺は答えない。

聞こえるのはただ、あやすようなルーチェの甘い声。枕の向こうに、微笑むその表情が思い浮かんだ。ルーチェは俺の手首を掴む。自由が利く俺の左手首を。お前を殺せるかも知れないこの腕を。ルーチェはそっと、俺の手の平に指先を滑らせる。そして、震える俺の指を掴んだ。

震えている？

何故……？

死ぬのは、怖くないのに。

ルーチェは、俺の顔を塞いでいた枕を取り払う。死人の顔にかぶせたヴェールをはがすようにそっと。

相変わらず月が出ていた。ちょうどルーチェが、その月を背負うような格好になっている。

「……………」

そしてルーチェは、何も言わずに、ナイフを振り上げた。

瞳は依然開いたまま、ナイフは俺のすぐ横をかすめて垂直にシ―

ツへ突き刺さる。俺もルーチェも、その間全く呼吸を乱さなかった。俺はただじっと、ナイフの刃先の行く末を見守った。依然瞳は開いたまま。

ルーチェは刺さったナイフをそのままにして、上半身を倒した。つまり、俺のすぐ傍に横わった。暫くはそのままだった。もう秒針が三十周はした頃、それでも俺達はじっとしていた。

そして何のきっかけも無い、ルーチェが何も言わずに、俺の手の平に自分の耳を押し当てた。お前を殺せるかも知れないこの手の平に……。

そして奴は俺に言う風でもなく、独り言のように漏らす。

「あつたかいね……」

俺はうつすらと頭を動かして、自分のすぐ近くで横になっているルーチェを見遣った。ルーチェは黙っている。ナイフが照り返す月の光のせいで、頬が一層青白い。そして

「……………」

破顔。そう呼ぶのに相応しいくらい、大きく笑った。

俺はそのまま瞳を閉じた。眠りに落ちるように、睡魔に手を引かれるように、引きずり込まれるように。

そこが悪夢に続く場所だという気がしていたのに、瞳を閉じた。瞼の裏に残像を残すルーチェの笑顔。その口の端が、そっと上がる。

そう、死ぬのは怖くない。

ただ怖いのは、見透かすような光の向こうにある、暗闇のように深いこの笑顔だ。

第1章 十五話

エペに入ってから夜の街を歩くことはあまり無かった。規則で禁止されているし、届けを出せば許されるが、なるべく疑わしいことをしたくは無かった。

しかし今日は事情が違う。俺はシルクハットを被り直して、ゆつくりと首を巡らせた。路傍に開かれた出店の前はどれも賑やかで、そこら中に炊かれたかがり火が星空を控え目に見せている。

アインフェスト。今日はその日に当たるという。年の一度の国を挙げての、大規模なお祭りのことだ。これを目当てに、観光客や、それを狙った商人がたくさん余所から流れてくる。俺達エペの人間はその警護の為に駆り出されていた。ふざけたことに「祭りを楽しんでいる人々の雰囲気壊してはならない」という名目の為に、俺はこんな浮かれた格好をさせられている。

黒いロングコートと燕尾服、頭に被った帽子には薔薇、しかも生花があしらわれている。いかにもきざったらしくて、俺の趣味にはてんで合わない。しかし衣装を選ぶ時、「何でもいい」と言ってしまったのも事実だった。

「こんばんは」

壁に寄り掛かって懷中時計を見ながら時間を潰す俺に、声をかける奴がいた。俺は振り返らずに答える。

「遅い」

そして、そう言うってから顔を上げた。

黒いベストに半ズボン、縞模様のハイソックス。ベストの下に来たシャツの襟を赤いリボンが囲っている。服装が違くと顔までそう見えてくるのか、こいつの笑顔にどこか現実味がない。服装と相まって、夢の世界の住人のようだった。

あるいは夢の世界への案内人。人間の顔をして、夢の世界を覗きに來た奴を誘いこむ。穴に落ちたアリスのようにいつの間にかそこ

から出られなくなり、しかし一たび目が覚めれば溶けてなくなる。
もう二度と、そこへ続く道は見つからない。

「お待たせ」

ルーチエは、自分で着ていく服を選んだという。縞模様のハイソックスがチエシヤ猫の躰の模様みたいで気に入った、とも言っていた。

「ねえ、君の服を選んだの誰だか知ってる？」

俺は首を振る。着ていく衣装なんて着ぐるみでなければ何でもい
いから、適当な奴に決めてもらった物を着る。ゼーノに希望を訊か
れた時、俺はそう答えた。

「僕が選んだんだよ。でも好みとか分からないからさ、当たり障り
の無いものになっちゃったけど」

ルーチエは何故なのか申し訳なさそうに笑った。

そんなことはどうでもいい。

そう言うつもりが、何故かそう言えなかった。

「さっさと行くぞ」

「うん」

俺はさっさと歩きだした。しかし一瞬立ち止まって、ルーチエの
方を振り返る。

火花が空に上がっていた。一筋の光のように伸びて、空の上で砕
け散っていく。燃え尽きることを考えていないような、帰る場所を
知らないような、目に映った瞬間だけ人々の記憶に残って後は忘れ
去られる、一瞬だけの炎だった。

俺はルーチエと並んで出店のある通りを歩いた。思えば俺に祭り
というものに参加した記憶は一つも無く、ただベッドに寝転がって
遠くから聞こえてくる呑気なリズムを耳にしたことがあるだけだっ
た。

いつも目にしているはずの通りの上を見知らぬカルメンが踊り、
口にくわえた薔薇を放り投げる。そして示し合わせたように一瞬の

狂いもない、観客達の拍手喝采。

これがあの、うなだれながら歩く人々が行き交う中央通りなのだろうか。遠くの工場から流れてきた煙の漂う狭くて汚らしい空に、飴玉のような風船が浮かぶ所なんて想像したことも無い。

これが祭り——。いつもしけた顔をして店の前にいる新聞屋のおっさんも、腹を空かせた子どもの手を握って買い物をする疲れた主婦も、この時ばかりは別人だった。軽業師が刀を飲みこんだりジャグリングをしたりする度に、子どものように大げさに驚く。そして、そうやって驚いた後は、必ず手を叩いて喜んだ。

きつと祭りというのは何かを祝うという名目で、こうやって市民の普段の鬱憤を晴らす為にあるのだろう。為政者にとってこの上なく自然に被支配階層者達のガス抜きをしてやれる、いい機会なのだ。ふと、こちらに向かつて歩いてくる女の集団が見えてきた。町娘だろうか。少ない小遣いでこの日の為にどうにかやり繰りしたらしい、地味ながら真新しいドレスを着ている。頬に手を当てて声を立てる様子がいかにも女らしかった。格好がそうだと、仕草もそうなるのかも知れない。普段は小汚い格好をしていても、矢張り彼女らは娘盛りだ。道行く男どもが女達を振り返る。

俺はふとルーチェを横目に見遣った。ルーチェは女達の方を見つめていた。すれ違うその瞬間までずっと、視線を彼女達から外さない。しかしそこにいやらしさは全く無かった。むしろ、届かないものを手にとろうとするような虚しさ。そうしたものを思わせる視線で、女達を見ている。

——？

声をかけようとした瞬間、ルーチェが振り向いた。俺は慌てて顔を視線を逸らそうとしたが、間に合わなかった。

「綺麗な人達だったね」

何故なのか、奴はそう言って笑った。この時ただ一度だけ、俺は、寂しそうに笑うルーチェを見た。

俺とルーチェは教会の前にやってきた。地域一の敷地面積を誇る、モルゲンシュタイン教会。ここが俺達の持ち場だった。教会の中には、カップルと思しき二人連れがうろろしている。少年とはいえ、男二人連れの俺達にはてんで場違いの場所だった。

特にすることも無いので、俺とルーチェは長椅子に座り、カップル達を観察していた。するとあることに気付く。カップル達はみな、祭壇の前にある銅像に見つめている。見つめ合った後は、お互いの手を取り合って銅像の頭をさすっていた。

「何だあれ？」

俺が眉をひそめて言うと、ルーチェは俺に耳打ちした。

「ああやって銅像と一緒に見つめた二人は結ばれる、っていう噂があるんだ。いつの間にか、『銅像の頭と一緒に撫でると二人の愛は永遠になる』という尾ひれまでついててね」

「ふーん……」

全然興味が湧かない話だった。その尾ひれという奴も、どこかの誰かの「そうならいい」という願望からできたものだろう。

くだらない……。

そう思ったが、意外にもルーチェは、銅像の頭を熱心にさする力ツプル達を見つめている。「微笑ましい」とでも思っているのだろうか。做って俺もカップルの様子を観察してみる。今この瞬間、その関係が続くことを全く疑っていない、幸せそうな顔をしている。

大きな花火が目の前で上がった。教会の中なのに――？

そう思った瞬間、不意に起きた爆風に突き飛ばされた。

視界は真っ白。

しかし俺の目の前が真っ白になったのはほんの一瞬、その間に訪れた沈黙も、すぐに悲鳴にかき消された。

「な……」

そう言っただけ俺とルーチェが起きるのは同時だった。

周囲で立ち上っている煙。崩れかかった天井の欠片や倒壊した長椅子が、カップル達を下敷きになっている。

爆発か……？教会のどこかに、爆弾が仕掛けられていたのか——俺がそう思うのとナイフを取り出したルーチェが入口の方へ駆けだすのは同時だった。湧き起こる悲鳴の間を縫うように拳銃を構えた男が駆けてきて、こちらに照準を合わせている。

「！」

俺は素早く横っ飛びに銃弾をかわして、傍にあつた瓦礫に身を隠した。ほどなく野太い呻き声上がり、ルーチェが男を始末したのだと悟る。俺は瓦礫から顔を覗かせて周囲の安全を確かめて、ようやく腰を浮かせた。

「何なんだよ、一体……」

膝についた瓦礫の破片を払って、俺は忌々しげに呟く。しかしルーチェは、俺の言葉をすっかり無視して駆けだしていた。

「おい……！」

遅れて俺もその後を追いかける。

奇襲。まさか世界各地から街の人口の五倍は集まるこの日に限ってそんなことが起きるなど、どんな町民も予想していなかった。だからこそ厳戒だったはずの警備がこうも簡単に決壊するなど、エペの誰も思いもしなかった。

一体誰が、何が目的で——。頭の中の整理がつかない内に、俺とルーチェは教会の中に押しかけてきた武装集団と乱戦になった。武装集団は周囲に転がっているカップルには全く目もくれず、俺とルーチェに集中砲火浴びせる。

「（何なんだこいつらは……）」

こいつらは俺達がエペだと知っているのか？俺達がエペだと知っているからこそ攻撃してくるのか……？少なくとも、連中の狙いが俺達だということは間違いなかった。今まさにルーチェが最後の一

人を手に掛けた……そう思った瞬間、

ゴウン。

二度目の爆発だった。俺とルーチェは壁際に叩きつけられる。頭から激突した衝撃に耐え切れず、俺は意識を失った。

「……………」

俺はゆっくり瞼を開けた。意識を失ってからどれくらい経ったのか……いや、それほど時間は経っていないはずだ。ルーチェも俺の前で身を起こす。

自分の周りを取り囲む熱気。教会の飾り窓から炎が上がっている。窓の外へ、むせるように黒い煙を吐き出している。

燃えている。地域随一の広さを誇るこの教会が、中央通りに関門のように聳え立っているこの教会が燃えている――。

逃げ遅れていたカッブル達が慌てふためきながらお互いの手を取り合っている。奴らが永遠の愛とやらを誓った銅像は、既に熱に炙られて溶けてしまっていた。

一度目の爆発で弱っていたらしい天井の瓦礫が二度目の爆発でなだれ落ちてきたらしい、入口は完全に塞がれている上に、瓦礫が炎上して通れそうにも無い。飾り窓は全て、遥か上空だ。

塞がれた。完全に。逃げ場は無い――。

しかし、それでも俺は冷静だった。そう、死ぬのは怖くない。ただ、みつともない醜態を晒して死ぬのは嫌だった。俺はこちらに背を向けているルーチェに声をかける。

「どうやら俺達、生きて帰れそうにもないな」

ルーチェからは「そうだね」という気の無い返事が返ってくる。救助が来るのを期待するのも、それまで俺達が生き残っていることを願うのも、どちらも絶望的な状況だ。

「神様……！」

ふと、どこかでそんな声を聞いた。声のする方を振り返ると、瓦礫の下になった恋人を助け出そうとしている男がいた。しかしそれも間に合わなくて、そいつらは瓦礫共々、炎に飲み込まれていった。……」

どうしてなのか、俺もルーチェも、冷静にその様子を見守っていた。

目を覚ましてから五分は経っただろうか。俺とルーチェは通路の上にあった。ちょうど教会内部の中央に位置する場所だ。ここにまだ火の手は上がっていないが、じきにここも無事では済まない。

俺の全身に広がる軀の痺れ。目を覚まして軀を動かそうとした時に、すぐにそれに気付いた。ここまで来るのにも、ルーチェに軀を引っ張ってもらってようやく来ることができた。

俺は通路の上に身を横たえる。横になって、天井を見上げる格好になった。火の帯が、崩れかかった天井の隙間から逃げていくのが見える。

俺はそっと、横を振り返った。そこには跪いて、俺の様子を見守るルーチェがいた。ルーチェは笑っている。ルーチェの細い指が、俺の頬に触れた。俺の顎に指を添えている。指は乗り込んできた男達を殺した時のままで血に濡れて、真っ赤なままだ。

赤い……。

「大丈夫。君を殺したりはしない」

ルーチェの細い指が俺の鼻の頭に触れた。指先だけで触れている。「君以外の人間は、みんな死んだけど」

武装した男達と自ら命を絶ったカップルの死体が、ちょうど俺達を取り囲むように倒れている。

嫌に静かだった。いや、今も炎は轟々と呻き声を上げているし、火の燃え移った瓦礫がパチパチと悲鳴を上げて燃えている。未だに天井から破片が落ちてきたりもする。

けれど何故か——とても周囲が、静かに感じた。

俺はそつと、口を開く。

「君以外じゃなくて、君と『お前』以外だろ」

そう、まさしくここには、俺とルーチェしかいなかった。

死ぬのか。俺は。

そう思うと、何か気の利いた一言を残してやりたいような気分になった。言ってみれば「オチ」のようなものだ。普段冗談なんか言ったりしない俺だが、この時ばかりはそんな気にもなる。そんなことを言ってみても受け取る相手なんて誰もいないが、だからといってただただ死んでいくだけなのは面白味が無い。

しかし実際に俺の口から出たのは、そうしたものとは全く別のものであった。

俺は、いつの間にか乾いてしまったカサカサの唇で小さく呟く。

よく聞き取れなかったのだろう、ルーチェが耳元を俺の唇に近付けた。

俺はもう一度呟く。

そして——そのまま意識を失った。これが、俺がルーチェを見た、最後の日の出来事だった。

第1章 十六話

流しに落ちる水滴の音で目が覚めた。

目が覚めた——？

うつすら開けた瞳に、木目の浮いた天井がぼんやり見えている。焦点が合う前に、俺は慌てて目を眇めた。隣から漏れてきている一筋の光に目を傷めつけられたのだ。

ここは——？

俺がそう思うのと殆ど同時だった。

「気がついたか」

そう声がするのと同時に、何かを器に注ぐ音がした。そしてぎしぎしと、床を軋ませて何かがこつちに寄ってくる。

それはそつと、俺の目の前に顔をのぞかせた。

「肩が脱臼している。肋骨も傷んでいるようだ。まだ起き上がらない方がいい」

「腹は空いているか？」そいつをそう言っ、手に持ったスプーンの皿を俺に差し出す。

ここはどこだろう——？

第一武隊指揮官ゼーノ・アルベルトの顔を見ても、俺はそんなことをぼんやり考えていた。

今日で丸一日が過ぎたらしい。一年に一度のお祭りアインフェスト、その最中に起きた教会の焼き討ち。あれから一日が経ったという。

「正確には一日半だな」

言いながらゼーノは流しに置いた食器を片づけている。体が傷んでいてもすっかり腹は空いていて、俺はゼーノが用意したスープを残さずたいらげた。

皿洗いを終えたゼーノが俺を振り返る。俺の視線に気づいたのだ

ろ。俺はずっとゼーノの方を見ていた。ゼーノはほんの僅かに微笑む。

「どうした？」

最初に目を覚まして顔を見た時、俺はこいつがゼーノだとは気付かなかった。普段帽子を目深にかぶり、鍰の下から、影が落ちた鋭い目つきでこちらを見ているゼーノ。

帽子をとって素顔を見れば、まだ若い男なのだと分かる。目つきが悪いように見えた瞳も、鍰に隠されてそう見えているだけだった。まだ二十代半ばといった顔。ほんのうつすらだが微笑んでみると、尚更別人のように見えた。声を聞いてようやく気付いたくらいだ、言われもしなければ同一人物だと気付かなかっただろう。しかし俺はそれを口には出さなかった。ゼーノが台所から移動してきて、俺の枕元に立つ。

「少し息が上がっているな」

「熱があるのかも知れない」そう言ってゼーノは膝をつき、俺の額に手の平を当てた。その長い指を平げれば、俺の瞳は塞がれてしまっていた。

水仕事をしたばかりの冷たい骨ばった手の平。しかしその奥から、じんわり温かいものが伝わってくる。そして、慣れたような手つきだった。

「あんた、子どもでもいるのか？」

あるいは下の兄弟がいるのか……。ゼーノが俺の額に手をやって体温を調べる様子はいかにも自然だった。

そして今俺が来ている服。俺は寝巻用のシャツを着せられているようだ、それは明らかに、ゼーノの体格には合わないサイズだ。だからつい、そんなことを訊ねてしまった。

ゼーノはただ、笑うだけだった。

俺は部屋の中を見渡す。食器棚らしきものは無い。食器は全て台所に置いてあるらしい。一人暮らしなのだから、それで事足りるのだろう。ハンガーのようなものも無い。クローゼットはあるようだ。

が、ここしばらく使っている形跡が無かった。

今俺の目の間にいるゼーノは、白いシャツと黒いズボンを履いている。ベッドの脇にある洗濯かごには、折りたたまれたシャツとズボンが入っていた。洗濯して干したら、カゴの中に放り込んでおくんだろう。

矢張り、一人暮らしの部屋のように見える。今俺が来ている服は、どこから持ってきた物なのだろう……。

「倒れているお前を教会から担ぎ出した時は、正直生きた心地がしなかったな」

俺の思考を打ち切るように、ゼーノが訥々と語りだした。

「その辺にあつた水桶の中身をひつかぶって中に入ったが、視界は塞がれるし煙も吸い込む汗は止まらないわ、お前を背負うことはできても、ここから生きて出ていくことはできないかも知れない……。そう思ったな」

俺の命の恩人はゼーノだったらしい。そうなんじゃないのか、とは思っていたが。ゼーノはベッドの淵に、俺に背を向ける形で座った。

「今、エペも含めて万密院の上層部は混沌としている」

アインフェストであることを見計らっていたかのような急襲。一体どの誰が何の為に？犯人探しと住民の不安を鎮めることに、万密院は奔走しているという。

「内通者の存在も疑っているようだ」

ゼーノは、俺に背を向けて座ったまま言う。

「……………」

何故気付かなかったのだろう。俺がスパイだと気付いているのは、ルーチェだけだとは限らないじゃないか。

ゼーノは矢張り俺に背を向けたままで、淡々と語る。

「だから執務室ではなく、俺の家にお前を運びこんだ」

本当に——何ということもないような、口ぶりだった。

「今あの中は慌ただしい。暫くは俺の家で休んでおけ」

そのゼーノの言葉に、言葉面以上の意味はあったのだろうか？

「それと……あの教会から助け出されたのは、お前だけではない」

「！」

俺ははつと息を呑んだ。すぐ傍にいるゼーノにもそのことが伝わっただろう。

俺が助かったのだ。

そうではないか、とは思った。いや、もっと前から気づいていた。俺は目を覚まして自分が助かったと気付いた時から、いつその言葉がゼーノの口から出るのかと、慄いていた。

「ルーチエは今、エペの寮——自室で寝起きをしている。お前ほど外傷はひどくなかったからな。普通に任務に復帰している」

「……………」

「ただ、お前のことを気にかけている。一応俺の家で休ませていることは話しておいたが、随分お前のことが気がかりのようだ」

言い終えてゼーノは振り返った。振り返って、諭すように言う。

「安心しろ、ルーチエは俺の家を知らない」

何を？

何を安心しろって——？

「……………」

そう言っただけ、ゼーノは黙ってしまった。

ゼーノは俺の横で、床にシーツを敷いて眠っている。構わないと言ったのに、こいつは自分が床で寝ると言い出したのだ。

全く……。ルーチエといいジェットといい、どうしてこう、人の話を聞かない奴らばかりなのだろう。

それに、ゼーノはどんなつもりで俺をこの家へ連れてきたのか？何が「安心しろ」なのか。

結局、諸々あるゼーノの疑問に対する、彼の真意は分からなかった。

何故なら俺は、その夜の内にゼーノの家を出てしまったからだ。

洗いざしてある上着に腕を通して、そのままの格好で俺は、国を離れた。俺がカムラッドを辞めたのは、更にその半日後のことだった。

ゼーノは彼が部屋から出て行ったことを確認して、そつと床に横たえた体を起こす。

「……………」

持ち合わせはいくらかあるようだった。本来就いている職があるようだから食うのには困らないだろう。ただ、あの体で普通に働くのは暫く難しいかも知れない。

ゼーノは先ほどまで彼が寝ていたベッドに、背中を預けて仰向けになった。そして、思い出すとも思い出す。昨夜の内から、何度となく思い出している光景だった。彼が目を覚ました瞬間も、その光景がフラッシュバックして蘇る。

教会の奥からもうもうと這い出てくる煙に目をやられながら、自分のかいた汗に体力を奪われながら、焼けただれるような熱気に意識をかすめ取られそうになりながら、ゼーノは走る。辺りに転がる死体も、今は気にかけている場合ではない。

「ルーチエ——！」

ゼーノはそう叫んだつもりだったが、果たしてその通りに聞こえていたかどうか。

「！」

そしてゼーノは、ようやく見つける。

崩れ落ちていく教会の中央——倒れている燕尾服の少年と、よく見知った銀髪。銀髪は燕尾服の口元に耳を近付けていた。

「……………」

ゼーノは叫ぼうとした。しかしやめる。

何故だろう？

妙に辺りが静かだった。勿論そんなはずはない。瓦礫が燃え、熱に耐えられなくなった柱がギシギシと音を立てている。それなのに、

数メートル先にいる燕尾服と銀髪がまるで目の前にいるかのように、その二人のやりとりが煙にかすむ瞳に、くつきりと焼き付いた。

「……………」

燕尾服が何か呟いている。ゼーヤはその唇の形から、なんとか言葉を読み取るうとした。

「……………」

ゼーヤが燕尾服の言葉を辿っている間に、こちらに気づいたのか、銀髪がゼーノを振り返る。

ゼーノは思わず肩を引いた。

ルーチェはようやくゼーノに気付いたらしい。首をかしげるような動作をした。そして、うつすらと、唇を動かす。ゼーノにはすぐ分かった。それが、先ほどの燕尾服の言葉を繰り返しているのだとルーチェの口から出る、燕尾服の言葉。なぞるように繰り返すルーチェは、優しく――

そう、言葉とは裏腹に、優しく笑った。

「殺してくれ」

勿論そんなはずはないのに、妙に辺りが静かだった。

その時ゼーノは何故自分が肩を引いたのか理解した。そして目の前のルーチェを見て思う。

こういう時に、人は笑うのかと。

そしてゼーノは、何故ルーチェが笑ったのかも理解した。

そして、理解できたからこそ、怖かった。

ゼーノは、先ほどまで彼が頭を預けていた枕を見遣る。あの時何故彼に「安心しろ」と言ったのか、今ならよく分かる。

ゼーノは再び瞳をつぶった。それでも、微細な体の震えは止まらなかった。

第1章 十七話

アンリはエペの司令棟を出て、暮色に染まる中庭の上を歩いていた。

ゼーノが語った「彼」とルーチエの話。一年半前の襲撃事件の中で起きた話。ずっと誰にも話さないでいた出来事。

もしかするとゼーノは、それを誰かに聞いてほしかったのかも知れない。打ち明けたかったのかも知れない。

恐ろしいから？あるいは、確かめたいから？自分が何に恐れているのかを。

人間は不安や恐怖を放置できない。だから犯人は犯行現場に戻るし、恐怖の体験を、記憶の中にもう一度求めようとする。ゼーノにも人間らしい弱さがあることを知り、矢張り彼も人の子なのだと、アンリは思う。リゼルグなら「隊長にも怖いと思うことがあるんですね」とでも言って笑うのだろうが、アンリに特別な感慨は無かった。

「……………」

アンリは中庭を抜けて、司令棟から外れた場所にある建物へと向かった。

古い建物だった。置き去りにされたように、万密院の敷地の外れにひっそり建っている。しかし警護は厳重だった。アンリは入口の衛兵にパスを見せる。

「どうぞお通りください」

パスを見た途端、衛兵は急にしおらしくなり、そそくさと道を開けた。外見は城のようだが、建物の中は学校に似ている。吹き抜けの廊下、廊下に囲まれるように建物の中央に広がる中庭。アンリが訓練生だった時に過ごした学校と、少し似ている。しかし当時の思い出に浸ることが全く無いまま、アンリは建物の最上階を目指した。離れのように設えられた敷地の外れにある城の中の、更に外れに

ある小さな部屋。アンリは辿り着いた先で立ち止まった。

そして——閉められた扉に手をかけると、声がした。

「入って」

開いてるから。ノブを回す前から声をかけられて、アンリは動きを止める。部屋の中の者は階段を上ってくる音を聞いて、こちらに気づいたのだろうか。

「……………」

アンリは何も言わずに、部屋に入った。

部屋の中一面に夕陽の光が溶け込んでいる。調度品は、この部屋の主の為に作られたワン・オフものだ。しかし、目の前にある鏡台は布をかぶせたままだった。随分前から使っていないのだろうか。

「久しぶり」

部屋の隅から声がした。細いがよく通る声だった。アンリはそつと、声のする方を振り返る。

飾りのついた立派なベッドがあった。羽毛の布団が、柔らかに主人の体を包み込んでいる。枕に沈んでいた頭を上げて身を起こし、部屋の主は、にこりと笑った。

「不用心ですね」

ドアを開けたままにしておくなど。そう言い置いて、アンリは目の前の人物に近付いていく。

「そろそろ来てくれるんじゃないかって、思ってたから。だから、君の為に開けておいた」

部屋の主の言葉に、アンリは平生のすげない顔をして返す。

「嘘ですね」

「嘘だよ」

そして部屋の主も、しれつと答えた。

「でも、君に来て欲しかったのは、確か」

その顔はいたずらが見つかったかのように、悪びれるようできて楽しそうでもあった。

そう言う主——青年の顔は、終始穏やかに微笑んでいた。

この部屋の主である青年は、アインシュテルンという。尤も本名で呼ぶものは少なく、愛称である「アインス」と呼ぶ者は更に少ない。アンリは数少ない、彼をアインスと呼ぶ人間の一人だった。

「ブラッシングしてくれる？」

アインスが鏡台の前にある櫛を見遣る。アンリは櫛を持って、アインスの枕元に立った。アンリが来ると、必ずアインスはブラッシングをねだってくる。

「普段、髪のお手入れはどうされてるんですか」

「秘密」

短く答えてアインスは笑った。アインスはアンリとそう歳の変わらない青年だった。まだ二十代前半か、二十代にさしかかろうとしている十代と言った所だろう。正確な年齢はアンリも知らない。

常にアインスはこの部屋の中に居て、毎日この部屋で寝起きをしている。彼はいつ訪ねてもベッドの上に居た。しかし、足が不自由だという話は聞かない。

「なんだかこの所、騒がしいみたいだね」

アインスは決してこの部屋から出てこないが、万密院を取り巻く不穏な影に薄々気づいていたらしい。神妙そうな顔つきを言っていた。

「そのようで」

そう短く答えて、アンリは言及しなかった。アインスもそれ以上訊ねてこようとしない。アンリの丁寧なブラッシングに満足したのか、アインスは目を眇めて思い出したように言った。

「日差しがきつくなってきたね。カーテン、閉めてくれる？」

「……一々こうして、誰かに頼んで身の回りのことをしてもらっているのですか？」

不満ではなく疑問としてアンリは訊ねた。アインスの所に給仕の人間が来るのは、食事を運んで来る時だけだ。その食事も、扉の下

にある隙間から差し込まれてくるといいう味気無いものである。

「……秘密」

そう言ってアインスは、薄い唇を綻ばせて笑った。カーテンを閉めるアンリの横顔を見ながら、アインスは続ける。

「でも、こんなことを頼めるのは、君だけだ」

振り返るアンリを見つめて、アインスは更に口を開く。

「金、権力、感情……そんなもので君の歓心は買えない」

一度だけ瞳を閉じて——アインスは、再び目を開けて言った。

「だから、信頼できる」

アインスはじつとアンリを見つめる。目で「枕元まで来てくれ」と訴えかけているようだ。そんなことにも、数回ここへ通う内には読めるようになっていた。

アンリは望み通り、アインスのすぐ傍まで近づいていく。立ち止まってベッドサイドにある椅子に腰かけた時、カーテンを引いても漏れてくる微かな熱気を感じて、思わずアンリは目を細めた。

「君だけが僕を利用したりしない」

少なくとも、僕の知る限りの人間の中で。そう言ってアインスは、再びベッドの上に身を横たえた。

ネフェリムが遺した遺産。それらの力は生理学にも及んでいた。

人間の体に対する直接的な操作。どんな種類の物であれ、関係者はそれを「実験」と呼んだ。アインスは囲われたこの部屋の中で寝起きをしている。この部屋の中で生活している間に起きる変化を、観察されている。どのような種類の操作がアインスに施されているのかまでは、アンリも知らない。

「……でもね、だから時々怖くなるんだよ」

アインスは布団の中から細い腕を投げ出しながら言う。

「君がここに来る理由、ここへ来なくなる理由が、僕には分からない。だから、いつ君がここに来なくなるんだろって、時々思う」

金、権力、感情。そうしたものに動かされないからこそ信頼でき

るし、だからこそ、どうすれば心を動かせるのか分からなくて悩む。アンリの人格はアインスを安心させるのと同時に、不安にもさせているのだろう。そんなことは、当のアンリ自身が一番理解していた。

「……熱があるようですね」

アンリは白いアインスの腕を取り、もう片方の手でアインスの額に触れた。

「久しぶりの来客で、少し興奮されたのかもしれませんが」

「そうかも知れない」

アンリはシーツを直してやって、アインスを寝かしつけた。

「これ以上はお体に障るかも知れません。これで失礼します」

「もう行ってしまうの？」

「また明日来ます」

それだけ言って後は振り返らずに、アンリはその場を後にした。

アインスはずっと、この敷地の中で生活してきた。彼は母親の胎内から摘出された時点で、既に万密院の中にいたという。

標本箱とも言えるような小さく囲われた世界。その中で暮らす、ピンを刺された蝶のようなアインスの生活。

命を繋ぐだけの僅かな蜜を与えられて、羽ばたくこともない。しかし羽は、依然美しいままだ。

城を出たアンリは、アインスがいるであろう部屋を振り返る。振り返るといふか、見上げた。

きつとそこからは、空がよく見える。決して飛び回ることのできない空を見て、羽ばたくことのできる自分の羽を見ながら、蝶は何を思ふのだろう。

第1章 十八話

アンリが初めてアインスに会ったのは三年前のことになる。付き合いの長さを感じられないほど、アンリのアインスに対する態度は淡々としていた。それは、彼らが初めて顔を合わせた時から変わらない。

「初めて見る顔だね」

アインスと初めて会った時——アンリは矢張り、部屋の中でベッドに伏せるアインスと相對していた。アインスがベッドから出た所を見たことは、一度も無い。

アインスはアンリを見つめている。しかしその視線はどこか、「興味が無い」というか、どうでもよさそうな、投げやりな感じがあった。アインスは薄い唇を開く。

「色んな人がここに来て、色んな人が、すぐに僕に会いに来るのをやめていったよ」

そうなのだと聞かされていた。アンリは黙っている。まるで話が聞こえていないかのように眉一つ動かさないアンリの様子を見て、アインスはきゅっと口を結んだ。しかし、すぐに、目を細めて続けた。

「だから、君もやめなくなったらいつでも言って。一日中部屋の中で寝てるだけの人間の話し相手なんて、つまらないだろうから」

それだけ言くと、アインスは早々と身を伏せて、頭から毛布をかぶってしまった。そして、布団の中からくぐもった声を出す。

「今日はもう帰ってもいいよ。『今日はとりあえず顔合わせだけすればいい』って言われてるんでしょ？」

何故そのことを？アンリはそう訊ねるつもりだったが、アインスが先手を打った。

「いつものことだから」

アンリは「失礼します」と言い、確実に自分が見えていないであ

ろうシンスに向かつて慇懃なお辞儀をし、そのまま退室した。

世代交代によって発生する変異と差分の観察。アインスはそうしたお題目の為に、離れに作られた部屋の中で生活している。アインスは、「交配することで引き継がれる特性、逆に、生まれてくる子どもの代では失われてしまった特徴」などを、継続的に観察する為の標本なのだという。何を観察しているのかまでは、アンリも知らない。

一体いつからアインス一族の観察がなされているのか不明だが、彼は丁重に取り扱われているようだった。アインスの状態は週に一度、専属の研究者によって「観測」されている。

一方で――観察を続けていく内に、いくつかの個体はストレスで死に絶えていったという。一つ所に閉じ込めて自由を奪い、常に他人に観察されるという環境に耐えられなかったからだ。

また、研究を続けていくうちに「他者や異文化と接した際に、個体がどのような反応を示すのか」という疑問が研究者の中で上がった。「異質な物との出会い」が個体にどのような影響を及ぼすのか、彼らは知りたがった。

要は化学反応だ。「金属に酸素を加えるとどうなるのか」というのを考えるのと同じレベルで、研究者達はその疑問に思い至った。そして、それを観察する為の人間が必要になったという。

アンリは、もう何人と選ばれたか分からない「ビジトウル」の一人だ。それは「訪問客」を意味する言葉で、定期的なアインスの「話し相手」の役割を担っている。

アインスはその存在自体が機密事項である為、ビジトウールの条件に適合する者は少なかった。

少なくとも、「ネフェリム遺物の恩恵に浴すアインスを盗み出そう、アインスにどのような施されている実験が施されているのか探ろう」とする下心が無い人間でなければならぬ。

また、アインス自身にも問題があり、なかなかビジトウルが固

定することは無かった。

それは、アインスの存在が機密であるが故の弊害だった。

「常に人が張り付いて標本を観察することは不可能だ。これまでの結果から、それが個体へのストレスとなり、死期を早める原因となることが分かっている。しかし、だからと言って見張りを置かないわけにはいかない。この二律背反を解決するには——見張りと標本を、同一の存在にしなければならない」

アンリは、アインスにどのような実験がアインスに施されているのかを知らない。

しかし、アインスが願うだけで花瓶が割れたり、花瓶に生けた花が発火したりすることを思えば、それも薄々と知ることができた。

「どうしたの？ 考え事？」

回想するアンリを現実に戻したのはアインスの声だった。ベツドの淵に腰かけているアンリの顔を、寝そべりながら覗きこんで笑っている。

「珍しいね。今の君、隙だらけだったよ」

意識を目の前の現実には照準を合わせたアンリを、アインスの紫色の瞳が見つめていた。

この目だ。

この目が——花瓶に生けてあった花を、灰燼にしたのだ。

「ええ。少し、考え事を」

アインスの能力は、彼が気にいらぬ人間を一瞬で葬ることができる。証拠が残らないから、罪を隠蔽することも容易い。

アインスはそうやって、派遣されてきた気に入らないビジトウルを、文字通り抹消していったのだ。

「ひどいな……。せっかくこうやってこの部屋に来てくれたのに、別のことを考えてたの？」

「いいえ、あなたのことを考えていました」

即座に切り返された答えに、アインスの言葉が詰まった。しかしからかうように、アインスは再び口を割る。

「今更君のことを疑ったりはしないけどさ……。やっぱり気になる？どうして僕が手を触れずに物を壊せる

のかとか、部屋の鍵を開けられるのかとか……」

「それができるのに、何故ここから出ようとしないのか」

そつとケーキにナイフを入れるような――穏やかながら、鋭い口調だった。アインスは押し黙る。

アンリがビジトゥールの役割を引き受けたのは、単に「任務だから」というのが最大の理由だった。しかしそれだけではない。彼には一つ、気になっていることがあった。

これだけの能力を持ちながら、何故アインスが脱走をしないのかということだ。

アインスは笑う。

「簡単だよ。僕の体のどこかに、時限式の爆弾が埋め込まれているんだ。一定期間カウントをリセットしないと爆発するし、破壊しても爆発する。僕の場合は魔法じゃないからね。物質を『消す』ことはできないんだ」

あいつらは賢い連中だよ。そう言っただけでアインスは仰向けになった。アインスの不健康に薄い胸板が天井を向く。仰向けになっても、その瞳はアンリを見つめていた。

「どうしてそんなことを訊いたの？仕事に関係無いことを君が訊ねてくるのって、珍しくない？」

確かに、アインスとの会話に限らず、アンリが仕事以外の話題を口にすることは、殆ど無かった。

「腑に落ちないと思ったからです。私には、あなたの能力とあなたが置かれている状況が矛盾しているように見えました」

「で、今の話を聞いて納得したの？」

「はい」

「やっぱりなあ……。そうだね……」

仰向いたまま、アインスは胸を震わせて含み笑いをする。アンリはそこで、ようやくアインスの方を振り返った。

「そうだ、と申しますと？」

「君が仕事以外の事を訊いてくるからさ、珍しいなあと思ったんだけど……。やっぱり君は、任務を遂行できるか心配していただけなんだね」

それは……まさしくアインスの言う通りだった。任務を完遂する為に障害となる可能性は、全て排除しなければならない。

しかし——もしかするとアインスは、先の一言でアンリから個人的な感情を見いだせることを期待していたのかも知れない。そう気付いたアンリは、静かに息を呑んだ。

「いいんだよ、別に。本当のことなんだろう？」

ごろん、と九十度横を向いて、つまりアンリの方に体を横たえて、アインスは笑った。

「だから君は『いい』んだ。ここに來た他の連中は、おべっかを使って僕の機嫌を取ろうとしたり、僕が刃向ったりしないように威圧的な態度だったり……そんな連中ばかりでうんざりだったよ」

万密院がよこした、アインスの相手をさせる為だけの、役割を演じる為の人形達。そして、アインスがそんな人形遊びにも飽きた結果、彼らが生きてこの部屋を出ることは、二度と無かったのだ。

「本当に君は正直だよ。おまけに欲も無い。だから僕は……何の気兼ねもなくこうして話ができる」

そう言って、アインスは黙った。かなり長い間そのまま沈黙を保っていたので、一体何事かと、再びアンリがアインスの方を振り返った時——アインスは、そのままの格好で寝息を立てていた。

それが、アンリがアインスと初めて会って、三か月後の出来事だった。

翌日、アンリは約束通りアインスの部屋を訪ねた。アインスは上半身を起こして、本を読んでいた。本は以前、アインスに頼まれて

持ち寄ったものだ。アインスはアンリの姿を認めて笑う。

「おはよう」

まだ弱々しい朝日の光が差し込む中、アンリはアインスの髪を梳いてやった。アインスの髪はいつも手入れが行き届いている。毎日の給仕の連中が面倒を見てやっているのだろう。体も湯につかっているのかタオルで拭いているのか、常に清潔だった。

それから、お互いに口も聞かずに過ごした。アンリは本を読んでいた。アインスはぼんやりと手の平の中の水時計を見つめている。これは、いつか「何か面白い物はないか？」とアインスに訊かれたアンリが、持ってきたものだ。た。

「ねえ……」

けだるく無為な時間を過ごす中、アインスが思い出したように口を割った。

「僕にはその、友達っていうのがいたことないんだけど……」

そう言うアインスだが、むしろ彼には家族すらいない。彼らは、アインスが生まれた時には死んでいたか、はたまた別の場所で「観察」を受けている。

「どういう感じなんだろう？ みんな、友達と一緒にいる時は、どんな風に過ごすんだろうね？」

アンリは読みかけの本を開いたままアインスを見つめる。そしてアインスは、アンリを見つめて——からからと笑った。

「ははは、アンリに訊いてもしょうがないか。アンリも、友達がいなさそうだし」

確かに——自分に適切な答えを返せるとは、アンリも思っていない。級友や仲間と呼べる人間はいる。ただしそれは、所属する組織の中にいる間だけだ。いわゆる「プライベート」と呼べる時間の中で、そんな風に慕える人間がアンリにはいない。

「上の人に『友達がほしいです』って言えば、連れてきてくれるかな？」

と、アインスは言った。アンリは「友達というのは肩書を指すも

のではなく、私的な感情によって共にいることを望む人間のことを指すのですよ」と、訂正してやった。するとアインスは、

「知ってるよ」

とだけ、短く返した。

短く返して、アインリを見つめた。

第1章 十九話

宿舍で眠っていたリゼルグは、トイレから帰る途中、アンリと遭遇した。アンリは外に出ていたらしく、軍服を着たままだった。

リゼルグは声をかけたものかどうか躊躇ったが、その間にすれ違う。アンリの動きは風のように淀みなく、すれ違ったのがまるで一瞬のようだった。

「……………」

躊躇ったお陰で出そこなった言葉を呑みこみ、リゼルグはそのまま自室に向かう。

「ただいま」

寝っ転がりながら本を読んでいるイズルに一言投げかけて、リゼルグは部屋の扉を閉めた。リゼルグとイズルは同室だった。

「今、廊下でアンリとすれ違ったよ」

「へえ……こんな時間までアンリ先生が外を出歩いてるなんて珍しいな」

「でしょ？」

何故イズルがアンリのことを先生と呼ぶ真意はよく分からないが、確かにアンリなら、教鞭を持って黒板の前に立つ姿が、よく似合うような気がする。とリゼルグは思う。アンリの模範的な生活態度が、イズルに「先生」呼ばわりをさせているのだろう。

アンリは必ず門限の前に帰宅して、決まった時間に眠って、いつも同じ時間に起きるらしい。消灯時間もとくに過ぎた今の時間まで出歩いていることは、珍しかった。

「先生は『王子様』の所に居たのかも知れないな」

言って本を枕の横に放り出し、イズルは仰向けになる。そしてそのまま、頭の下に両手を敷いた。腕をくの字にして楽な体勢をとる。イズルの言う王子様——アインシュテルンのことは、イズルとリゼルグも知っていた。彼らも、一度はヴィジトウールの候補に挙が

ったからだ。イズルは「他人の世話を見るのなんて俺には向かない」、リゼルグは「どちらかと言うと剣を振るうことの方が得意ですの
で」という理由で、それぞれ断った。

「そうかもね。でも、ちよつと意外かな」

リゼルグが含み笑いをするのでイズルは訝りながら訊ねた。

「何が？」

「だってさ……アンリって悪い人じゃないけど、あまり人とコミュニ
ケーションをとろうとしないじゃない？だからさ、ずっと部屋の
中に閉じ込められてるっていう『アインシュテルン』って人と、上
手くやってけるのかなあって思ってたんだけど……」

リゼルグの疑問は尤もだった。アンリは、任務が無い時は巖の如
く押し黙って、途端に、かすみがかつたように存在感をなくしてし
まう男だ。正直、「仕事」以外の時の彼がどう過ごしているかなど、
イズルにも想像できない。

「確かにな。まあ、でも、分からねーよ。ずっと部屋に閉じ込めら
れているから『気難しくてロクに人と会話もできないような奴』か
も知れないが、『閉じ込められているから世間知らずで、騙される
ことを知らないお人好し』っていう可能性もある。先生だって、別
に『しない』ってだけで、コミュニケーションができないってわけ
じゃないだろ。それは、俺達だってよく知ってる」

確かに。リゼルグは心の中でイズルの言葉に同意した。食堂でた
またま見かけて話かけても「はい」や「特に」としか答えないアン
リだが、任務の時に、特に「今回の作戦行動について」語る時はよ
く喋る。それも必要最低限の言葉で分かりやすく。

分かりやすく短い言葉で話せるのは、話し方が上手い証拠だ。む
しろ、アンリの会話の能力は高いと言える。

けれどアンリは、会話することに魅力を感じないのだ。いや、彼
の場合は「必要性」を感じないのかも知れない。他社との他愛の無
い会話に、「理由」を見いだせないのだ。

だから、悪い人間ではない……。そう頭で分かっている、リゼ

ルグはアンリに声をかける時はなんとなく躊躇ってしまっし、「王子様」の所に長年通っているということが不思議に思っていた。アンリに気の利いた冗談や話ができるとは思えづらい。

「とにかく、先生が王子様に気に入られているのは確かだろ。だからもう二度と、俺達にお鉢が回ってくることもない。いいことだろ、それは」

「まあ、そうなんだけどね……」

イズルとアンリも聞かされてはいた。「王子」のお気に召さない人間は、二度と生きて地の砂を踏むことはかなわないのだと。そこまでして王子が重宝される理由までは聞かされなかったが、なんとなく二人は、それを察している。

「ネフェリム関連、といったところだろうな、あの王子。何が起きてるんだか知らねーけど、機密事項扱ってことは、ネフェリムの何かを知っているか、遺物の解明に必要な知識を持っているか、あるいは……」

実験体にされているか。リゼルグもイズルも、思い浮かべるだけで口にはしなかった。しかし、二人の表情は知らず曇っている。

万密院の中で人体実験がされているという話は聞いたことがない。しかし、実用化を狙うなら、人体を使った実験が必ず必要になる。

薬の場合それは「治験」とも呼ばれるが——研究所の中で行われていることは、もつと殺伐としたものではないかと、リゼルグは考えていた。だから、「存在」すらも隠されているのではないかと……。リゼルグは、薄く笑いながら言った。

「僕は王子様って言うより、『眠り姫』だと思っただけ。一つ所で眠り続ける自分を起こして、外の世界に連れ出してくれる人間を待っている……。そんな感じなんじゃないかって思っただけ」

しかしいつになっても、王子様——彼を外に連れ出す存在など、現れはしないだろう。姫はずっと、いばらに包まれた冷たい城の中で眠り続けるのだ。

イズルは寝返りを打って横になった。そして、入口に立ったままのリゼルグを見遣って言う。

「まーな。王子つつたって、別にそいつの迎えを待ってる奴なんで、どこにもいないだろうしな」

一瞬言い淀み、逡巡するように瞳を伏せて――イズルは続ける。

「姫っていうのは王子の迎えを待つものらしいが……。この世のどこかには、いつまでたってもお迎えが来ないお姫様もいれば、誰かにも必要とされていない王子様っていうのも、いるんだろう」

「……かもね」

「迎えが来ないお姫様ってのも惨めだが、誰からも求められていない王子様ってのも、哀れなもんだな」

イズルの言葉を聞いて、リゼルグは広い城の中で佇む王子の姿を思い浮かべた。

豪華な食堂。立派なダイニングテーブル。この世のものとは思えないほど美味しい食事が並べてあり、テーブルの上座には王子が座っている。

けれどそこには、王子の他に、誰もいない。

長いダイニングテーブルにも、王子以外に着席しているものは、誰もいない。

そうやって王子は一人、食事をしている。

「……………」

黙って想像にひたるリゼルグの意識をゆすつたのは、イズルの声だった。

「で、どうなんだよ。そこん所は。リゼルグ『王子様』？」

イズルの呼びかけにリゼルグは――矢張り、薄く微笑みながら答えた。

「さあ、どうだろうね。僕は迎えを待つお姫様に会ったこともなければ、誰かを迎えに行かなければいけないって思ったことも無いから」

リゼルグは上流貴族、グロワリアと呼ばれる階級の人間だった。今はその地位を捨てて、市民階層に身を置いている。リゼルグは自ら、生まれながらに賜った地位を捨てた。

「一応俺は死んだことになってるから、厄介なこともないよ。リゼルグだって、本当の名前じゃない」

イズルはエペの中で唯一、エペに入る前のリゼルグと付き合いがある人物だった。初めて二人が出会ったのは、まだリゼルグが、「リゼルグ」と名乗る前のことだった。

「……知ってるさ」

イズルはリゼルグと初めて出会った時のことを思い出す。随分昔のことのようでいて、しかし、思っていたほど時の流れは早く無かった。二人が初めて会った時から、まだ二年ほどしか経っていない。それに……二人の間に付き合いがあった時間も、長くは無かった。振り返ってみれば——自分達は先の長い人生の中で、ほんの一時居合わせたただだったのに過ぎないのだと感ずる。

そして、エペの中で再会するとは、思ってもみなかった。

イズルはリゼルグと過ごした過去の出来事をぼつぼつと思いだす。暗がりから浮かび上がるように、思い出達はひっそりと蘇ってきた。既に背景がモノクロがかったように霞んで見える記憶達だが、どれも二年以内出来事のはずだった。

結構、最近のことだったんだな……。

イズルはそう思いながら瞳を伏せて、再び寝返りを打つ。

「……ま、その話はもういい」

イズルは回想を打ち消すにやや投げやりに言う。そこでようやく、リゼルグは扉の前から背中を離して、部屋の中央に入ってきた。しかしイズルは、なおも続けた。

「知ってるか？一年半前、モルゲンシュタインっていう結構デカい教会が襲撃される事件があった」

その言葉を聞いて——はっと突かれたように、あるいは胸を押されたように、リゼルグは足を止める。そして、再びイズルを見遣つ

た。

「それで今回の咎負い騒ぎだ。一年半前の事件はかなり周到な用意がされていて、教会が爆破されるまで、誰もこの計画に気づかなかった。そして咎負いの脱獄も、奴がここを出るまで誰も気づくことができなかった」

敵ながら見事な事の運び方だった。誰に準備を気づかれることも無ければ、今もなお、その尻尾をつかませていないのだから。

そう……。敵はかなり万密院の内部情報に詳しい人間だ。咎負いのことも知っているとなれば、かなり情報入手経路も限られてくる。あるいは

「いるんだろう、この中に。裏切り者が」

リゼルグは進みかけた足を止めたまま、イズルを見つめた。

イズルはこちらに背を向けているのに——冷ややかな視線で、見つめられているような感じがした。

第1章 二十話

イズルはベッドの上から這い出て、部屋の真ん中にある小さなテーブルの前に腰をかけた。リゼルグは部屋の隅にあるティーポットで、用意したカップの中にホットミルクを注ぐ。そしてイズルと向かい合うように、椅子に座った。

お互い、何となく眠れなかった。そんな時は無理に眠ろうとせずに、気が紛れるまで他のことをするのが一番だ。

それに、眠れない理由もなんとなく分かっている。ただ、自覚しただけなのだと——リゼルグは気付いている。

イズルは、リゼルグが淹れたホットミルクに口をつけながら言った。

「ルーチエが捕まえてきたフォトグラフの男……。何度こっちが刺客を放つても、悉く返り討ちにしたらしいな」

エペが軍隊であるのに対し、正規の暗殺部隊である「トランキリテ・オンブル」は、この件で面目が丸潰れだった。名の通り「静寂なる影」を意味する彼らは静かに、しかし、影のように——確実にターゲットを捕捉する。

文字通りの「暗殺」——誰にも知られず、本人にも気付かれないまま始末をすることが彼らのウリだった。それが事もあるうちに、「逆に始末」されるという最大の証拠を残しかねない方法で、幾人かが任務の最中に命を落としてしまった。それは、これ以上無い不名誉だった。

イズルは背もたれに小さな背中を預けて、思い切りのけぞりながら言う。

「オンブルの連中の細かい動きまで分かっているとすると、やつこさんの根は相当深い所まで伸びている。こっちの自作自演を疑いたいくらいにな」

ダージリンティーの入ったカップを唇から離してリゼルグが訊ね

た。

「狂言つてこと？でも、そんなことをして何になるの？」

「誰にとつても何のメリットも無い。だから、狂言の可能性は限りなく低い」

「うーん……。とりあえず分かることは、オンブラを始末した連中は、咎負いの脱獄を手伝った奴らの一味つてことかな……」

「その可能性はアリアリだな。というか、それしか思い当たらん。あの時期でこのタイミングだ。十中八九そうだろう。あのフォトグラフの男をオンブラから守ろうとする理由が、他に無い」

イズルの言葉を受けてリゼルグは頭をひねってみるが、どうも気の利いた、幸先の良い考えが出てくる気配は無かった。

「そう。理由だ」

言つてイズルは、頭の後ろで腕を組んだ。

「オンブラの連中を片っぱしから始末してまで、連中があの男を守ろうとした理由は、何なんだろうな？」

「……え？」

思わず出た間抜けな声を打ち消すように、リゼルグは開いてしまった口を慌てて閉じる。

「むしろ逆だろう。そいつを守るんじゃないくて、口封じに殺すのが一番合理的なはずだ。口外を恐れる必要も、この先裏切られて咎負いを奪取されるような心配もいらなくなって、一石二鳥になる」

「それが連中にとつて、取りうる最善の策だったはず……つてこと？」

イズルの思考を辿るようにリゼルグはおずおずと言った。イズルは眉一つ動かさずに答える。

「俺ならそうするね」

息を呑んで自分を見つめるリゼルグの視線を軽くいなしながら、イズルは続ける。

「オンブラを出し抜くなんて、連中が用意した刺客は相当な手練れだろう。そんな奴を何人も用意して、その結果万密院を敵にしてま

で、連中がその男を守ろうとした理由は、何なんだろうな」

確かに……何故だろう。

今の万密院は、実行犯から首謀者を洗い出そうとしている。むしろ、そこからしか首謀者を見いだせないでいる。実行犯の足首の先に錨でも吊るして海に沈められれば、連中の足取りは途端に掴めなくなるだろう。内部犯の可能性を疑っているものの、検討は殆どついていない。片っぱしから疑っている状態なのだ。

そう考えてみると、確かに妙だった。

「そこまでする価値がその男にあるのか、連中にそれほどの温情味があるのか……いや、それはないだろう。ここまで計算された計画を立てた連中だ。多くの犠牲を払って成就にこぎつけたはずだぜ」
そもそも万密院に潜入する時点で、どれだけ連中の同胞が無名の墓の下に納まったことだろう？

万密院も馬鹿ではないのだ。むしろ警備体制は、その辺りの一国の宮中よりも、ずっと嚴重だ。

「咎負いを奪取した理由もよく分からないしな。まあ、咎負いそのものがどういう人間なのか、俺はよく知らねえけど。ここまで話を大ごとにしてそんな重罪人をつささって、一体何になるんだろうな？」

ほんの一瞬だった。

今のイズルの一言を反芻したりゼルグは、視界の奥が爆ぜたような錯覚を覚えた。

「まあ、咎負いそのものがどういう人間なのか、俺はよく知らねえけど。ここまで話を大ごとにしてそんな重罪人をつささって、一体何になるんだろうな——？」

「……って、ことは……」

それはつまり——。

イズルは察したらしいリゼルグを見つめて、にやりと笑った。

「そ」

自分とイズルは同じことを考えている。そう確信したりゼルグは、

だからこそ思いを口に出さなかった。

少なくとも、咎負い奪取の首謀者達は、咎負いが何であるかを、知っているのだ。万密院の中にいる人間にでさえ存在が秘匿されるその人物に、どんな意味があるのかを――。それを知らなければ、攫ったりなんかしない。

「まー……これ以上は考えても、何も分からないな。ふぁ……。いい感じに眠くなってきたし」

自分のカップに手をつけて、イズルは一気にミルクを飲み干した。彼は紅茶が苦手なので、お茶を飲む時は、イズルの分はミルクを用意することになっている。イズルの様子を見て目の前のカップの存在を思い出したリゼルグは、殆ど減っていない紅茶によやく口をつけた。

「じゃ、おやすみ」

そう言つてイズルはそのそとベッドに入つて横になった。そして、そうと思う間も無く静かな寝息が聞こえてくる。先ほどのまくし立てるような弁舌が嘘のように、穏やかな寝息だった。

「……………」

すやすやと、言動とは裏腹に――何故かそこだけは妙に年頃の少年らしい寝顔を浮かべながら眠るイズルを横目に、リゼルグは二つの揃いのティーカップを片づけた。

時計は二の数字の前を通り過ぎて、とつくに辺りは寝静まっている。リゼルグは何度も寝返りを打っているが、どんな体勢になつても落ち着かなかつた。

「この中に裏切り者がいる」

それは昼間にも聞いた言葉のはずだった。それも矢張り、イズル本人の口から。

この中に裏切り者が……。それはリゼルグのよく知る人間かも知れないし、顔すら合わせたことの無い人物かも知れなかった。

万密院の中は広い。エペの中ですら、知っている人間より知らない人間の方が圧倒的に多い。そんなことを悶々と考えているせいで意志とは裏腹に、リゼルグの目は益々覚めていく一方だった。

「……………」

つい先ほどの話の中で——イズルはこうも言っていた。

「これから『裏切り者探し』が始まる」

脱獄の手助けをした犯人が件の少年だとしても、そいつはほんの一時期エペの中にいただけ。そんな人間に、ここまで周到な用意ができるはずが無い。

「きつと、彼に助力した人間がいるはずだ。もしかするとそれは複数人、あるいは組織ぐるみで。むしろ、そう考える方が自然だ。これだけのことをたった二人の人間でできたはずがない」

確かにイズルの言う通りだろう。問題は、犯人をどうやって締め上げるかだった。

「教会の件から数えて一年半も何も尻尾を掴ませないとは、連中もなかなかやる」

そう言つて、イズルは愉快そうに——ただし瞳はどこか刺すような険を孕んだように細く——笑った。そう、何一つ連中の手がかりは残されていない。

何故だろうか……………。

もし自分なら、トリゼルグは考える。自分なら、相手の様子を監視できてかつ、全く疑いのかからない立場に立とうとするだろう。

つまり、木を隠すなら森の中。

犯人達は今も、万密院の中にいるのではないか——。

万密院は咎負いの脱獄で、内通者の存在を確信せざるを得なくなつた。それでも犯人達は、全てでは無いにしても、万密院の中に残るのだろう。一番怪しまれるのは疑わしきもの。これまでと変わらず、万密院の中で、内部の動向を窺うのではないだろうか？

思っているよりも、犯人は近くににいるのかも知れない。たとえば今すぐ自分の傍で、何食わぬ顔をしながら息をして、周囲の様子を

窺ったりしているのかも知れないのだ。

しかし、「では誰が」と問われた所でリゼルグには答えられなかった。そこで思考が詰まり、急に瞼が重くなってくる。

「（これ以上は考えてもしょうがないな……）」

戦場における一番の敵は「漠然とした不安」だ。

恐怖は対象が見えているのに対し、不安は文字通り「なんとなく」心が安らまず、落ち着かない状態を指す。

そもそも敵が何であるか「分からない」から、恐れるのだと……。ゼーノから聞かされた兵法を全て思い出すまでもなく、リゼルグの意識は、風に吹かれて散っていく砂塵のように薄らいでいった。

第1章 二十一話

ロッキングチェアの背に凭れて眠るオールド・ワンの頬を、ゆるやかな風が撫でていった。開け放したままの窓。半開きになっているドア。不用心に眠いるその男の背後に立つ影が一つ。寝息に合わせて動く本の背表紙が、影の指先に触れた。

「いらっしやい」

そう言うオールド・ワンの声に合わせて、本がひよこひよここと上下に揺れた。本を掴もうとしていた細い指が止まる。

「誰だろう……。メレグちゃん、かな？」

本の向こうから透けてくるような笑顔が想像できる、明るい声でオールド・ワンは言った。

「……一体あなたの目はどこについているんですか？」

メレグは彼の顔にかぶさっている本をつまみ上げる。

「どこにでも、さ」

そこでメレグとオールド・ワンは見つめ合う形になった。背に凭れかかったままの姿で——メレグを見つめながら、オールド・ワンは笑った。

メレグがオールド・ワンに会うのは、今月に入って三度目だった。一度目はカタロスの検診が終わった直後、そして二度目は、つい昨日のことだった。

昨夜、メルトウール診療所をオールド・ワンが訪れたのだ。何のつもりか、彼はタイキシードに花束という正装スタイルだった。彼はその華やかな出で立ちに似合う、咲いたような笑顔を見せている。普段は少年のような屈託無い笑顔を見せるのに、この時ばかりは——格好のせいもあったのかも知れないが——大人びて優雅な、「男」の笑みだった。

「こんばんは」

ここの場所は教えていないはずなのに——。そう動揺するメレグは、ドアを開けてオールド・ワンの姿を認めた後も、驚きを隠せな
いでいた。そのことに気付いてか気付かずか、オールド・ワンはな
おも笑顔で

「ちよつと用があつて外に出ていてね。ついでに寄つてみたんだ。
あ、でも、花束はここへ来る時に買ったんだよ。これは、君の為に
買った」

オールド・ワンが腕に抱えていた百合の花束を受け取り、メレグ
はまじまじとオールド・ワンを見つめる。

「『どうしてこの場所を？』 何故私の所へ？』 一体何の為に？』
とか、訊きたいことは山ほどあるだろうけど、ぼくが言いたいこと
は一つだけ」

オールド・ワンは玄関の入口に手を添えて、ほんの少し前のめり
になる。そしてその格好で、メレグの耳元に唇を近づけていった。

「あの子は暫く、帰つてこない」

だから暫く、あの子の診療は必要無い。

それだけ言つて——しかし一瞬だけにつこり笑つて——オールド・
ワンはその場を後にした。

メレグはオールド・ワンが立ち去つた後も、彼が残した言葉の意
味を考えた。自分とオールド・ワンを繋ぐ唯一の人間がすぐに思い
当たる。

しかし、あの言葉の意味は何なのだろう？

どうしてこの場所を？ 何故私の所へ？ 一体何の為に？

そして、この花束は、何なのだろう——？

だつてあの部屋の中、殺風景でしょう？ そう言いながら、目の前
のオールド・ワンが笑つた。

メレグは丸いテーブルを挟んで、オールド・ワンと向かい合うよ
うに座っている。メレグはオールド・ワンが手ずから淹れた紅茶の

入ったカップには全く手をつけない。

「何故、そのことをご存じなのです？」

オールド・ワンがメレグの家を訪ねたのは、昨夜が初めてだった。オールド・ワンはにこりと笑う。

「どうとでもできるさ、そんなことは。君とぼくの間には『彼』っていう知り合いがいるしね」

「……………」

メレグは黙ってオールド・ワンを見つめる。

こうして彼と直接会うのはもう、五年振りくらいになるだろうか。つまり、メレグが初めてこの地に来て以来ということになる。

何せ彼女は、オールド・ワンの手引きで、この街に来ることになったのだ。

「正確に言うと、僕はただの『案内人』だけだね。ここに住むという選択は、君自身がしたんだから」

そうだった。ここに来た時のことが昨日のこのように思い出せる……ように思えたが、実際には、それなりの年月が経っていたのだな、とメレグは感じる。

五年……。それは短いようで長い。

メレグ自身は毎日変わり映えのしない、ささやかな発見のある日々を過ごしているのに過ぎないが、周囲の状況は随分変わっていた。隣国はこの国と同じく議会制の導入を始めたし、関税が緩和されたことで、輸入品が安く大量に入ってくるようになった。一方、相変わらず長引く戦争によって徴兵にとられた友人が亡くなったことも、風の便りで聞いた。「鉄道」なる金属でできたレールが大地の上に敷かれたのは、つい最近のこと。しかしそれも、もう一年前のことだった。

早いものだ……。そして、確実に世の中は、変化している。

「それで、『彼』が暫く帰って来ないというのは、どういうことなのでしょう？」

勿論ここへ来たのはそんな思い出に浸る為ではない。メレグは射

竦めるようにオールド・ワンを見つめる。

質すメレグの冷たい声に、オールド・ワンは肩を竦めた。

「あの子、万密院の人間に捕まってしまったみたいだね。とりあえず教会に向かつて、その後から一度も自宅に戻っていない」

「彼はあの少年……ジェット・ガジェットーノの足取りを追ったのですね？」

「うん」

「では、カタロスという青年も一緒に？」

「だね」

言葉の内容とは裏腹に、オールド・ワンは淡々と言う。口元に微笑を浮かべてすらいた。

「……随分悠長なですね。興味深い観察対象が奪われたというのに」

「別に……奪われてなんかいないさ。ただ、君達の目には見えない所にいるだけだよ」

君達の目には。

メレグは言葉を打ち切り、オールド・ワンの顔をまじまじと見つめた。

この顔だ——。この顔で、今も見ているのだろう。

「彼」のことを。

「とはいえ……直に彼を見れない状態なのは、ぼくも辛い」

言っただけでなく、オールド・ワンは顔を顰めた。といっても、片目を瞑って優雅に「ふう……」などとため息すらついているのだが、恐らく顰めている。これが彼なりの「困った」表情なのだろう。「そうだろう？ 遠くから眺めているよりも、直に触ってみなければ分からないことが、たくさんあるんだから」

それはそうだろう、とメレグは思う。他ならない科学者の自分なら、その言葉の意味がよく分かる。観察しているだけで物事が分かるのなら、仮説と検証を繰り返す「科学」にどれほどの意味があるだろう？

ソドムで過ごした五年間——。自分の身の周りだけを見ても、世界が大きく変化していることを感じるができる。長引く戦争、万密院の勢力拡大、技術革新——。これらをきっかけに、世界は変わっていった。きっかけがあれば、世界は如何様になる。

世界はいくらでも変わる。しかし、変わる為にはきっかけが必要だ。それは「可能性」とも言えるだろう。

つまり、閉ざされた箱庭の中での変化には、限界があるのだ。

統率によって管理された精緻な世界。そこでの観測結果は正確に記録されていく。実験結果を正確にする為に、条件を確定する為にあらゆる「想定外」を環境の中から排除する。メレグは居た世界はそういう世界だった。

そして——だからこそ彼女は、万密院をやめたのだ。

メレグが——自分がフリーになったのは、もつと世界は広いと思っただけだ。

信じたかったのかも知れない。こんな閉ざされた世界の中にある可能性はほんの一部で、世の中にはもっとたくさんの、自分の予想を超える可能性が、世界が変わるきっかけがあるのではないかと信じたかったのだ。

そして、そう思うのは多分、自分が科学者だからなのだ。

自分の科学者人生をかける価値のある何か、この万密院の壁の外にあると信じて——彼女は、メレグは万密院を去った。

その時に彼女はオールド・ワンと出会った。正確には、オールド・ワンが従える者どもと。

「もしこの環境に、自分のしていることに限界を感じるのなら、ついて来るといい」

まるで思考を読まれたように胸の内をそっくり言い当てられて——メレグは、万密院を出た。という手引きがあつたのか、彼女は死んだことになっている。メレグというこの名前も偽名だ。

そして彼女は——「炎」の力を持つ「彼」と出会った。早速「未

知の可能性」に出会った彼女は、自分の選択が間違いでなかったと知る。しかし彼女にとっての一番の謎は――

「どうして、私をあの場合から連れ出したのです？」

メレグは一度だけ訊いたことがある。寒空の下、馬車を走らせて雪の染みた街道を駆けていく。メレグの隣に座るオールド・ワンは微笑みながら言った。まるで少年のような顔をして。

「君と同じさ」

僅かに傾けたオールド・ワンの横顔が、メレグの方を振り返る。

「万密院を抜けてまで外に出ようとした君が、これから何をするのか、知りたいんだよ」

科学者であるメレグだからこそ、その言葉は実感を伴って重く響いた。

しかし、オールド・ワンとの音信はそれっきりで、同じ街に住みながら、二人が顔を合わせることは無かった。

それでも彼女は感じていた。オールド・ワンの意志ある視線を。オールド・ワンの従者に声をかけられたあの日――食堂でメレグに声をかけたあの者は、まるで古くから万密院にいるかのように振舞っていた。まるで、ずっと自分のことを見ていたかのように――。

気付いたことは無いが、恐らく自分の周りにはオールド・ワンの放った「監視者」がいるのだろう。そして監視者からの報告を受け、興をかきたてられれば、直接彼自身が出向く。オールド・ワンも人間だ。遠くの場合で起きていることを、直接見聞きできるはずが無い。

そしてその監視者は、世界中にいるのだろう。彼の「好奇心」を満たす為だけに――。

「実を言うと、『あの子』がいる場所は、もう分かっているんだ」
オールド・ワンは例の「深刻そうな顔」をして言った。相変わらず声には緊張感が無い。

「では、手をこまねいて見ていたりせずに、従者を送って連絡をと

つてはいかがです？」

「そうなんだけどね……」

オールド・ワンはテーブルの下から地図を取りだした。どこにもそんなものを隠しておくスペースは無かったが、地図は実に自然な様子でスルリと出てきた。

「今あの子がいる場所は、ここだ」

言いながらオールド・ワンは、地図の上に載せた指の下には広々とした海が広がっている。

「ふざけないでください。何も無い海の上ではないですか。それとも、彼がこの海の下で眠っているかと？」

「あはは、案外ブラックなジョークも言えるんだね。メレグちゃん、ちゃんづけで呼ばれることに抵抗を覚えつつ、メレグは地図の上を眺める。この辺り一帯の海域は潮の流れが速く、点在している島の上にも人はいない。

いや、確か、この辺りは――

「あ、気づいた？」

オールド・ワンはいたずらっぽく笑う。いい歳をした大人のはずのくせに、何故そうした表情が似合うのだろう――。一瞬だけ湧いたそんな感想をすぐにかき消し、メレグは考える。

「確かこの辺りには……『ロッキット』があつたはずです」

「その通り」

ロッキットとは、絶海の上に浮かぶ巨大な要塞だった。正確には、要塞として使われていた建物を改造した場所である。

かつて王の尊厳を守護せしその建物は――今は、牢獄と呼ばれている。

「……なるほど」

メレグはようやく理解した。何故オールド・ワンが「彼」を救出しようとしなかったのか、黙って手をこまねいて見ているのか。

そして、何故「困ったような顔」をしているのかも。

「ここにはちよつと変わった規則があつてね。この中では『ゲーム』

が開催されているんだ。そのゲームで優勝した人間は、牢から出ることが許される」

それはメレグも知っていた。万密院に居た時から話は聞いている。もしここにぶち込まれなくなければ、守秘義務は守れ、万密院を裏切るようなことがあってはならないとよく脅されたものだ。

「このゲームっていうのが、ちよつと変わっててさ。優勝すると『牢から出る』ことができる代わりに、面白いルールが一つだけある」
「オールド・ワンは嬉々として語る。」

「……………」
そしてメレグは、その笑顔を見て確信した。

オールド・ワンが「彼」を助けに行こうとしないのは、それができないからではない。

その理由は、さつきも聞いたように——ごく単純で、彼らしい理由だった。

第二章 二十二話

エペに入ってすぐのことだった。ジェットを除く、他の隊員と一切話しをしようとしないうちに俺を見かねたように、ルーチェが言った。俺を心配してと言うよりは、興味津々と言った様子で。

「興味無いんだね。他の人達のこと」

俺は背中を預ける格好でベッドによりかかっている。俺は、ベッドの上でうつぶせになりながら頬杖をつくルーチェを見上げた。しかし、すぐに顎を引いて視線を下ろす。

「……だからなんだよ」

俺は否定も肯定もしない。代わりに、「俺に構うな」と遠回しに言っただけだ。ルーチェのくすくすと笑う声が、頭の上から降ってくる。

「怖いのか？人と関わるのが。それとも単にシャイなだけ？」

その言葉を聞いた俺は振り返った。

そのままルーチェを見る。見たというか、睨んだ。視線だけで相手を刺せるような、鋭い眼差しを向けてやる。

「勘違いするな」

俺は膝について、百八十度体の向きを変えた。つまりルーチェと正面から向き合うように、体勢を変えた。そのまま俺は続ける。

「怖いわけでもないし、苦手なわけでもない。ただ、必要無いだけだ」

これは本当だった。

確かに俺は、その顔を覚えることもないまま両親に捨てられた。常に一人でいたから、友人といった記憶を思い返すこともできない。社会は俺を見放し、人々は俺に見てみぬふりをする。

彼らは認めたくないのだ。自分の生きる世界に、俺のような人間がいることを。

世界は美しいと、安心するに足るものだと思いたいから、俺のよ

うな「落伍者」を排除したがる。

しかし。

だからなんだ。だから、なんなんだ？

それは俺が、この世界を憎む理由に、なるだろうか。

「俺がへりくだらないといけないほど、この世界はそんなに素晴らしいか？そこに生きてる奴らは上等か？違うだろ。俺がそんな奴らに引け目を感じる理由なんてあるものか」

「……………」

「俺は連中が嫌いでも苦手なわけでもない。ただ、俺が関わってやる必要が無いだけだ」

俺はそう言っただけ、会話を打ち切るつもりだった。そのままルーチェに背を向ける。

瞬間。

「はは」

歯と歯の間から、思いつき息が抜けるような音がして、思わず俺は首だけ振り向かせる。

しかし間に合わなかった。俺が振り向き終わらないうちに、

「—————」

ルーチェは乱暴に壁へ背中を預け、肩をひくつかせながら、大声で笑った。

「ごめんごめん」

ルーチェの変化は一瞬で、笑っていたのもほんの一瞬だった。笑い終えて、ルーチェは穏やかに謝る。

「ふふ。ちよつと、おかしくてさ」

「何がおかしいんだよ」

「『関わってやる必要が無い』なんてさ、何様のつもりなんだろうって」

「世の中にはお前みたいに、頼まれもしないくせに近寄ってくる人間がいるからな」

「そうだね。でも、『必要が無いから話しちゃいけない』ってこと

は、ないでしょう？」

「……………」

「あのさ、一つ訊いてもいい？」

「……聞くだけなら聞いてやらないこともない」

「君ってさ、何の為にこの仕事してるの？」

ギクリと、音がするのではないかと思えるくらい、俺の肩は震えた。

落ち着け、ルーチェが言っている「仕事」は「エペの隊員としての仕事」のことだ。今俺がスパイとしてここに潜入している、本業のことを指しているわけじゃない――。

「何の為に生きてるのとか、そういう訊き方をしてもいいんだけど……。それだと分かりにくいでしょう？だから、簡単に言っちゃえば、『何でこんな所に来てまでお金稼いでるの？』ってことだよ」「そんなことを訊いてどうする」

ルーチェは答えない。

「……そうだな。人間、食わないと生きていけないのは確かだ。だが食う為に生きてるわけじゃない。食う為に生きるだけなら、動物と同じだ」

「動物と……？」

「そうだ。お前が言う通り、『食う為』になんてことを仕事をする為の言い訳にするような人間が、この世界にはたくさんいる。だから言っただろ。そんな世界が本当に素晴らしくて、そこで生きてる奴らが上等なもんかってな。」

「……ふふ」

「何だよ……」

ルーチェは寝そべったまま、組んだ腕の上に顎を載せて笑う。

「いや、君の言う通りだと思ったんだ。その通りなんだけど……そこまではつきり言われちゃうと、清々しいなって」

ルーチェは寝そべったまま、組んだ腕の上に顎を載せて笑う。瞳は依然俺を見つめていた。

俺を見つめて——口の端を上げる。

「だから気になるんだ」

ルーチェはそつと右肩を上げて、顎の下にしまっていた右腕を伸ばす。

殺意も予備動作も全く感じられないその動きに、俺の神経の反応が遅れた。

俺が身を引く前にルーチェの指先は、俺の前髪をつまんでいた。

「君はさ、何がしたいの？」

何の為に生きてるの？君が言う、この素晴らしくない世界で——。ルーチェは俺の瞳に少しかかっている前髪を持ち上げて、遮るものの無くなった俺の瞳を見つめている。

何の為に生きてるの——？

ルーチェは俺を見つめて口を閉じたまま、俺にそう訴えかけている。

俺はルーチェの白い手首に指をかけた。そしてそのまま、細い手首の先を、俺の前髪から離させる。

「理由なんか無いな」

降りた自分の前髪を見て、俺は掴んでいた白い手首を離す。

「俺は何かの為に生きてやるつもりはない。ただ生きている間は——俺のしたいことをしてやる。したいことをするのに理由は要らない。——理由が無いとしたいこともできないとか、めんどくさいだろ」

そう、俺の中で唯一信じるに足るのは、この心の中で常にくすぐる欲望だ。

「愛だ希望だ絶望だ、そんなものより、自分の中から湧き出る欲望だけが信じられる」

辺りがシーンと静まり返る。鳥の鳴く声も聞こえない。もう夕日もとつくに落ちたのだと、そこで俺はようやく気づいた。ルーチェは相変わらず俺を見ている。俺を見て笑っている。

俺を見て笑っているのに——目は伏せている。

そう気づいた瞬間、伏せた瞳の下にある、唇が開いた。

「本当に、それだけ？」

何がと俺が問う前に、細い声が、優しく訊ねた。

「君が他の人達と関わらない理由」

「怖いわけでもないし、苦手なわけでもない。ただ、必要無いだけだ」

これは本当だった。本当だが、全てでは無い。

俺が持つ炎の殺しの力——。生まれたと同時にこの力を持った時から、俺の孤独は決定づけられていた。そんな力を持った人間を、どうして信用できるだろう。何故枕を並べて眠ることができだろう——？

いずれ離れていくと知るなら、最初から関わらない方が面倒も無い。元より、他人を頼りに生きることを勘定に入れて計算しているようじゃ、話にならない。素晴らしいの真逆に行くこの世界で信じられるのは、自分の力と欲望だ。

だからこいつのことも——構わずにいるつもりだった。

ここまで言っただけなのに——何故かルーチェは、俺に近づいた。そしてあの夜——。俺の力がルーチェに露見した日の夜——あいつは俺の力を知りながら、俺の手の中に、その小さな鉢周りを埋めた。何故だろう……。

俺は確かに、人はこの力を知ったら俺から離れていくと考えていた。だから、極力人とは接しないように生きてきた。

そこに、俺の誤算がある。

いざこうしてルーチェが、俺の力を知りながら俺に近づいてくるのを知った時——

俺は、怖かった。

いつかゼーノから聞いた通りだった。人間は、自分に理解できない、把握できないものを恐れる。戦場において、その「不安」が最大の敵になるのだと。

ここで躊躇いこいつを始末しなかったことが、後々になって、こんなに後悔することになることを計算できなかったことも——俺の誤算、最大の見誤りだったと言える。

何故か俺は、その時の夢を——エペに居た時の夢を——見ていた。いや、夢では無かったのかも知れない。俺は、眠っている意識の中で思い返してただけなのかも知れない。

人間は把握できないものを恐れるから、指の隙間から覗くように——あの日の出来事を、もう一度確認してただけなのかも知れなかった。

俺は、途切れていた意識の中で自分がしていたことを思い出す。夢か記憶かはっきりしない意識の渦の中で。

そして、封ぜられていた俺の目は、そこで覚める。

第二章 二十三話

重い瞼を開いた途端、瞳に刺すような痛みを感じた。

「つつ……」

俺は起き上がろうとした。自分の意思よりもツーンポ遅れて、頭を起こすことに成功する。そのまま胸を起こそうとした時、ようやく瞳が周囲の景色に馴染んで来た。ぼんやりとしていた視界に焦点が合う。

「……………」

民家のようなだった。部屋は吹き抜けになっていて、ここから部屋の中の全てが見渡せる。今俺がいる部屋から一步外に出ると、そこはダイニングルーム。奥には玄関が見えた。玄関の横にはトイレがある。

俺はベッドに寝かされていたらしかった。俺は硬いシーツから身を起こして、つま先を床につける。ひやりとした木造の床板の感触が、俺のつま先を捕まえた。

ダイニングルームに食器棚は見当たらない。皿やコップは、流しやテーブルの上に放置されている。窓に干されている洗濯物の数は少なかった。そして、尻から感じる硬いベッドの感触——いかにも男の一人暮らしの部屋にあるものっぽい。

部屋の向こう。窓から射した光を避けるように、そいつは、テーブルの前の椅子に座っていた。

「……………お前は？」

どう声をかけたものか一瞬迷ったが、そう訊くしかなかった。俺の「目覚めから身を起こすまでの一部始終」を見守っていたらしいそいつは、組んだ手の上に顎を載せながら言った。

「それは、こっちが訊きたいんですけどね」

そう言ってそいつは、椅子から腰を浮かせた。そのまま俺に近づいてくる。

「まあ、来る者を拒まないのが、この街ですから……」

まだ若い男だった。そいつは、そう言いながら、俺との距離を詰めて来た。そして立ち止まるのと同時に。

「ようこそ。『誰でも入ることの出来る』監獄の街へ」

言い古したセリフなのだろう。男は妙に演技がかった様子でサラリと言葉を読み上げる。

「入所に際して証は要らない。ただ君が望むだけで、この街は君を歓迎する。そして、この地に骨をうずめようとするのもしないのも、君の自由だ」

「しかし……」と男は続ける。いや、見た目はまだ若い。声も少年の面影を残している。少年の声が言った。

「ただ、ここへ来たことに対する後悔だけは、するかも知れない」
この時俺は、まだ知らなかった。ここがどこなのかということは元より——今の自分が置かれている状況を。

「僕はユノー。この『八番街』の治者です。どうぞよろしく」
ユノーは恭しく名乗って、頭を下げた。勿論、慣れたような様子で。

カタロスがこの家に戻ってきたのは、俺とユノーが対面してすぐのことだった。

「あ、目が覚めたんですね！」

瞳と口も大きく開けてカタロスが笑う。彼は腕にたくさんの紙袋を抱えていた。買い物から帰ってきたところらしい。床に足をついて立ち上がるうとする俺を見て、カタロスは慌てて止めようとしてくる。

「まだ動かない方がいいですよ。外れてるらしいですから、骨」

言われなくても、そんなことは分かっていた。右肩をやられている。腹には重い衝撃の名残が、ジンジンと感じられた。

「すぐに医者を呼びますから、少しお待ちください」

そう言つてユノーと名乗つた青年は、玄関から出て行つた。影のように、するりとカタロスの横を通り抜ける。

「待て……！」

追いつがる俺の声がユノーの耳に届く頃には、既に奴の姿は消えていた。

「……………」

「えっと……」

俺と二人残されたカタロスは、腕に紙袋を抱えたまま立ち往生する。俺はジロリとカタロスを睨み上げて言つた。

「……知っているんなら答える」

俺が目覚めた民家、ユノーと名乗る青年、監獄街、『八番街』の治者。そして、再び俺の前に現れたカタロス。

「ここは、一体、どこなんだ？」

カタロスもつい一日前に目を覚ましたばかりなのだと言う。

「覚えてますか？ 僕達、キャンディッド教会の地下に向かつたんです」

「大丈夫だ。意識を失う直前のことまでは、全部覚えてる」

「僕達は地下にある拷問室で出会つた男に気絶させられて……どういうわけか、この街の入り口に捨てられていたらしんです」

「……………」

「ここはロックイットと呼ばれる、海上に浮かんだ監獄街です」

「ロックイット……？ そんな、馬鹿な……」

カタロスの細い声を聞いて、俺は自分の耳を疑つた。アントリオ海域近辺にあるという監獄島、ロックイット。そこへ足を踏み入れた者は、二度と島を出ることは適わないと言われるいわくつきの場所だ。島を取り巻く潮の流れが速いからというのもあるが、ここから生きて出た人間の話は、全く聞いたことがないという。

「お待たせしました。医者呼びましたので、診ていただきますしゅう」

俺の混乱とは無関係に、ユノーが帰ってきた。干し柿のような顔のてっぺんに、しわがれた髪の毛を載せたじいさんを連れている。俺はユノーを見て言った。

「ここは…… ロックイット、なのか？」

恐々と訊ねる俺を見て、何故かユノーは愉快そうに答えた。

「ええ、そうです。最初にそう言いませんでしたっけ？あ、そうか。『ロックイット』という名前までは言っていないませんでしたね」

医者からの手当てが終わった後、俺とカタロスとユノーは、揃いで家の外に出た。

「ここは居住区に当たる八番街です。隣の九番街も居住区で、七番街は商業区です」

ガイドをするユノーを真ん中に挟んで、俺とカタロスを周囲を見渡しながら歩く。路傍には民家が連なり、露店もある。店先に置かれた果物や野菜を、貨幣と交換する主婦らしき女の姿も見える。

「一番街に司法、二番街に行政、三番街に立法をそれぞれ司る機関を持ち、五番街は学術研究区になっています。六番街は工業区ですね。学術研究区で発明された技術が使われ、そこで作られたものが商業区に流れていくようになっています」

ユノーの言葉を半分聞き流しながら、俺は考える。確かにユノーは、この場所を「監獄街」だと言った。しかし、どうだろう？

目の前には住宅街、そこで買い物をする主婦の姿。ユノーの話を聞く限り、この街には統治機構もあるようで、恐らくここには、議会のような組織があることも推測できる。

まさしくここは「街」だった。「監獄」という言葉からは無縁のように思えるイメージしか見えてこない。

「驚かれているようですね……。まあ、最初は誰しもそうなんですが」

俺の思考を読んだように、ユノーがにやりと笑って言う。

「巨大な監獄の中に街が築かれている、と考えていただければよろしいです。まあ、ここには看守などはありませんがね。警備兵は居

ますが、あくまでそれは警察のようなものですから。四六時中監視されるようなことはありませんので、ご安心を」

「……本当にここは、監獄なのか？」

何度も言われているが、思わず、そう訊ねずにはいらなかった。ここは本当に、監獄なのだろうか――。

ユノーが俺を振り返って言った。

「追々、お分かりただけますよ」

俺の問いを知っていたかのように颯爽と、そして、この先に起こることを予期しているかのように。

ユノーは、にやりと笑って言った。

ユノーに連れられて街を一通り回った。とりあえず食料を買った。けなら、八番街から出なくてもよさそうだった。

「しばらくは僕の家に住ってください。くれぐれも、変な気を起こして騒がれるようなことがないようにしてくださいね」

それだけ言うと、ユノーはすぐに自分の部屋に引込んだ。床下の貯蔵庫にある食料は、好きに使っていいと言う。俺とカタロスは芋と豚肉の入ったスープとサラダを作った。ユノーの分も作ったが、奴は自分の部屋から出てこない。

いや、そんなことはどうでも良かった。俺はずっと、考え続けていた。恐らくそれは、カタロスも同じだっただろう。

一体誰が、俺達をこの街の前に捨てたのだろうか？

矢張り地下室で見たあの男だろうか？だとすれば何の為に？もしカタロスを捕らえる為であれば、カタロスまでここに放り込む必要は無かったはずだ。

一体、何の為に――？

そんなことを考えて悶々としている日々が三日続いた。ユノーは仕事に出ているらしく、日中は家を空けている。（頼んだ覚えは無いが）居候している身なので、俺とカタロスは洗濯をしたり、食事を用意したり、掃除をしたりしていた。この島から出るなとユノー

に言われているので、他にもすることも無かった。

「なんかこういうの、新鮮ですね」

カタロスが前置きも無く言った。俺は視線だけカタロスの方に向ける。

そういえば……。初めてカタロスが俺の家に來た翌日、こいつは頼まれもしないのに、わざわざスープとサラダをこさえて、かごの中に放り込んでおいた洗濯物を、勝手に洗っておいたのだ。

それももう、随分昔のことのように思える。こんな辺境の地に来ているのだから、なおさらだろう。もう一生、あの家に戻れない気さえてくる。俺のそんな予感とは裏腹に、カタロスは楽しそうに続けた。

「こういうのは全部任せっきりにしていたんで、毎日自分で洗濯や料理をしているのが、なんだか不思議な感じです」

「全部任せていた？」

誰に？

俺が手を止めて振り返るとカタロスは「はは」と、小さく笑った。「お前、もしかして……結婚してるのか？」

あるいはしていたのかと。そう訊ねてみた。カタロスは、困ったように顔を歪めて笑った。

「はい……。だから僕がすることは何もなくて……。まあ、牢に入られる前の話ですけど」

そう言ったきり、カタロスは口を閉じてしまった。今女房がどうしているのか、離婚してしまったのか、そういった話をカタロスから聞きだすことは、ついにできなかった。

「さあ……ユノーさんが帰ってくる前に、お掃除を済ませちゃいますね」

カタロスは箒を握り直して、踵を返す。俺から背を向け、床の木目に箒の先を滑らせていった。

そつだ。今まで、あまり考えたことが無かったが……

俺がそうであるように、カタロスにも過去がある。

牢に入れられる前、奴に結婚暦があつたとしてもおかしくは無いのだ。十五歳になれば、みな成人とみなされる時世——訝ることは少しも無い。そして、過去の無い人間はいないのだ。過去を忘却することはあつても。

それなのに——俺の胸の中は霧がかかったようにすっかりしなくて、鉛を抱えたように鈍重だった。

俺にカタロスの知らない過去があるように、カタロスにだって俺の知らない過去がある。当たり前のことじゃないか。きっと、ユノ——だって、この街に住む人間だって、全ての人々がそうなのだろう。

第二章 二十四話

俺達がロッキットに来て五日目。草木と街灯りが寝静まった後、俺はカタロスと、とりとめもない会話をした。

「ひよつとするともう、このまま……ソドムには戻れないのかも知れないな」

「やっぱり、ソドムに戻りたいんですか？」

仰向けになったカタロスが首だけ振り向かせて訊ねる。俺は天井を仰いだまま答えた。

「いや……」

俺の頭の中にオールド・ワンとメレグの顔が思い浮かんだ。

俺がオールド・ワンの余興に付き合うのは、食いぶちを繋ぐ為の金が欲しいからだ。メレグは——俺が望んだことではないとはいえ——命を助けてもらった恩人だ。ただ、だからと言って、そこに俺が引け目を感じる必要は無い。あの女だって、「俺の能力を知ることができるかも知れない」という打算があつて、俺を助けたのだ。

そう——ソドムに戻る「理由」が、俺には無い。

俺は、ユノーの寝室に視線を這わせる。シーツを被ってこちらに背中を向けているユノーの寝相を見ることができた。

「確かに一生ここにいれば、食いつぶされることは無い。多分、俺達は試されている」

「試す？」

「ユノーの言う『上層部』とやらは、俺達の様子を伺っているんだろう。このまま俺らが変な気を起こさなかったら、そのままここに置いてやつてもいいと思ってるんだろ、多分。俺達を信用する気が無いなら、俺達をユノーの家じゃなくて、牢屋にでもぶち込んでおけばいいだけの話だ」

「……………」

「……………でもな」

俺は視線を百八十度移動させて——つまり、カタロスの方を向いて言った。

「そんなのは飼われているのと同じことだ。俺はいつまでも、こんなせまつこい場所にいるつもりはいない。じきに出て行ってやってそれで俺は、俺のしたいことをする」

しいんと、部屋の中は静まり返っている。微かに、俺とカタロスの息遣いだけが聞こえた。口を開こうとするカタロスの息遣いもはっきり聞こえる。

「じゃあ、教えて下さい」

カタロスがそんな風に、人に物を要求するような言い方をするのは、珍しかった。俺は思わず、眉尻を上げる。カタロスが、そのまま続けた。

「あなたがここを出てまでしたいことって、何なんですか？」

ずつとここにいれば安定した生活が保障されているのに何故——？ 出ることが難しいと知ってなお、何故檻の中から、出ようとする——？

カタロスは訴えるような、切実そうな表情をしていた。そんな顔をするカタロスも、矢張り、珍しかった。

「……まるで、説教でもするような口ぶりだな」

そう口から出て——俺は笑った。何故なのか、笑ってしまった。

「……たとえば、だ」

俺は瞳を閉じて、思い返すように言った。好きではないが、今は懐かしく感じる、ソドムでの日々を。

「たとえば食事。時々入れ替わるランチと新聞の記事を楽しみたいと思ったら、俺はチップをポケットにねじ込んで、そのままつすぐカフェに向かう。たとえば仕事。今日は仕事をする気が起きないそう思ったら、俺はジャケットを引っ掛けて街に出るか、ベッドの上で寝っ転がるかしてるだろう。依頼主から来る催促や脅しの文句なんか、全部無視だ」

ソドムでの俺の生活が自由だったとは思わない。生きていくのに

金が必要で、その為に人を殺さなければならなかった。俺は社会の底辺にある日陰の中でしか生きていけなかった。

あそこでの生活に、自由は無かった。

しかし、金を得るために人殺しになったのも、他の依頼人をはねつけてまでオールド・ワン専任になったのも、俺自身の意志なのだ。あの場所では――自由は無くても、選ぶことはできたのだ。

「……ふふ」

忍ぼうとしたが思わず漏れた。そんな囁くような笑い声が聞こえてくる。

「なんだよ」

「訊いたのはお前だろ？」そう言う俺に対して、なお漏れてきたカタロスの笑い声に、俺はもう一度「なんだよ」と、言っていた。カタロスは首を振って答える。

「いいえ……」

カタロスは顔を天井に向けて続けた。

「やりたいことをやるって言うと、自由な感じがしてかつこいいですけど、あなたの話を聞いていると……単に本能に忠実って感じですね」

「悪いかよ」

「ちつとも」

「『いつか』じゃダメだ。今をいつでも俺の思っただ通りにしていないと、面白くない」

ここはいつ死んでもおかしくない世界なのだ。死んでからでは、泣き言も言えない。『いつか』の保障なんて、誰にもできないのだ。だから俺は、嫌だった。他人に恨みごとを言いながら死んでいく惨めな人生なんて、まっぴらだった。

社会からのけ者にされて、更に自分から進んでそこから外れて、そのくせ、自分以外の「誰か」のせいにしないと、満足に死ぬこともできないなんて……。

絶対に、ごめんだった。

「……………」

今日はいつになく喋りすぎた。そう気付いて、俺は取り繕うに言っ

た。「お前はどんなんだ？」

カタロスは言葉に詰まってるようだった。しかし搾り出すように、ぽつぽつと口を開いた。

「そうですね……。僕も、いつも自分のしたいようにしたいと思ってました」

カタロスは振り返る。

「昔ね」

一体どこを見ているのか、カタロスは笑っていた。そしてそのまま、いつも言う「おやすみなさい」を言うこともなく……カタロスは俺に背中を向けて、シーツをかぶった。

このところよく思う。カタロスが結婚していたことを知った時からだ。

気にならなかったわけではない。それでもカタロスの過去を訊ねなかったのは、俺が奴のことを見たままの人間だと思っていたからだ。

のつぽでばんやりしていて、邪気の削がれる笑顔を常に浮かべる。見知らぬ他人の死や未来を思って泣くだけの想像力はある。

全部、カタロスの外見や「今」に関することばかりだ。

考えてみれば、俺が奴の過去で知っていることなんて、何一つ無い。奴にだって、人には知られないでいる過去がある。誰にも打ち明けないままの思いも記憶も。

ただそれを、他人に言わないでいるだけだ。俺やその他の人間達と、同じように。

言わないから、知らない。けれど、知らないから存在しないわけではない。

「ああ、そうか……」

そうか……。このことなのか、と思う。今なら、よく分かる。閉じた瞼の裏に、少年のような笑顔が見えた。

『だってさ、見てるだけじゃなくて、実際にお話した方が色んなことが分かるだろう？』

俺は隣にいるカタロスを見た。寝息を立てている。こちらに背中を向けたまま。

こいつのことが、近くにいたはずなのに、何も見えない。

第二章 二十五話

目を覚ますとユノー顔が目の前にあった。俺の肩に触れようとしたいらしい手を止めて、ユノーは笑う。

「声をかける前から目を覚まされるなんて……。僕も、まだまだですな」

そう言つて、ユノーは俺の横で寝ているカタロスの肩をゆすり始めた。

あなた達に見てもらいたいものがあるのです――。

そう言うユノーに連れられて、俺とカタロスは外に出た。店の前を箒で掃除する店主と、手に取った芋に欠陥がないか丹念にチェックしている主婦……。すっかり見慣れた光景だった。

今まで思いもしなかった。こんな日常の風景に、目の馴染む日が来るなんて……。

裏路地の陰に身を隠し、人を殺して食を得る。そんな生活をする俺が、子どもの手を引く主婦の後ろ姿を今、こんなにも「当たり前」に思える……。

街を出て、更に三十分程歩く。今まで街の外に出たことは無かった。カタロスも物珍しそうに周りを見渡す。そう、見渡せる程に広い。目の前に広がる、風に煽られるま草木がま揺れる草原――。ここが監獄と呼ばれる島であることを忘れてしまう。

ユノーが俺達を連れてきた先は、巨大な塔の前だった。

「おはようございます」

ユノーはにこやかに、塔の前にいる男達に声をかける。そこにいる三人の男はみな、銃を構えていた。ライフルとマシンガンだ。手にしているものの物騒さとは正反対に、一人の男がニカッと笑う。

「ようユノーぼっちゃん。そいつらか？一週間くらい前に、この島に流れ着いた奴つてのは」

「ええ。許可が下りましたので、この中にあるものを彼らに見せたいんですけど、通していただけますか？」

「あい分かった」

男はさつとどいて、塔の中に行く道を開ける。その中に入っ
ていこうとするユノーに続いて塔の中に入って行こうとする俺を、道を譲った男が言った。

「いいか坊主達。くれぐれも、変な気起こすんじゃないぜ」

「？」

男の言葉を聞いて怪訝がる俺の後ろを歩くカタロスは「ご苦労様です」と言っ
て頭を下げる。男は再び、二カつと笑った。

「ああやってダインさんは、初めてここに入る者を脅しつけているんです。『何事も最初が肝心』だそう
で。彼も基本的にはいい人です。す
から、気にしないでください」

俺達に忠告した男の名前はダインと言らしい。坊主頭にマシンガンを構えたマツチヨな「いい人」か……。

「何か言いたげですね」

「別に」

俺とユノーがそんなやりとりをしている間に、カタロスはキョロキョロしていた。俺も辺りを見回す。外から見ると、この建物の中に「あるべきはずのもの」がない。

階段がない。上へと続く階段がないのだ。俺は天井を見上げる。床から十メートルほどの所にそれが見えた。明らかに、塔の外観に合っていない高さだ。確実に「上の階」は存在している。

「こちらへ」

ユノーは、塔の中央にあつて塔の内部を貫くように立っている「支柱」のような物の前で立ち止まった。

「少々お待ちください。今『呼びます』」

ユノーは、細い指で支柱の表面に触れる。

そして——そう間も置かずに支柱は「開いた」。支柱の表面に入

った一筋の線を境にして、支柱の壁が、左右に向かって五十センチずつほど開いたのだ。

思わず目を瞪る俺と、逆に目を細めて興味深げに支柱を見つめるカタロスを見て、ユノーは笑った。

「どうぞこの中へ」

お入りください――。

ぽっかりと、扉のような形に口を開けた支柱の中へ、俺とカタロスは乗り込んだ。支柱の壁がするすると左右から滑ってきて、再び支柱が「閉まった」時、

「!？」

頭の中を何かがすつと通り抜けていく不快感を覚えて、俺はさすが身構える。

「大丈夫ですよ」

ユノーがにこりと笑って俺を制する。ユノーは壁に手を触れた。壁には文字が刻まれている。エレベーター、というらしい。この支柱は「エレベーター」という、異なる階を行き来するための「乗り物」なのだそうだ。支柱の中をこの箱が移動し、壁に書かれた文字が階数を表し、触れた階数に箱が止まる。

「着きました」

チーンと、初めて箱が開いた時と同じ音を立てて、目の前の扉が開いた。

「……………」

俺とカタロスは、ほぼ同時に言葉を失った。しかし、息をするのも忘れた苦しさにはつとする。

茫洋と緑色に光るメーター。その針が指し示す見たことのない文字。金属らしきものでできたパイプが部屋のそこらじゅうを這い回るように、びっしり壁や天井に張り付いている。

「このパイプは、『ステンレス』という素材でできています」

ユノーが、壁に密生しているパイプに触れて説明する。

「今の技術であれば、人の手でこれを作り出すのに、あと二百年は

かかるでしょう」

人の手であれば――。

ユノーは棒立ちの俺達を置いて部屋の奥に進む。俺とカタロスは、慌ててその足取りを追った。部屋の奥にある装置。この部屋にある全てのパイプが、この機械に繋がっているようだった。

「どうぞこの前に」

立ち止まり、ユノーは右手を機械の前に差し出す。俺とカタロスは、二の足を踏んだ。

「大丈夫ですよ。噛み付いたりはしませんから」

メーターと同じく緑色に光る機械……。その表面に走る幾何学的な模様と、そこから漏れてくる淡い光。もしその光さえ無かったらこれは機械ではなく、表面に模様が浮いているだけの金属の塊に見える。

俺はそつと、機械の前に手を差し出した。

「――」

瞬間、さあつと弾けるように――機械の中の光が、俺の視界を覆うほど広く周囲に広がった。

見える……。視界を光に隠されてなお見える。鮮明に――。

路傍に打ち捨てられた死体。それにたかるカラス。その光景が覗ける路地裏の前を通りすぎる人々。

乱暴に荒らされた部屋。床に転がって割れたウィンググラスと、血を吸ってじっとり湿った絨毯。

燃える偶像。焼け落ちる屋根。

今にも崩れようとしている教会。その中で横たわる黒髪の少年。その目は、周囲の炎を映しているように、金色――。

そんな映像が、一遍に俺の頭の中に流れ込んできた。一遍に見たはずなのに、どれも鮮明に、見終わった今でも全てを思い出せる。しかし、映像を見ていたのは、ほんの一瞬だった。はっとして気づく。伸ばしかけた俺の腕の先が機械の表面に触れようとして――

止まっていた。

「今のは……」

ぽつりと、俺の背後にいるカタロスが呟いた。

「今の教会は、一体……」

一遍に見たはずなのに、俺はどの映像も鮮明に思い出せた。
当然だろう。

どれも全て、俺の過去の「記憶」なのだから。

「驚かれましたか」

ユノーが機械の方を振り仰ぎながら言う。

「そして、今のでお気づきになったでしょう」

俺はゆるゆると右に九十度振り向いた。つまり、ユノーの顔を見れる方向にだ。

「この機械は触れた者の過去を映し出して、それを、周囲にいる人間に見せることができるのです。つまり、今あなたが手を離す瞬間まで見えていたあの光景は、ここにいる僕達全員が目に見ていた、ということですよ」

……。

「ばかな……」

「……そんなことできるわけないだろ。確かに見てくれは変わってるが、こんなもの、ただの金属でできた箱じゃないか」

そう言っただけはあざ笑う。しかし、二度と箱に触れることはできなかった。

「おや？ 今、お聞きになりませんでしたか？ カタロスさんの言葉……」

今の『教会』は、一体……。

「今カタロスさんは、あなたしか知りえるはずのない光景を、口にしたじゃありませんか」

そんなこと、言われなくても分かっていた。それでも……

「信じられない気持ちばかりですよ。でも、こんなこと、どんなペテンにかけた所でできることじゃありませんから」

「……………」

「これはペテンでも手品でも……まして、魔法でもない」

「じゃあ、何なんだよ」

「『技術』です」

俺の問いにユノーはついと、口の端を上げた。

「そして、遺品」

ユノーは体を九十度時計回りに回転させる。つまり、再び機械の方を向いた。

「これはかつて天より下り、地にて堕ち果てし者——ネフィリムと呼ばれる者達が遺した、技術の一つなのです」

ネフィリム——。その言葉を人の口から聞いたのは久しぶりだった。それは、万密院が必死になって探すものを生み出した者達の名前。

遙か昔、人間は自分達の監視者である天使「グリゴリ」をかどわかし、彼らの知恵を得ることに成功した。その結果生まれた、「ネフィリム」と呼ばれる巨人達。人間が天の智謀と、技術を得た証とも言えるものども。

神の怒りを買って炎に焼かれた、忌まわしい血の一族——。

「ネフィリムだと……」

俺はようやくそれだけ口にする。ユノーの顎が動いて相槌を打った。

「ええ、ご存知のようですね。あなたも、そして、後ろにいらつしやる御仁も」

ちらつと一瞬だけ視線をカタロスに寄越して、ユノーは再び前を見た。

「ここは神火に焼かれた亡骸の残る場所。因業の眠る地。さしずめ我々は、その熾火に惹かれてやって来た、誘蛾灯の周りを飛ぶ羽虫……。恐らくこの機械は、ある人物の身の潔白の証明や、その逆の為に使われたものなのでしょう。こうやって当人の過去を白日の下

にさらし、疑いを晴らしたり逆に罪を認めたり……。知恵と富と武力を持つようになったネフィリムにとってなくてはならない、必要に駆られて生み出された機械なのでしょうね」

「……………」

「どうやらユノーは、最初からこの機械が何なのかを知っていたらしい。ユノーがずいといと歩み寄って、俺の顔を覗き込む。俺のまん前に、ユノーの黒い瞳があった。」

「命令がありましてね。この五日間、あなた達の様子から、上層部はあなた達の社会性に問題は無いと判断した。そして、その次のステップとして、あなた達の経歴を調べろという命が僕に下りました。しかし、口ではなんとでも言える。だからこの機械に触れてもらったんです。ここではね、この島に来た人間に対して、必ず一度は『これ』をさせるといふ決まりがあるんです」

ユノーは、「理由はお分かりでしょう」と言い置いて続ける。

「ここにあるネフィリムの遺物……。我々が『ヘリテージ』と呼ぶこれらを、狙う者がいるのです。それらが盗まれぬよう、悪用されぬよう、『私』は監視している」

鴉の羽のような色をしたユノーの瞳に、捕らえられた小鳥のような俺の姿が小さく映る。

「私は治者であり、監視者です。時に断罪をも厭わない」

スット、首筋に冷たいものを感じた。

それは何か……。瞳を下ろして確かめるまでも無い。それは、ナイフだった。

「しかしあなた方は賢明でした。我々の目論見に気づいていたのか、実に大人しかった。今この事実を知ってなお妙な気を起こさなければ、街は、『私』は、あなた達を歓迎する」

ナイフを首にあてがわれて睫毛一つ揺らさない俺を見て、ユノーはにやりと笑った。

「そう、いかなる時もそのように——冷静でいてくだされば問題ありません。そしてそこに、ほんの少しの良心があれば」

俺はユノーが下ろした腕の先にあるナイフに、視線をやった。そこに映っているのは、見慣れたユノーのうすら笑いだった。ユノーの黒い瞳に、光が差す。

「さて……。カタロスさんにもこの機械……『プロジェクタ』に触っていただきましようか？ここまで説明したのですからね。あなたに拒否権が無いことはお分かりでしょう」

カタロスの記憶……。カタロスの過去……。一万年の刑期……。それが、分かるのだろうか？

この機械によって……。

俺の沈黙とは裏腹に、カタロスの動きは迅速だった。俺がためらうよりも早く、奴は前足を一歩踏み出す。カタロスは何も言わずに機械の前に立った。そのまま、長い腕を伸ばす。

「……………」

カタロスの指先に機械から漏れる光が触れた瞬間。

瞬くより早く、周囲が白い閃光に包まれた。

第二章 二十六話

カタロスが手を触れてから一瞬、閃光は瞬くような速さで部屋の中を走り去った。

去って行ってしまった。

何も起こらない。

「……………」

俺は細めていた瞳にかぶさっている瞼を上げる。カタロスの指先は、プロジェクタに触れたままだ。瞼の裏に焼きついた閃光に、目が眩む。

「おい……………」

俺がそう言うのとほぼ同時、カタロスの隣に居たユノーが笑った。

「これは、これは……………」

失礼と言って、ユノーはカタロスの手の甲に触る。

「……………」

手の平を返し、ためつすがめつ眺めて、飽きたようにユノーは（しかし丁寧に）、カタロスの手から指を離した。

「なるほどね……………」

言葉とは裏腹に、ユノーは「信じられない」という表情をしている。奴は眉をひそめていたが、自分を見ているカタロスの視線に気づいて、にこりと笑った。明らかに業務用の笑顔だ。まあ、業務用のものしか見たことがないが。

「ごく稀にですが、いらっしゃるんですよ…………」。正直、私にもプロジェクタの詳細な原理は分からないのですが、多くの人がプロジェクタに『干渉される』ことはできても、その逆、プロジェクタに『干渉する』ことはできません。電波とラジオの関係に置き換えてもらってもいい。我々は、アンテナは持っている。けれど、プロジェクタが送られてくるものを受信して、それを映し出すことしかできないのです。簡単に言えば、プロジェクタとはそういう仕組みなの

です。ですが、稀に、電波を通さなかったり、意図的に遮断したりすることのできる人間がいます。体質だったり、生まれつきや訓練で身に着けた能力だったり……」

ユノーは俺を振り返る。プロジェクタに触れた瞬間、俺は強い光に視界を遮られた。けれど、それだけだ。何かが自分の中に入ってくるような感覚なんか、全く無かった。

「カタロスは興味深い素質をお持ちのようですね」

ユノーは身を翻した。そのまま奴が例のエレベータの前へ向かうので、慌てて俺達もその足音を追いかける。俺達はユノーに続いてエレベータの中に乗り込んだ。

「……さて、街に戻りましょうか」

階数の書かれたボタンを押したユノーがそう言い終わるのと同時に、エレベータの扉がゆっくりと閉まった。

遮る物の無い平原の上を横切る。並んだ俺とカタロスの前を、ユノーが歩く。その間、ユノーは何も言わなかった。

「ユノーさん、どうしちゃったんでしょう？」

カタロスが口元を俺の耳に寄せた。

「さあな……」

ユノーは実にあっさりと塔から出た。カタロスの過去を調べられなかったというのに、それを全く追求しないまま、街に引き返そうとしている。約半時間ぶりの沈黙をユノーが破ったのは、街の入り口に設えられた門の下をくぐった時だった。

「あなた方は家に戻っていてください」

たったその一言を残して、ユノーは俺達を置き去りにどこかへ消えた。

「……とりあえず家に戻るか」

「……ええ」

俺とカタロスは商業区である七番街を抜けて、八番街を目指す。規模が俺のいた場所よりも小さいだけで、本当にここは、ロッキイ

ツトは、一つの「街」だった。

流通があつて、それを生み出す為の人間が居て、それを守る為の統治がある。追いかけてこをする小さな子どもが俺の横を通りすぎる。ここに居ついた者同士の間で生まれた子どもだろうか。

路傍の店に立つ店主は若い。彼とやり取りをしている主婦は、もう五十前後だろう。彼女は、あるいは彼女の祖先達は、一体何を思つて、この誰にも見放された場所に來たのだろう。

「『老後』つて、こんな感じなんですかね」

ふと、カタロスが呟いた。俺は顔を上げる。

「ここつて、完全に自給自足ですよ。見た目は街だけど、この中身は『村』に近い。外に出ることはできないし、刺激的な娯楽も無い。けれど、みんな、『安心』して生活している」

「……確かに、俺の住んでた場所とは大違いだな」

売春宿、麻薬、ギャンブル……。ソドムにあつた闇と、そこに沸いているうじ虫ども。俺もその中にいる同じ穴の貉だ。どんな理由をつけられて——理由なんかなくても——いつ命を奪われるかわからない世界。もっとも、それが楽しかったかと言えば、それは別の話だ。

「……年を取つたら、人里離れた静かな場所で隠居生活をしたいて言う人達の気持ち、ちよつとだけ、僕には分かります」

とは言え、カタロスも、今までそれに似たような生活をしていた。地獄と呼ばれる場所の最下層で。たった一人で。

「年を取つたら静かな場所で」とカタロスは言う。年を取つたカタロスは、人里離れた静かな場所で、また、一人きりになるのだろうか？

ついでに三日分の食料を買い込んで、俺とカタロスはユノーの家に戻った。ユノーが戻ってきたのは俺が芋を湯がいていた時だった。「お二人とも、ちよつとよろしいですか？」

包丁を持ったカタロスは背後を振り返る。そこにコートを着たまま突っ立っているユノーが、火を消すよう俺に言った。

「お二人にお出でいただきたい場所があります。それも今すぐ。可及的速やかに」

俺とカタロスはどちらともなく顔を見合わせる。追い立てるようなユノーの声が、その間に割って入った。

「今夜は冷えます。外出の準備は念入りに」

ロックウィットの夜は早い。夕食の準備時にもなれば、外を歩くのは他の番街地から来た仕事帰りの男達ばかりだ。

「これからあなた達を、『老師』のいらっしゃる場所へご案内します」

俺達の三步先を歩きながらユノーが言う。

「老師？」

鸚鵡返しに訊ねる俺の声にユノーが答えた。

「老師は、このロックウィットの支配をされているお方です」

ユノーの言葉にひっきりかきを感じる俺の隣でカタロスが返す。それはまさしく、俺が疑問を感じる部分を、ユノーのセリフから切り取ったものだった。

「支配……？」

ロックウィットには議会がある。民主主義と言われる議会制度だ。首相と呼ばれる統治者と議員がこの街に存在している。

「首相はあくまで、老師の代理に過ぎません。首相は老師の言葉に従い、議会を動かしています。老師は多忙の身ゆえ、執政を他の者に託しているのです」

「で、これからその『老師』様の所に行くってわけか」

言って俺は立ち止まった。そして訊ねる。

「……どうやって？」

俺とカタロスは、揃って目の前にある物を見下ろした。刃、だった。表面に錆びの浮いた折れた剣の刃先が、足元に落ちている。

すっかり日も姿を隠した暗闇の中——俺達は、コロシアムの中央に居た。

「以前お話した通り、この街はいくつかの区画に分かれています。一番街に司法、二番街に行政、三番街に立法をそれぞれ司る機関、五番街は学術研究区。六番街は工業区、七番街は商業区で、八番街と九番街が居住区になっています。そして、街の中で一番小さいこの四番街が——コロシウム」

コロシウムは、昔この島に居たという王が建てたものらしい。王が奴隷同士、奴隷や虎などを対戦させて楽しんだのも今は昔、現在殆ど使われることがない施設だ。殆ど……。

俺はそつと、足元にある剣を拾い上げた。錆びに変わった血のついている刃。王がいた時代に遡れるほど古いものではない。

「さ、行きましょうか」

ぬけぬけと言い、ユノーは施設の奥に見える選手入場口へ向かった。ユノーの白い人指し指と親指の間に、小さな鍵が納まっている。それが尋常なものでないことは、鍵が僅かに——けれどずつと——発光していることから分かる。ユノーの足が、「選手登録所」の前で立ち止まった。

「ここは四番街。かつて、この街の娯楽の象徴であった血の匂いが眠る場所」

登録所の奥にある扉の鍵穴に、ユノーの持つ鍵の足がピタリと嵌った。

「そしてその下に、老師のおわす零番街がある」

言われ無き血を流した者の涙が染み込む大地の下に。

そう続けてユノーが言う頃には、目の前の扉が——誰も取っ手を引いていないのに——開いていた。俺達は扉の奥に待っていた通路の上を進む。

「何だつて老師つて奴は、こんな場所に住んでるんだ？」

正確には、こんな場所の奥にだが。

「何でも、この奥にある場所が一番『濃い』のだそうで」

「？」

「理由はもう一つあります。他の街は、敵襲に遭った時に崩壊させ

られる可能性がある。特に行政区、研究区、商業区……。これらは完膚なきまでに破壊されるか、占領されるかする可能性が高い。しかし、かつてコロシウムだったタダの廃墟に、敵軍がわざわざ攻め入るような理由はない」

自分達の足音が反響を繰り返す細い通路の中を歩いていると、頭がおかしくなりそうだった。明かりもユノーが手に持った松明だけ。俺はいつか、エルガストウルムへ侵入した時のことを思い出す。あの時は、底の見えない階下をライターの光を頼りに降りていった。いつまでも、目的地に辿り着けないような気がしたまま……。

ユノーが立ち止まった先に扉があった。鉄製だった。ユノーが取っ手に手をかけると、石畳を擦るような音が悲痛そうにギィギィと、声を立てる。

「失礼します——」

そう挨拶するユノーの後ろに、俺とカタロスが続いた。

この地を支配していた王の血は、既に絶えたという。本当にそうだろうか——？

俺は、思わず目の前の光景に目を奪われた。黄金の飾りがついたシャンデリア。部屋中の床を覆いつくす、真っ赤なビロード。表面に宝石がちりばめられたワイングラス。部屋の広さは、十五メートル四方と言ったところだ。

入り口から更に十分歩いて、ようやくこの、「老師」の部屋に辿り着いた。

宝石が浮いたワイングラスを絡め取っている指——その上にある顔を、俺は見上げた。玉座に座る「老師」は物見高いその場所から、俺達を見つめる。

「ご苦労じゃった。なるほど、初めて見る顔じゃ」

「老師」は俺達を見つめている。俺達を見つめて、笑っている。ユノーから聞いていた。その人物は、「老師」と呼ばれているのだと。「老師」はハリのある白い肌の上に、真っ赤な礼装を着込んでいる。

ツヤのある黒髪と同じ色をした瞳。

どう見ても二十代か三十代前半……。百人が百人、美しいと認める美貌。その美貌は、口元に浮かべた笑みによって更に引き立つ。自信ありげに輝く瞳とつり上がった眉が不思議と「老師」の威厳を感じさせた。

老師は、彼女は——紅を引いた唇を、優雅に動かす。

「ようこそわしの、秘密の部屋へ」

まるで空き家に作った隠れ家をこっそり友人に見せる子どものような顔をして——監獄の街を支配する、絶世の美女が笑った。

第二章 二十七話

ユノーは壇上上がり、玉座に座る老師にそつと近づく。奴は膝を折つて床につき、老師の手をとつてその甲に唇を近づけた。

実に自然な動作だった。慣れているというより反射的に、義務ではなく自分の意思で自らと言った感じた。

「さて……。そこな柱のようにでかい男がカタロスか」

老師は肘掛に肘を乗せて頬杖をついて訊ねた。彼女はにやり、と笑つてこちらを見つめている。支配者のポーズだ。

女王……。射抜いて相手を放さないような老師の視線を見ていてふとそんな言葉が頭をよぎった。

まあ、嫌いなタイプではない。「少なくとも、おどおどされるよりはマシ」というレベルでだが。

「既にユノーから聞き及んでいようが、稀におるのじゃ。そなたのようなものがな」

まだ年若く見える女王の口から出る老いた口調。不思議と似合っていた。こういう喋り方に必要なのは年齢ではなく、威厳なのかも知れない。長く生え揃った睫の下にある瞳だけでそう納得させる、女王の瞳が揺らいた。

「この地に生まれついた者は、もうこの街にはおらぬ。ここは一度、見捨てられた土地。みな他所からの流れ者じゃ。一人でここへ来る者、身を寄り添つて来る男女、そして、たまにおぬし達のように、捨てられてこの島に来る者もある」

そう。俺達は氣を失つて、氣がついたらこの街の門の前に野ざらしにされていた。

「氣に障る言い方をしてしまったかの。すまない。決して悪意は無いのだ。つまり、不本意ながらここへ来る者もあるということじゃよ」

俺は八番街の町並みを思い出す。そこに暮らす人々。全員が同じ

街の中に住む赤の他人だ。

「中にはこの島にあるヘリテージを狙ってくる者もある。そういう輩はさておき、わしは住民の過去に口を出さぬ。たとえお尋ね者であろうが、一国の主であろうとな。ユノーがおぬしらの記憶をプロジェクタで確認しただろうが、わしはその結果を知らぬ。ただ、おぬしらがヘリテージを狙う不届き者ではないという話だけは聞いた」

老師はまだ自分の横に突っ立て居るユノーにようやく気づき、「下がってよいぞ」と声をかけた。ユノーは一礼して、もう一度老師の目を見て…… ゆっくり壇上を降りた。引きずるような足取りで、どこか名残惜しそうだった。

「して、話は最初に戻るのだが…… カタロスよ。お主は変わった体質の持ち主のようじゃ。叶うことなら、お主に学術研究区の研究棟に立ち入る権利を与え、その体質が何であるかを知りたい」

老師の言葉に、さつとカタロスの顔が曇るのが、横目に見ても分かった。見知らぬ土地にいきなり放り出されて、また飼い犬のような生活に戻るのかと——その不安を察している。老師はカタロスの変化を見逃さなかった。

「安心してくれ。そなたをモルモットにしようというわけではない。ただ、一日三十分程度の検査を受けてくれればよいのだ。体調検査だと思ってくれ。週に一度、三時間程の検診に付き合ってもらったとはあるがの。だが、ただそれだけだ。お主の体にメスを入れることはない。安心してくれ」

老師の言葉にユノーが頷く。彼女の言葉を信用しろ、と言いたいのだろうか。

「この島の生活はヘリテージで成り立っており。そして、そのヘリテージを守る為に、このわしがいる。時々ヘリテージの奪取を企む武装勢力がこの島に着岸するが……それを追い払うのも、わしの役目だ」

そう語る老師の目つきは険しい。何度と無く、侵入者を追い払ってきた時のことを思い出しているのか。

最初、俺はこの女を女王と——支配者だと思った。

だが実際には、支配者というより「守護者」のようだ。

「この島を守るのはわしの義務だ。それを果たす為に、わしは心血を捧げよう。よって、ヘリテージの研究が進むことはわしにとつて住民にとつても喜ばしいことなのだ。しかし……先にも言ったように、望まざるながらこの地へ来る者もある。おぬし達が望むのなら……わしはおぬしらがこの島を出ることを止めはせぬ。」

俺とカタロスは、目を瞠るのを隠せず、大きく目を見開いた。

この島から出ることができるのか……？

「しかし、タダで、というわけにもいかん。ぬしらは既に、この島にあるヘリテージを知った存在。そう易々と出られるとは思うな。まあ、人によりけりだが、実に簡単にこの島を出てしまう人間もある。断念してしまう者もあるがな……」

老師の言葉の後半は、もう俺の耳に届いていなかった。俺は叫ぶように言う。

「俺はさっさとここから出たい。出る方法があるなら、早く教えてくれ！」

カタロスもそう思いこしたものの、口には出さなかったのだろう。だからこそ、はつきり言い放った俺に驚いたようだった。

「……口の利き方に気をつけてもらえますか？」

すかさずユノーが横槍を入れてくる。鋭く牽制するような口調だ。こんなに感情がこもったユノーの声を聞くのは初めてだった。俺は思わずユノーを振り返る。

「構わぬ。おぬしからすれば詮なきことよ。この島もヘリテージも、そしてわしも」

そう言つて老師は、白い歯を見せて笑った。

「さて。この島から出る方法じゃが……。方法は極めて簡単じゃ。三秒で説明できる」

その方法は、こともなげに老師の口から告げられる。

「この島を出ることを望んでいる人間を、誰か一人殺せ」

俺とカタロス、そしてユノー。三人は連れ立って老師の部屋を後にした。

俺は老師に「俺達に殺し合いをしると言うのか」と、くっつかかった。記憶の中の老師は言う。

「おぬしの『覚悟』を見せてみよ。そして、『責任』を負え。おぬしは自由を得る代わりに、一人の命を犠牲にする。お前が背負うのは、命を奪った『責任』だ」

俺は好きでこの島に来たんじゃない……。そう叫ぶ為に口を開けた瞬間、老師がピシヤリと言い放つ。

「誰も好きこのんで生まれる者はおるまい。人は環境も自分の能力も、選べないまま生まれてくるのだ。誰もが、必ずなんらかの『義務』を背負って生まれる。家柄だったりな。それは『ハンデ』と言っても良いかも知れぬ」

俺のこの炎の能力は……。どうだろう。これは義務だろうか？ 少なくとも、これが何かの「権利」だと思ったことは、一度も無い。

「権利を与えるのは、義務ではない。『責任』だ。責任が無ければ権利も無い。自分の行動に責任を持てる人間だけが権利を与えられる。生まれつき保障される権利など、無いということだ」

地上のコロシウムへと続く、錆び臭く陰気な道。俺はふと、思い出したのでユノーに訊ねてみた。

「そういえば、ここが一番『濃い』って言ってたな。あれ、どういう意味なんだ？」

老師に会うほんの数分前……。ユノーは確かにそう言った。この場所が一番「濃い」から、老師はあの場所にいるのだと。

「老師は特異体質でしてね。この島から吹き出ている……。らしい、特殊な気体を常に吸い続けていないと体が弱るそうです。それを長

時間吸わないでいると、死に至るとか。聞いたことがあります、彼女の口から直接。『わしはこの島と共にしか生きられぬ』、と」「カタロスが呟く。

「老師がこの島を守るのは、それが彼女の義務だからでしょうか？」

老師は言った。「権利」を与えるのは「責任」だと。

義務を果たした彼女が得られるものは、何なんなのだろう。

俺は老師の言葉を思い出す。

「この島を出ることを望んでいる人間を、誰か一人殺せ」

俺は並んで歩くカタロスを横目に見る。

そう、方法は、極めて簡単だった。

ただ、簡単には出られない。

第二章 二十八話

老師は言った。

「まずは三日後――。島を出たいと思っっている人間を連れて、わしの前に再び来るがよい。そして、二人揃ってわしの前で誓うのだ。これから島からの脱出をかけて、殺し合うと。その時が、ゲーム開始の合図となる」

ユノーが言う。

「少し前まではね、三日後なんて猶予は無かったんですよ。でもいつだったか……あなた達と同じようにこの島に流れ着いた者がありませんでした。二人とも、この島を出たがったんです。二人の男を見て、老師は言いました。この島を出たいか？と。二人は何のためらいも無く頷いて、そして老師は――」

この島を出ることを望んでいる人間を、誰か一人殺せ。

「老師がそう言った瞬間です。片方の男が倒れた。打ち込まれた銃弾の痛み悶える暇も無く即死……。生き残った方の男は、老師にゲームのルールを伝えられた瞬間、相方の男を撃ち殺したんです。『この島を出たいか』と訊かれて頷いた時と同じように、何のためらいもなく」

老師は言った。人によりけりだが、実に簡単にこの島を出てしまふ者もいると。

「それからなんです。三日という猶予ができたのは。必ず、お互いに『ゲームに参加する』という覚悟がある者同士でゲームをさせる……。そうさせる為に、老師が考えなされた措置なんです」

「……………」

「さて、地上に出ましたね」

ユノーの後ろを歩いて、賓客を失っただだっ広いコロシウムを眺め回す。ふと、ここに来た時に見つけた、刃こぼれのある剣先が目の前を転がっていることに気づく。

「ゲームの開催が決まった後、どこで参加者達が争うと思いますか？大概、ここなんですよ」

ゲームのルールには「無関係な一般市民を巻き込まないこと」ともある。そうなると自然、ここが決闘の場所になるのだそうだ。聳える石壁、障害物が無く見通しのよい空間……。たしかに、うつてつけの場所だろう。俺は足元にある剣先を拾う。埃と錆びた血に塗れていても……つい最近折れたものなのだと分かる。

「結構いるんですよ。この島に漂着してくる人間がね。月に一度くらいでしょうか。大概、捨てられてきた人間のような感じです。島流しという奴でしょうか。あるいは流刑……。望まずにこの島へ来る者がありますから、どうしても、『ゲーム』のようなシステムが必要になるんです」

島流し、あるいは流刑……。俺達をここに放り込んだ奴は、何をしたかったんだろう？

口封じをしたいのなら、殺せばいい。俺達をこんな所に連れて来る暇があつたんだ。それくらい訳も無かつただろう。

俺達をどこかに閉じ込めておくのが目的なんだろうか。けれど、ここには「ゲーム」がある。俺達がずっとここにいるという保障は無い。もっともゲームに勝った所で、渦潮とも例えられる海流に囲まれたこの島から大陸に辿り着けるかどうかは、別の話だ。

何より、閉じ込めておく理由が分からない。

俺達を殺さずに閉じ込めたのは、俺達両方、あるいはどちらかを、生かしておく必要があつたからじゃないのか？

「僕達をここに放り込んだ人は、何が目的だったんでしょう？」

カタロスも同じことを考えていたようだ。

「少なくともその人に、今すぐ僕達を殺す気は無かつた。けれど、ゲームのおかげでどちらか死ぬかも知れないし、もしかすると、両方とも他の参加者と争って、死ぬかも知れません」

そう、その通りだ。俺達のどちらかでも生かしておきたいのになんな所に放り込むなんて、矛盾している。

「何より、俺達を閉じ込めた奴らが、全く俺達に接触してこないことが一番謎だ」

閉じ込めておいて放置している理由……、上手くそれを説明できる理屈が、思い浮かばない。一体、そいつは何がしたいんだ？

どんな目的があるにせよ、俺達に「干渉」できなきゃ、意味が無いんじゃないか？

「もし、俺達を閉じ込めた奴に俺達を生かしておかなきゃいけない理由があったにしろ、その後音沙汰無いつてのはどういうことなんだ？もし仮にだ。そいつが俺の持っている炎の力を知っていて、それを欲しがつてるとするだろ。だからそいつは、俺を殺すことができなかった。でも……それでここに連れてきて、何になるんだ？しかも、一向に俺達の前に出てこない。これじゃ、殺したのと何も変わらない。むしろ殺した方が、俺達が他の人間の手に渡る心配もなくなつて、やっぱり殺した方がいいっていう結論になる」

少なくとも、万密院の息がかかった教会を出入りできるほどの人間だ。人一人殺したところで、いくらでも隠蔽ができるだろう。

ただ閉じ込めるだけ。しかも、自分の手の届かない場所に。

何故、そんなことをする必要があるんだろう？

俺はカタロスの横顔に視線を超越す。時々忘れそうになるが、刑期一万年の男だ。それほどの罪を犯して、それでも生かされている。何故だろう……。

「僕達をここに連れてきて人……本当はここに来るつもりだったのかも知れませんか。でも、何かの理由で、それができなくなった」

「……………」
勿論、答えは出なかった。誰が何の為に、俺達をこの島へ置き去りにしたのか。ふと、オールド・ワンの顔が思い浮かぶ。それと同じに、あいつの言葉も。

「だってさ、見てるだけじゃなくて、実際にお話した方が色んなことが分かるだろう？」

あいつの顔を思い出す時、大抵あいつは笑顔を浮かべていた。そ

してこれも、あいつの言葉だ。

「でもね、『見る』ってことも大事なんだよ。変化を加えた時、そこで何が起るのか……。観察すること、大事なことのさ」

あいつの顔が思い出される。新しいおもちゃを与えられた子どものように、自分より力の弱い生き物を自分の好きにする子どものように、

にやりと笑う、奴の笑顔が。

ユノーの家に戻った俺とカタロスはどうしたのか？

いたって、いつも通りだった。夕食を食べて、明日の昼食の仕込みをして床につく。そしてユノーが眠ったのを確認してから、俺とカタロスは、隣り合ったベッドの上で、天井を見つめた。

「……どう思う？」

俺から先に、口をきいた。カタロスが振り返る。

「……………」

カタロスは何も言わない。ただ俺を見つめるだけだった。

あまりにまっすぐ見つめてくるその視線から、逃げたくなる。俺は視線を泳がせて、他所を見た。

「ここから出るには、どうしても生贄が必要らしいな」

もつとも、外に出してくれるだけ有難いのかも知れない。ヘリテージの存在を外に知られるのは老師やこの島の住人にとってまずいはずだ。この島の生活はヘリテージで成り立っているのだから。

万密院が躍起になって探すネフィリムの遺産。それがあると知れたら、どうなることか。エペにいた俺だから分かる。ネフィリムの遺産を回収し、研究して技を発展させる。連中の目的はたった一つだ。けれど、手段を選ばない。

「……あなたは、この島から出たいと思いますか？」

ようやくカタロスが口を割った。

どう答えよう……。

ここでの答えが、この先の運命を決めるような気がする。

「……ふん」

運命という無責任な言葉が自分の頭を掠めたことに気づいて、俺は噴き出しそうになる。

運命。それは既に用意されている、決まった道を辿る為の轍。

確かにそうだろう。生まれつく地、生まれ持った能力、自分を産んだ親。それは自分では選べないし、変えることもできない。そして、生きている限り、自分ではどうすることもできない状況だって起きるのだ。

たとえば今のような、元の生活に戻る為だけに他人を殺さなければならぬ状況とか。

「ああ、ここから出たい。でも、お前を殺してもいいものかどうか迷う」

現実的な話をすれば……俺はこいつを保護しなければいけない。

依頼者であるオールド・ワンからそう頼まれているからだ。カタロスに手を出してしまえば契約は打ち切り、むしろ、慰謝料を取られる可能性だってある。場合によっては命を差し出すことも、この世界では珍しくない。もっとも、オールド・ワン相手じゃそれも無いだろうが。俺が死ねば、奴の言う「見る」ができなくなるからだ。

「……まるで、絶対に僕を殺せるみたいな言い方ですね」

俺の口から当然のように出た言葉を聞いて、カタロスは笑う。笑っている。

思わず俺は、ぞっとした。

自分を殺そうとしている人間が、今、隣にいる。そして、いつでも殺される状態にある。そう知っていて、お前は笑うのか。

俺は思い出す。一年半前の、いつかの夜を。

俺に頭を触れられても——ルーチェは大人しくしていた。あの時ルーチェは。その時、俺は——。

「ねえ、もしも、なんですけど……」

カタロスが口を開く。聞きたくない、と、反射的に思う。けれど俺は、そのまま、カタロスの言葉を聞いてしまった。

カタロスが言う。

「殺しても、構わないんですよ」
僕のことを。

第二章 二十九話

三日後、俺とカタロスは再び老師へ会いに行った。そして誓う。二人で肩を並べて、とてもこれから殺し合う人間同士とは思えないほど、穏やかに宣言する。

「俺は、ゲームに参加する」

「僕は、ゲームに参加します」

連れ立って現れた俺達を見ても、老師に驚いた様子は無く、しれっとしていた。ただ一言だけ、「そうか」と言う。予期していたようでもあるし、意外でもあったような、どうともとれる言葉だ。

ユノーが老師の隣に立ち、俺達にルールを説明する。しかし何を言われても、俺は上の空だった。ユノーの流暢な言葉は、完全に俺の頭上の遥か上を流れていく。俺はじっと、横目にカタロスを見る。カタロスも同じようだった。

「では、健闘を祈ります。あなた達の願いが、叶わんことを」

お定まりらしい文句を言って、ようやくユノーが静かになる。

俺達は老師の部屋を後にした。最初に喋ったきり、老師は何も言わなかった。ただじっと、俺のことを見ていた。その視線から逃げるような足取りで、俺は部屋の外に出る。オールド・ワンのものは違う、問いかけるような瞳……。隠し立てが一切通じないようなあの瞳が、少し苦手だ。

「期限は、一週間ですからね」

俺達の前を歩くユノーが言った。俺達が話を聞いていなかったことに気づいていたかのように、少し呆れた感じの物言이었다。

「老師の前に立って参加表明をする時……大体は相手に寝首をかかれないう殺気だっているか、怯えているかのどちらかなんですけどね。あなた達みたいに、揃いも揃って葬式中のような顔をして黙っているのは、珍しいですよ」

ユノーはそう言って黙ってしまった。長い長い地下道を、俺達は

ひたすら黙り込んだまま進んだ。

そして、夜になった。ユノーは件の別室で、俺とカタロスは相変わらずベッドを並べて横になっている。周囲はとても静かだった。自分の呼吸をする音が何か別の、暗闇に潜む不気味な生き物の息遣いに聞こえる。そして、淡々とカタロスが口を割った。

「僕はずっとエルガストウルムの中で暮らしていました。何故だと思えます？ 刑期一万年の大悪人なら、殺してしまえと思いませんか？ 刑期が一万年もあつたら、社会に復帰して罪を償うこともできない。そんな人間をどうして生かしておくのかと、思いませんか」

カタロスは俺を見て笑った。

「答えは簡単です。死ねないからですよ。僕には、死ぬことだって許されない。死んでしまえば人生が終わる。けど、同時に苦しみも終わる。僕には、それさえ許されないんです。償う機会も救済も無い人生なんです」

それが、カタロスを裁いた人間が出した答えなのだろうか。それが、刑期一万年の男に、最も相応しい罰……。

「あなたに牢から連れ出してもらった時、僕は嬉しかった。ずっとこのまま、あの牢の中で暮らしていくと思っていましたから」

地獄の最下層にある闇に訪れた光。それが暗殺なんかやっている、俺のような薄汚い人間だなんて皮肉なものだ。

「でも、いいんです」

カタロスはもう一度笑った。まるで困ったように、優しく。

「本来なら持ち得なかった自由です。少なくとも、僕自身の力で掴んだ自由じゃない。あなたに与えられた自由です。だからそれを奪うのもあなたなら、僕に後悔は無い」

俺は口を開けた。しかし、カタロスが呟く方が、一瞬早かった。

「これ以上、僕のせいで誰かが苦しむのは、ごめんです」

俺を見つめるカタロスの瞳が細くなった。

「僕は……あなたが思っているより、ひどい男なんです。これまでにだけじゃない。今も僕のせいで苦しんでいる人がいるんです」

それ以上カタロスは何か言おうとして、やめた。

俺が奴の目の前に、手の平をつきつけてやったからだ。

俺はこいつが何をしてきたのかわかんない。知らない。そしてこいつがいることで、今どんな奴が、どういう目に遭っているのかということも。

「……………」

カタロスは知っているはずだ。以前話した、俺の炎の手の力を。知っていて、目を閉じたのだろう。

カタロスの額に、俺は指の腹を押し付けた。

翌日、俺は「老師」の部屋に向かった。

「……………」

老師は黙っている。ユノーが老師の前に立ち、例の恭しげな挨拶をした。その間も、老師は俺を見つめて、じっとしていた。

「次にこの部屋に来るのは結果を出した時、だったな」

老師は黙っている。だから、俺から言うことにした。

「これが俺の出した結論……ゲームに参加した『結果』だ。それを、あんたの前に持ってきてやったぜ」

俺は右手を顔の前に差し出す。その手の平の中に、一本のナイフが納まっていた。無駄のない造形美で、刃に映りこんだ老師の顔を照り返す。

そして

ガッ。

鈍い音を一瞬だけ立てて——俺の手の中にあつたナイフが、床に突き刺さった。俺のほんの五十センチ前で、刀身を震わせながら床に刺さっている。

「……………」

ユノーはそのナイフが、自分達に向かって投げられると思ってい

たのだろう。奴は身構え、反面老師は、涼しげな顔をしている。

「要するに、くそつたれってことだよ」

俺がそう言う——俺の背後で大人しくしていたカタロスが、一歩前に出た。

「今、俺はお前らを殺そうと思えば殺せた。でも、俺はそうしなかった。まあ、俺がそのままナイフをお前らに投げたら、俺も死んでたかもしれないけどな」

チラッと、俺は部屋中に視線を走らせる。壁の向こう側……壁に開いた僅かな穴から漏れてくる視線。天井から感じる、微かな息遣い。老師を護衛する衛兵達の存在を感じることができた。

「俺は、殺そうと思えば、いつだってお前らを殺せた。カタロスだってそうだ。俺がその気になれば、いつだってこいつを殺せる」

それでも奴は、この俺と決闘することを選んだ。

そして俺が本気だと知っていて、俺に殺されることを選んだ。

「馬鹿げてるな、こんな遊びは。楽しいか？人殺しをさせて、それを見ることが。そんなものが娯楽になるなんて、よっぽど老師って仕事は退屈なんだろうな」

「貴様……！」

俺の言葉に耐えかねて、ユノーがコートの懷に手を入れる。

「……待て」

それを諫めたのは老師だった。老師はさっきからずっと、俺の方を見つめている。その質すような視線にあっても、俺は話を続けた。「俺はカタロスを殺さない。きつとそんなことをしてまでここを出たいって奴はさ、外に出ても、同じことをするんだろうよ。違うか？老師。あんたは、そんな人間をこの島から出していいのか？」

この島にいられても困るだろうけどな。そう言って笑う俺に、

老師も、笑って答えた。

「恐れ入ったな」

老師は頬杖を崩して、椅子に座り直した。

「過去に何度か、お前達のようにゲームを破棄した者がいる。その

主張は概ね、今お前が言った通りだ。だが、このわしを、一瞬でも本気で殺そうとした者は、おらんかったがな」

老師の言葉を聞いて、俺はもう一度口の端を上げる。老師は全て、お見通しだったと言うことか。

俺が一瞬でも、本気で老師を殺そうとしてナイフを握ったこと。

老師が抵抗しなければ、俺は老師にナイフを投げないと決めていたこと……。

全部、見通されていたような気がした。

「よろしい。おぬし達に、この島を出る許可をやるう」

そして……実にあっさりと、老師が言った。

「え……」

カタロスがポロつと呟くと、老師がくすくすと笑う。

「おぬしらはそれを望んでいたのだろう？そして、それを実現する為に、今のような行動に出た。違うか？一体、何を驚く必要がある」

カタロスは完全に固まっている。俺は平静を装っていたが、表情が固まったまま動かなかった。

まさかこうも、あっさり上手くとは思わなかったからだ。

ユノーが口を開く。

「いつかあなた達に話した、かつてこの島に来てゲームに参加した者の話。あれには、続きがあるんです」

徐に口を開いたユノーは、懷から手を引いて語った。

「一緒に流れ着いてきた者を容赦なく撃ち殺した男……。そいつは次の瞬間に、同じように、拳銃で撃ち殺されました。……この『私の手によってね』」

「理由は、今おぬしらが申した通りじゃ。そのような者は、外へ出た所でまた同じような悪さをするのに決まっておる。わしが望むのは、そのようなことではない。おぬしらのように、あえて共存の道を選ぶ者達にこそ、外に出る権利を与えたい。わしは、極限状態においてそのような選択ができる者であれば……。ヘリテージのことも口外しないと信じることができる」

老師は言っていた。なかなかこの島から出られない者もいれば、簡単にこの島を出てしまう者もいると。

「最短記録だな。ゲームに参加して、僅か三日で脱出の権利を得た者は」

老師はそう言っただ笑った。

「そして、おめでとう。おぬしらが、もうこの島に捕われることもない。このわしが作ったルールにもだ」

この島から出ることが出来る……。つまり自由……。ようやくそう実感することができて、俺は前にいるカタロスの背中に視線を移す。それと、殆ど同時だった。

「やつ……」

息を呑んだような、小さな声がした。

「？」

「やりましたね！」

言うやいなや、カタロスは振り返って俺に抱きついてきた。

「わっ！何すんだよ！離れろ……！」

俺は必死で、カタロスの胸を押しつけようとした。しかしカタロスは、俺の頭を両腕で抱えて叫び続ける。

「僕達、帰れるんですよね！二人で一緒に！」

二人で一緒に……。

そうか、そうだな……。

気が緩んだ俺とはしゃぐカタロスに対して、ユノーが呆れたように言った。

「それにしても、どうして『二人で一緒に島を出る』っていう結論を出したんですか？前にここを出た時は、とてもあなた達がそんなことを考えるようには見えませんでしたけどね。一体、今日ここへ来るまでの間に何があったんです？」

「……………」

俺は、逃げている。逃げ続けている。ルーチェのことから、今もずっと。

そして昨日の夜、カタロスから殺してもいいと言われた時……俺は思った。

また俺は、逃げるのだろうか。

ルーチェのことから、カタロスのことから。ここでカタロスを殺して島を出て、そして俺は、カタロスのことを忘れようとするのだろうか。

カタロスの両腕に頭をうずめたまま、俺は思い出す。昨日の夜のことを。

「僕は……あなたが思っているより、ひどい男なんです。これま
でだけじゃない。今も僕のせいで苦しんでいる人がいるんです」

それは、お前も同じだろ。

お前が死んでも、自分が過去にしたことを無かったことになんか
できないぜ。

それは、俺もお前も同じだから。

逃げたり死んだりしたら終わらせてくれるほど、世の中、甘くないんだよ。

ユノーがもう一度、俺に言う。

「一体どうして、二人で島を出ようという気になったんですか？」

俺はようやく腕を放したカタロスを押しのけて、ユノーの顔を見ながら言った。

「理由を考えなきゃいけないほど、めんどくさいことじゃねえだろ。
別に」

第二章 三十話

俺とカタロスは短く支度を済ませて、ユノーの家を出た。ちょうど大陸へ買い物に行った船がこの島に戻ってくるというので、その船に乗って、近くの大陸まで送ってもらうことになった。

俺の横には鞆を背負ったカタロスがいる。何でも、顔見知りになった主婦達から果物や民芸品を押し付けられたとかで、ついでに鞆ももらって、全部ありがたく頂戴したらしい。

カタロスは主婦からもらったネックレスのトップを、日の光にかざしている。青く、透き通った石だった。トップは日の光を透過して、カタロスが歩くのに合わせて輝いている。

俺の視線に気づいたカタロスが、笑って言った。

「欲しいですか、これ」

「……いらねー」

十日。俺とカタロスがこの島に来て、十日経っていた。

この島に来た時、俺は、もう二度とここから出ることは無いと思っていた。接岸した船に乗り、こうして甲板の上に立っているのが、夢のようだった。

いや、逆なのだろう。この島で過ごした十日間が、夢のような、嘘のような時間だったのだ。

それなのに、この島であったことの方がリアルに感じられるのは……カタロスのせいなのだろう。ソドムに居た時のカタロスは、ただ笑って俺の横にいただけだった。

ここに来てから脱獄犯という「イメージ」の中の存在を、カタロスという「人間」として感じられるようになった。

カタロスは相変わらずネックレスを眺めている。全く、いつの間に住民達と仲良くなったのか。船員達と挨拶し始めたカタロスを置いて、俺は船の縁に腕をかけて、その上に顎を載せて、ぼんやりと海の方を眺めた。

この先に大陸があるはずだ……。そして俺は、ソドムの埃っぽい土を、再び踏む。

「……………」

やはりその先に、奴がいるのだろうか。

ルーチェ・イスタンテ・エスペリオ。

今もこの海を渡った先で……俺が帰って来るのを、待っているのか。

「どうしたんですか？」

俺が顎を浮かせて振り向くと、すぐ傍にユノーが立っていた。相変わらず奴は、音も無く近づいてくる。

「……結局、俺達をこの島に連れてきた連中のこと、何も分からなかったな」

俺は、今考えていたことは全く違う話をした。とはいえ、ずっと気になっていたことでもある。

「そうですね……。この付近の海流に詳しい人間でなければ船で近づくことはできませんし、空路となると、飛行船が必要になります。飛行船を所持できる人間となると、大分限定的になりますね」

ユノーの言う通り、どうやってこの島に俺達を運んできたのかということも気にはなる。しかし、俺が一番気になっていたのは連中の「目的」だった。

「……ここはあなたも知る通り、ある種の牢獄です。何かを匿うのに最適の土地。外に出ようと思ったら、誰かを殺さなければいけない」

そう、ここは人を閉じ込めておく場所としては——少なくとも、「後から回収する」ことを考えれば、むしろ都合が悪い場所なのだ。連中がこの島の住人で無い限り、不確定な要素が多すぎて、回収ができなくなる可能性がある。

「だから私は思っんです。きっとここにあなた達を押し込めた人間は、あなた達を閉じ込めることが目的ではなかったのだと」

「どういうことだ？」

「いずれあなた達を回収することを前提で、この島に運んで来たの
でしょう。では、何故この島を擬似的な監禁場所に選んだのか……。
それはきつと、この島の『ルール』に目をつけたからではないかと
思います」

「つまり、『ゲーム』のことか？」

「ええ。そこにどんな利点を見つけたのか、僕には分かりませんけ
どね」

「……………」

「さて、思えばわずか十日の付き合いでしたが、いざ去られるとな
ると、あの家の広さを思い知ることになりましたね」

そう言つて、ユノーは左手を差し出してきた。

「……別れの挨拶つてわけか」

左手での握手は別れの挨拶を意味する。ユノーの、口ぶりとは逆
の仕打ちに堪えつつ、俺も左手を差し出した。

「願わくば、二度といらつしやってほしくないものです。この、誰
にも見捨てられた場所にね」

「……………」

「ここに来るのは、本当に、人生の袋小路に突き当たった時だけで
すよ」

「……この島の住人は、他人の経歴に興味を持たないんだっけな」

「ええ、それが掟ですから」

ユノーがいつになく——打算的でない——包み込むような、微笑み
を見せた。

「誰しも清算できない、取り返しのつかない過去を持っているもの
です。この島の者も、あなたも、そして、きつと彼も」

ユノーは船尾で船員と話をしているカタロスを見ながら言った。

「そして、この僕もね」

「……そう言えばさ、いいのか？お前達、カタロスの検査をしたい
つて言つてたじゃないか」

「構いませんよ。この島を離れたいとおっしゃっているのに、無理

にお引止めできませんから。あなた達にはこの島を出る権利もあるわけですし」

実を言えば、俺はほんの少しだけ期待していた。この島で検査を受け続ければ、カタロスが持つ謎が一部でも解明されるのではないかと。

「ま、そうだよな……」

けれど、それもないか、と思う。

ユノーの言う通りだ。

誰しも清算できない、取り返しのつかない過去を持っている。この島の者も、俺も、そして、きっとカタロスも。

しかしそれが何なのか、お互いに知らないからと言って困ることはない。

俺が必要としているのはイメージとしての脱獄犯ではなく、今実在する、人としてのカタロスの情報なのだから。

「じゃあ……。まあ、世話になったかな」

そう言う俺に、笑ってユノーが答える。出港の時間が近づいていた。俺とカタロス、ユノーの三人は棧橋の上に立っていた。

「ええ、こちらこそ。束の間でしたが、それなりに時間の潰せるひと時を過ごさせてもらいましたよ」

俺の横に立ったカタロスが、向かい合うユノーに握手を求めた。奴は右手を差し出している。

「……………」

ユノーは黙って、カタロスの右手を受け取った。

「お世話になりました。どうかお元気で」

「幸運を」

「……じゃあな」

三者三様に挨拶をして、船が岸边を離れた。

もつ、誰に振り返られることも無い人達の住む、見放された島を離れるために。

第二章 三十一話

メレグは広い屋敷の廊下を横切り、奥まった部屋のドアを開ける。この屋敷が広く感じるのは、単に面積があるからではないだろう。

ここには人の住んでいる気配がまるでない。オールド・ワンの自室の一步外に出てしまえば、途端に、家人が越して行った後のような静けさが感じられる。

この屋敷は外から見る限り、空き家のようには見えない。よく手入れされ、壁は常に磨かれ、蔦が壁を這うことは決して無かった。

どんな建物でもそうだ。何故か人が去った後の建物というのは、すぐ朽ちていく。だから人が住んでいない空き家とそうでない建物は、外から見て区別がつくものだ。どんなに古い家でも、そこに人が住んでいれば、空き家と違うことが分かる。

「「こんにちは」」

メレグとオールド・ワンは、同時に言った。

「……………」

メレグはオールド・ワンがすることのタイミングの良さに慣れつつあった。メレグは近くにあった壁に寄りかかる。

「彼らがいなくなって、もうすぐ一週間近くになりますね」

「ああ」

「心配ではないのですか？」

「……彼らは昨日、ロッキットを出たようだ」

「！」

「ぼくの予想よりも、少し早かった。もっとかかると思ってたよ。

あの子達があんなに早く、あそこを出られるとは思わなかった」

「どうして今まで黙って見ていたんです？あそこが、どういう場所か知らないわけではないでしょうに」

「ああいう場所だからさ」

オールド・ワンは思い切り背中を椅子の背凭れに預けて、勢いよ

く顔を上げた。一瞬だけ、オールド・ワンとメレグの目が合う。

「あの子は、ぼくに言われてカタロスくんの傍にいるのに過ぎない。自分の自由や命がかかっているとすれば、あの子も気が変わるかと思っただ。カタロスくんを殺してでも、外に出たがるかも知れないと思った。結局あの子は、カタロスくんのことを殺さなかったみたいだね」

「逆の可能性もあったでしょう。カタロス氏があの子を殺すことも十分に考えられた」

「それはないな。そうすると、彼自身が困る」

「?…… ということですか?言っていることが、よく分かりませんが……」

「なににせよ、カタロスくんにあの子は殺せないのさ」

「だから黙って見ていたというわけですね」

「そういうこと」

「もしあの子がカタロス氏を殺していたら、どうするつもりだったのです?」

「別にどうもしないさ。そこで観察は終了。あの子にカタロスという因子を与えた結果は、ご覧の通りでした……で、おしまいさ」

オールド・ワンの口ぶりに、メレグは思わず顔中の皮膚が張り詰める思いがした。万密院にいた頃、メレグも同じ事を思っていたものだ。

困われた環境。その中にいるモルモットを見つめる自分。そしてどこにも行けないこの無力な観察対象に、様々な物を投げ与えた。メレグの場合、その観察物はモルモットではなく、モルモットと呼ばれる人間だった。

だから彼女は、万密院での仕事を辞める決意をしたのだ。

そこにいた連中より、オールド・ワンの方がずっとタチが悪いとメレグは思う。オールド・ワンにとっての実験場は、水槽やフラスコの中ではない。世界全土だ。万密院の研究員達とはスケールが違すぎる。そして世界にいる全ての人間が、オールド・ワンの観察

対象物になりえるのだ。

人は知らぬ間に、オールド・ワンの観察対象になる。彼らが偶然だと思っている出来事が、実はオールド・ワンによって与えられたもので、彼らに与えられる希望や絶望すら、全てはオールド・ワンから寄越されたものに過ぎないかも知れないのだ。

そして、その事実を知らずに死んでいく。自分がこの広い世界で、檻の無い世界で飼われているモルモットであることを知らずに。

「あなたは神にでもなったつもりですか？」

一度メレグが、そうオールド・ワンに訊いたことがある。陰のあ
る声と刺すような瞳で見ても、オールド・ワンに堪えた様子は無か
った。

「ぼくは神じゃないよ。ぼくに何かを作り出す力なんて無いからね。
命、大陸、天候、季節……。神が生み出したというものを、何一つ
ぼくが作り出すことはできない。せいぜいそれをいじくることくら
いしか、僕にはできないのさ」

オールド・ワンは海図を取り出して、その上でトントンと指を鳴
らした。

「次の彼らの行き先は分かっている。ロッキットから出る船はたっ
たの一艘。港に着くまで、半日はかかる」

「そこにも、あなたの『目』達がいるのですね？」

オールド・ワンはメレグの言葉に答えなかった。しかし、ふつと
笑う気配を感じたメレグには、それで十分だった。

「彼らがロッキットに流れ着いたこと、そしてそこから彼らが行
く先……。それは全て、あなたの予想通りなのですね？」

くつくつと笑う声がした。オールド・ワンが振り返らないまま言
う。

「さあ……。彼がどこに行き着くかは分かるけど、その先どうなる
かまでは見通し切れないよ」

「……………」

「僕だって……。どうなるのか、知りたいくらいだ」

メレグは思う。おそらく「そこ」が、オールド・ワンの、最もタチの悪いところなのだ。

世界全土はオールド・ワンの用意した見えない柵で囲われ、人々はその中を無自覚に生きている。そして知らぬまま、オールド・ワンが用意したフラスコの中に放り込まれ、彼の気が済むまでそこから出ることができない。その中で何が起るのかは、全てオールド・ワンの心一つで決まる。

オールド・ワンには、その力がある。

しかし、そうした結果どうなるのかは彼自身にも分からず、そして、誰にも保障できないのだ。

第2章 三十二話

消灯時間が過ぎてきつかり三時間後、イズルは横たえていた体を起こした。上で寝ている人間を起こさないように、そろつと床に足を下ろす。

「……………」

イズルは静かに扉を開けた。濃い闇に包まれた廊下へ踏み出し、ランプに火を点ける。しかしそれも「こんな時間にランプも点けないで出歩いていれば不審に思われる」と判断してのことであつて、人一倍夜目が利くイズルの瞳はランプの明かりなど必要としない。月明かりですら、彼には眩しく感じられる。イズルはそろそろと這うように歩いて、目指す場所へと急いだ。

咎負いと呼ばれる男がいなくなつて、二日経つた。隊員一人一人に見張りをつけなければならぬほど事態は深刻らしい。何故そんなことをするのかと言えば、未だ何の情報も掴めていないからだ。だから手当たり次第に網を張つて、それにめぼしいものがかかるのを待っている。万密院の諜報部は、それほど無能なのだろうか。

諜報部が無能か、咎負いの背後にいる者がかなりの大物なのか。どちらなのかイズルには分からない。そしてイズルの関心は、そこには無かつた。

今イズルが向かつているのは、万密院の地下にある「黄金の林檎」と呼ばれる場所だつた。それが「大陸一」と呼ばれる蔵書を誇る、巨大な書庫室の異称だつた。勿論、誰もが入れるような場所ではない。しかしイズルの手には、その部屋の扉を開ける為の鍵があつた。入手の経緯はイズルもよく知らない。これはただ、ある人物から託されただけのものなのだ。

鍵を鍵穴に差し込んでやると、鍵はゆっくり回つた。極力音を立てないよう、イズルは静かに目の前にある鉄の扉を開けた。人の呻

き声のような音がする扉を開けて、そこにできた僅かな隙間から中へ入った。

「（鉄の扉ね……。『書庫室』につけるようなもんじゃねえだろ、普通。）」

イズルがそう心の中で毒づいたのも一瞬だった。彼は部屋に入つて、思わず息を呑む。

部屋の中三百六十度、自分の背中にある扉を除いて、全て本棚だった。一定間隔で設置された下の階へ降りる為の階段や支柱が、書庫室の広さを物語っている。一生かかっても読みつくせない本の海を見て、イズルはうんざりした。

イズルはポケットに手をつ込み、しわくちやになった紙切れを取り出す。波打っている紙の表面には目的の書架の名前が書かれていた。

「（15 - 10 - 1 か……）」

まるで番地のようなだと思しながら、イズルは十五番の書架を目指した。二十メートルほど歩いて、十五と書かれたプレートが壁にかかっているのを見つける。

「……………」

イズルはプレートから目を落とした。ぴったり閉じられた青銅の扉がある。十五番の書架はこの扉の奥にあるらしい。いわゆる閉架という奴だろうか。

とはいえ、その扉も恐るるに足らなかった。イズルはポケットをまさぐって、先ほど使った鍵を取り出す。

この黄金の林檎に入れる者は万密院の中でも、ごく一部の研究者のみだ。それなのに、その扉を開ける為の「鍵」は、いとも簡単にイズルの手に渡った。

理由は簡単だ。鍵の方が、「鍵穴に合わせてくれる」からだ。イズルは手に摘んだ鍵の先端を、鍵穴に押し込んだ。すると——鍵穴に合わせて水のように変形した鍵が、鍵穴の奥まで差し込まれる。そのままイズルは、鍵を回した。鍵は一瞬にして形を変え、そのま

ま固まる。

この鍵の原理を、イズルは知らないし、興味も無かった。ただ「金属に触れると変形する」という特徴だけ知っていれば、使い方を考えるのは難しく無かった。いちいち鍵を盗んだり合い鍵を作ったりしなくても、いつでもどんな扉でも開けられる。

エペの中で情報収集や偵察を担うイズルには、重宝するアイテムだった。とはいえ、これは黄金の林檎の中へ入る為に託された物なので、用を終えたら返却しなければならない。手放すのが実に惜しいと思いつつも、イズルは十五番書架の中へと急いだ。

黄金の林檎が、いわゆる「図書館」と違う所は、万密院に関するあらゆる歴史書や研究所が所蔵されているという所だ。万密院がどのように成立したか、どのような手段を用いて「遺物」を研究し、その力を利用してきたのか、門外不出の記録がここに眠っている。では、一番、万密院が隠しておきたい情報は何か？

それは、どのようにして遺物を手に入れ、それを研究してきたのかということだろう。過去、遺物を手にしてきた者は、何も万密院だけではない。しかし、それを実用化して実質的に西洋の支配者となったのは、万密院だけだった。

その理由がここにある……。

普段飄々としているイズルでも、さすがにプレッシャーを感じずにはいられなかった。ここは万密院が築いた、二千年にも及ぶ歴史の墓標が眠る場所なのだ。

ミスは許されない……。

イズルはメモに書かれていた「10-1」を目指す。十五番書架の中の「十」という番号が割り振られた書棚の中の、一列目という意味だ。そこにイズルの探す物が、じつと身を潜めている。

一歩足を踏み出した瞬間だった。十分警戒していたはずなのに——いや、だからなのか、イズルは驚かずにはいられなかった。

「探し物？」

その声がどこから来たのか分からなくて、イズルは無防備にも、反射的に、背後を振り返ってしまった。

「一緒に、探そうか？」

そう言う声は、イズルの頭よりも高い位置から降ってくる。声の主は、イズルを見つめていた。

「どうしてこんな所に来たの？」

その人物は、カーペットを踏みしめる音をかすかに立てながら、イズルに近づいた。そして、程よい距離で立ち止まる。その高い位置ある視線も瞳も、イズルはよく知っている。

風が無い海のように穏やかな瞳。敵意が無いかのように柔らかな口元。見守るかのように大人しい瞳。人好きのするような視線。

「どうしてこんな時間に、こんな所へ？」

その言葉を聞いて、イズルは身構えるのをやめた。だらんとだらしく腕を下ろす。観念したからなのか、その人物に尾けられていたことに気がつかなかった自分を嗤ってのことなのかは、分からない。少なくとも……

イズルの前に立つリゼルグには、どちらなのかを判断することができなかった。

第2章 三十三話

「お前こそ、何だってこんな時間にウロついてるんだ？」

「イズルが部屋を出て行ったから」

「……気づいてたのか」

「ここ最近遅くまで、どこかを歩いてるみたいだし」

この一週間、イズルは同僚達の行動パターンを調べて、「黄金の林檎」への安全なルートを割り出す作業をしていた。実際遭遇してまえばどうしても誤魔化せるものだが、「目撃者」を作りたくなかった。

リゼルグは、何日か前からイズルの行動に気づいていたらしい。そして、その行動の意味を知る為に、今日まで待っていたのだろう。いくらなんでも、毎回後をつけられて気づかないということはありえない。

「案外お前も、人が悪いな」

「隊長が言ってたじゃないか。敵は味方の中にいるかも知れないって」

「お前は、俺の敵ってわけか？」

「違うよ。どこで誰に見ていられるか分からないから、慎重に行動しないといけないってことさ」

「……そうだったな」

敵は味方の中にいるかも知れない。だから、誰もが疑心暗鬼になっっている。

「とはいえ、そんな忠告をしに、ここまでついて来たわけでもないだろ」

イズルは、懷に収めたナイフの感触を確かめる。シャツを隔てて胸に伝わるナイフの柄の表面は、冷たかった。

「どうして俺の後をつけてきた？俺が何かコソコソしていたのを、お前は何日も前から知っていたんだろ。何故今日になるまで、その

ことを黙っていた」

客観的に見て立場はイズルの方が不利なはずだが、彼は依然として強気な態度に出た。

「お前は、俺がシッポを出すのを待っていたのか？」

「……違う」

リゼルグの口から出たのは、彼にしては珍しい、強い否定の言葉だった。

「僕は、君を信用したいんだ」

リゼルグは手袋を取り、素肌になった右手をイズルに差し出した。これはリゼルグの家に古く伝わる挨拶の方法で、「丸腰の利き手を相手に差し出す」ことから、相手への信頼を示す方法の一つだった。「君がこんなことをしているのには、何か理由があるんじゃないかと思った。だから、声をかけたんだ。君を裏切り者として突き出すつもりなら、このタイミングで声をかけたりしない。それに、こんな良く知りもしない場所に、一人で来たりしない」

リゼルグの言うことには一応筋が通る。リゼルグも、自分一人でイズルの相手ができると思うほど、迂闊な人間ではないのだ。

「何か僕に、協力できることはないの？」

リゼルグはイズルのことを直視している。その視線は、まっすぐ過ぎる。

そこでようやく——イズルは笑った。片方だけ口の端を上げて苦笑いをする。

「分かったよ……。だからそんなに、必死な顔をするな」

イズルは笑っているが、リゼルグは表情を崩さない。それだけ真剣ということだ。

こいつは信用できる——。

どのみちこれから先、リゼルグを巻き込まざるを得なくなるのだ。

「ここは黄金の林檎と呼ばれている」

「黄金の……林檎？」

「お前は知らないか。ま、当然だけどな」

黄金の林檎への扉は常に閉ざされている上、扉の先に何があるのか、殆どの者が知らされていない。「黄金の林檎」という名前すら知らない者が大半だ。

「俺はここで調べ物をするつもりだった。咎負いのことをな。俺は内密に、咎負いの行方を突き止める任務に就いた。このことは、旦那も知らない」

「隊長も知らない……？」

「特令だからな」

イズルは目当ての棚に並んだ本の背表紙を、チラチラと目で追った。

「前にも話したと思うが……咎負いを奪ったのは、咎負いが持つ『価値』を知ってる連中だ。万密院の中で『罪人』としてしか存在を知られていないこいつの経歴を、知っている者は少ない。だからこそ、そこから足のつく可能性がある。それは敵も百も承知だろうが……調べる価値はある」

「その情報がここにあるの？」

「ああ。お前も、迂闊にその辺のものを触るなよ。機密文書って奴だからな。本来ここは、末端である俺達は立ち入ることさえ許されない場所だ。必要以上の閲覧は許されない」

「……末端、ね」

「不思議か？その特令に『末端』が抜擢されたことが」

リゼルグは頷いた。特令を受けたというイズルの言葉を疑っているわけではない。リゼルグは純粋な疑問として、イズルが抜擢された理由を訝しんだのだ。

「簡単なことだ。この中にいる誰よりも、俺が信用できると上は踏んだのさ。必要とあれば、俺は今すぐにでもお前に銃口を向けることに、何のためらいも無い」

冗談だとは思えない言葉だった。リゼルグは口を噤む。イズルは、愉快そうに言った。

「どうした？今頃怖気づいたか？お前は今まで、そういう人間と同じ部屋に居たんだぜ」

イズルは棚から引っ張り出した本を持ったまま振り返る。そこに佇むリゼルグは、黙ったままだ。

「……変わらないね」

君は。

そう言っ、リゼルグは口を開いた。

イズルは覚えていないかも知れないが、リゼルグは一言一句覚えている。初めてイズルと出会ったときのことだ。

「必要とあれば、俺は今すぐにでもお前に銃口を向けることに、ためらいは無い」

それがイズルからリゼルグへの、唯一の自己紹介だった。少なくとも、人となりと呼べるものをイズルから聞きだせる言葉は、それだけだった。今から、二年ほど前のことになる。

「君は、変わらないね」

そう言っ、リゼルグは――笑った。

イズルは眉間に皺を寄せて、リゼルグから視線を外す。

「……勝手に言っ、ろ」

第2章 三十四話

「その辺で話は済みましたかね？」

不意に聞こえてきた耳慣れない声に、イズルとリゼルグは振り返る。振り返るのはイズルの方が一瞬早い。

二人が声のする方を見ると文机があった。年代物らしく、据えた木の匂いがしそうだ。しかし持ち主の扱いが丁寧なのか、汚らしい印象はもちろん、傷一つすら無い。

「全く、人の部屋で殺すの殺さないの、物騒で適いませんわ」

その机の向こうから、ヌツと突き出す顔があった。

丸眼鏡と肩にかかる細い白髪。レンズの奥でぬめぬめと光る瞳は、まだ若い。

そう、若さを感じさせるその表情が、白髪とひどく不釣り合いだった。

「用が済んだんなら帰ってくださいよー。こちら、徹夜で書架の整理してたんですから。お兄さん達がうるさくてもう、おちおち転寝もできません」

文句を言い言いしながら、男はあくびをする。イズルはすかさず懷に手をやった。

「わーわーわー！ちょっとちよつと、今あくびしてるでしょ！どう見たって丸腰でしょ！なんか物騒なモン取り出そうとするのやめてもらえます！？」

「本当にもー」とふてくされながら、男は頭を掻いてすつくと立ち上がった。大きい。木のように痩せてまっすぐと伸びた軀は、百九十センチにわずか届かずと言ったところだ。年は二十代後半から三十代前半だろうか。

「うわ……でけ……」

立ち上がった男を見て更に半歩後ずさるイズルを見て、リゼルグはふっと噴出してしまふ。

ジャックと豆の木という話を思い出す。ジャックが巨人に追いかけられる一幕があったはずだ。

「なんだよ」

「別に」

珍しく不機嫌につつかかってくるイズルをかわして、リゼルグは男の方を見た。

「失礼ですが、どなたですか。僕達はエトワール・エペの者です、僕はリゼルグで、こっちはイズルです」

リゼルグが丁寧に挨拶をすると、男は気を良くしたのか、にんまりと笑う。

「こそ、まずは挨拶ですよ。基本はね……。本当にもう、いきなり武器を出すとか信じられませんよ……。って、自己紹介でしたね。アタシはミチザネと言います。はい、どうぞよろしく。ここで司書をしております」

「司書？」

「そうですね。だってなんせここ、書架ですから。だからね、当然そこを管理する司書ってモンがいるわけです」

イズルは図書館に馴染みが無いのだろう、今一つピンとこないようだった。代わりにリゼルグが話を続ける。

「こんな広い場所を、たった一人で管理しているんですか？」

「まあね。そうそう本の出入りがあるわけじゃありませんから。アタシ一人でやらしてもらってますよ」

そう言ってミチザネは机の上に積んであった本に手を伸ばした。

「一生かかって読みきれん本がここにはありますからね。ちっとも退屈しませんよ」

「けれど今、徹夜で書架の整理をしていたと言いましたね？」

「お、お兄さん鋭い」

ミチザネはくつくつと笑った。

「アタシは好きですよ。そういう、人の話を良く聞く人がね」

ミチザネを腕を広げて、大仰にうんざりして見せた。

「ここ数日ね、お偉いさんがドタドターってここにやってきて、その辺の本棚のモン、みーんなひっくり返していったんです。ほんと物盗りみたいにバツバツ片っ端から本棚しばいて、用が済んだらその辺に本を置いていっちゃうわけで、本当にもう、困ったもんですわ」

ミチザネは、ふうとため息をついて、机の後ろにある肘掛椅子にどつかと座った。

「それはやっぱり……」

と言いかけて、リゼルグははつと口を噤んだ。脇腹にイズルの肘打ちを食らう。

カタロスがいなくなったことは、極秘なのだ。

「そ、なんか咎負いとかいう」

「え……？」

リゼルグとイズルは目を睜ったが、構わずミチザネは続けた。

「そうとかなんとか言って、散々人のねぐらを荒らしていききましたからね、彼ら。あ、アタシ、ここに住んでるんですよ。本当にもー

ー、迷惑な話ですわ……」

「あんた、咎負いのこと知ってるのか？」

イズルは慎重に切り出す。

「知ってるも何も、見たことだってありますわ」

「!？」

「写真の中でだけですけどね」

リゼルグとイズルは顔を見合わせた。ふむ、とミチザネは首を傾げた。

「どうやらお兄さん方も、咎負いに御用があるようですね」

リゼルグは返答に困った。イズルも押し黙っている。

「いいんですよ、隠そうとしなくても。咎負いの身に何かあったらしいことは、なんとなく分かります。具体的なことはさっぱりですけど。そこはあえて訊ねません。ただ、お兄さん達が何か質問してくれれば、アタシも何か答えてあげられるかも知れません」

ミチザネはくつくつと笑いながら机の上に手を伸ばす。机の右角には、黄金色をした林檎の置物があった。それを、ミチザネのひよる長い指が捕まえる。

「アタシは信用できますよ。万密院の中で、唯一『黄金の林檎』の管理を任されてる人間ですから。ご存知とは思いますがね、万密院の歴史とそれが生み出してきた物に関する、全ての資料がここにしまわれてるんです。司書であるからには、重要な資料には、大概目を通しています。まして咎負いの情報はトップ中のトップクラスにシークレットで重要なものですからね。見聞の中でだけですが、アタシにもちよいちよい覚えがあります」

ミチザネは人差し指の先に林檎を載せて、くるくると回して見せた。

「お兄さん達がわざわざこんな所へ来たのは、咎負いの情報が欲しいからでしょう？ここはね、お兄さん達が思っているほど、簡単に出入りできる場所じゃないんです。ここへの出入りを許すたあ、よっぽどの切羽詰ったことでしょう。アタシでよければ、相談に乗りますよ」

第2章 三十五話

イズルが知りたいのは、咎負いが持つ価値だった。

「簡単ですよ。そんなに難しいことじゃありません」

ミチザネは長い指に挟んだ林檎に、齧りつくふりをしながら言った。

「万密院がここまで巨大な組織になった原因、罪人でありながらその者を生かしておかなければいけない理由。そう考えていけば、自然とそのワケは限られてくるものです」

「ヘリテージか」

「お察しの通り」

ヘリテージは、万密院が所有する、先人ネフェリムの遺産だ。高度に発達した先人の文明が遺した産物を研究し、実用化することで、万密院は今の地位を築き上げた。

「じゃあ咎負いって奴は、研究者が技術者って所か。恐らく、奴がないと、ヘリテージの解析や開発が進まなくなるんだろう」

「ふふ、いい線行ってますよ、その考察」

「……問題は、その先か」

「ええ」

つまり、咎負いを攫った連中は、咎負いを「何に」使うのかということだ。

「万密院はヘリテージを独占し、その技術をいくらか民間に公開して、その売り上げからマージンを取っています」

「それ自体は悪い話じゃない。ヘリテージの解析、技術の運用化をするのに、必要な施設・研究者・資金を揃えることができる所なんで、本当に一握りだ。それこそ、国家予算くらいの資金が必要になる。そりゃなんとかヘリテージの情報を盗もうとしている連中もいるが、あいつらは何も分かってない。そんな情報を自分達が手に入れた所で、どうにもできないってことをな」

イズルの言葉を聞き、ミチザネは愉快そうに笑った。

「そう、その通り。では、誰がどういう目的で咎負いを攫ったと思います?」

「問題は、万密院から咎負いがいなくなると何が起きるかということだよ……。まず、万密院以外の機関でヘリテージを研究できるようにする。そして、万密院がヘリテージの独占で得ていた利益や地位を失う。それを望んでいる人間達が手を組んで咎負いを攫った……そんな所じゃないか?」

「あるいは、両方を望む者同士で徒党を組んだ、とかですかね」

「まあそんな所だろ。今揃ってるカードから考える限り、それ以外の手は、どれも想像の域を出ない」

「ふふ、よろしいでしょ。では、最後にこう付け加えたらどうでしょうか。ヘリテージを何に利用すれば、最もそれを有効に活用できるか。あるいは、それを有効に活用したいと考えているのは、この誰でしょうか」

「……………」

「慎重になれますなあ」

「うるせー、黙ってる」

「ふっふっふ。では、さつきからそこで黙って成り行きを見ているのっぽのお兄さん。あなたに訊いてみましょうか。需要を生み出すのに必要なのは、何だと思います?」

教師に当てられた子どものように、リゼルグはスツと背筋を伸ばした。きつと学生時代もこんな感じだったのだろう。そんな事をイズルは思い浮かべた。リゼルグはただどしく答える。

「えっと……不足とか、枯渇でしょうか。足りないから、生産が行われるんじゃないんですか?」

「正論だけに惜しい。お兄さんの答えには、あと一つ、足りないものがあります」

リゼルグは首をかしげた。

「それは、破壊ですよ」

破壊の為の生産——？リゼルグがその意味を訊ねる前に、イズルが口を割った。

「なるほど、戦争屋か……」

イズルは一括りに言ったが、戦争屋と言っても色々ある。兵器製造、傭兵集団、死の商人と呼ばれる者ども。

「万密院による治世は、民に見かけ上の平和をもたらします。その力は世界に広まりつつある。死の商人達にしてみれば、万密院は商売敵です。だから、考えたのでしょうか。万密院からヘリテージを奪ってその力を削ぐ一方、奪ったヘリテージで新兵器を開発する、一石二鳥の手を。確かに彼らの商売で、国家予算の半分の半分くらいの金が動きますからね。他にこれほどの金を動かせる所は無い。お抱えの研究施設だって持っているから、そこそこの研究・開発ラインがある。甘い見通しだと思いますが、現状、それ以上にヘリテージを欲するような所なんぞ、アタシには見当もつきませんわ」

「医療機関っていうのも一瞬考えたが、それだと、どこかで利益が頭打ちになるんだよな。機械化が進んで人件費は安くなるにしても、やっぱりどこかで天井が見えちまう。大体、今は大半の医療機関が、万密院の庇護を受けているしな。そうなるとやっぱり、戦争屋って考えた方が、まだ可能性がある」

「それにね……。ここだけの話、ヘリテージで人間の肉体を改造することができるようですよ。念じるだけで人を殺す能力を身に着けるとか、不老不死になれるとか」

一瞬、穴が空いたようにその場が静まり返った。イズルは黙ってミチザネを見つめていたが、頭を掻きながら目を細める。

「はあ……？嘘くせーな。バカバカしい」

「全くですよ。本当にバカげている。大真面目にそんな研究をしている連中がね」

ミチザネは黄金の林檎を机の上に置いた。どうでもいいと言わんばかりに、乱雑な置き方だった。

「それを裏付けるようにね、ここ数年、武器商の活動が活発らしい

んですよ。大きな戦争も無いのにね。だからこの国は勿論、ヨーロッパ諸国は、近い内にどこかで戦争が起きるんじゃないかと心配してるんです、お互い、背後から誰かにブスリとやられるんじゃないかとヒヤヒヤしている」

「ふん、なるほどな……。あんたの知ってることは、それで全部か？」

「大体」

「じゃあ、これから先は自分で足を動かすしかねーのか……。参ったな。俺には、武器商相手に立ち回れるようなコネなんかねーぜ」
「でしような。しかし、その彼ならどうでしよう？」

そう言ってミチザネは、持て余していた黄金の林檎を、リゼルグに向かって放り投げた。リゼルグは慌てて林檎をキャッチする。

「聞けばそちらは、第一武隊のリゼルグ隊員。名門、クロスライン家のご子息でいらっしゃる。そうでしょう？」

「……何故それを？」

「言ったでしょう。ここには万密院に関する全ての情報があると。

隊員であるあなた方のプロフィールを所蔵するのは、造作も無いことです。クロスライン家は古来より武家として名高い。優れた騎士を輩出してきた家系です。しかし今は技術の発達に伴い、兵器の利用を余儀なくされている。祖国を守る為に戦う必要が無くなった今、あくまで身の保全という名目で所有しているのみですがね。とは言え、過去の栄誉から、今も彼らの名前が持つ影響力は多い。その辺りのことは、歴史の講義や民間の口伝で、国民の知る所ですが……」

「分かりました。僕が彼らとの橋渡し役を務めます」

ミチザネの話を打ち切るように、リゼルグが答えた。リゼルグは口調同様、よそよそしい笑顔を浮かべてミチザネを見つめている。しかし、そんなリゼルグの様子もミチザネには予想できていたらしい。そして

「よろしく願います」

そう言って満面の笑みを浮かべ、恭しくリゼルグに頭を下げた。

「……って、何でお前がありがたがるんだよ」

イズルが呆れるように言うと、ミチザネは満ち足りた表情のまま答えた。

「何故ってそりゃ、アタシも関係者ですから」

イズルとリゼルグが、ほぼ同時にその疑問を投げかけようとした時には遅く、ミチザネは歯を見せて笑いながら言った。

「アタシもお供しますよ」

第2章 三十六話

「じゃあ、あとはリゼルグに段取りつけてもらっただけ……って思ったけど、そっぴゃお前、実家から離縁されてんだっけか」

「おまけに死んだことになってるしね。墓にも名前が彫ってある」

「おかしい話だぜ。こうして目の前にいて話もできるのに、死人扱いだつてのはな」

ミチザネの言う通り、リゼルグのファミリーネームはクロスラインと言う。エペの中では「リゼルグ」という偽名だけで通している。これは珍しいことではないらしく、入団する時に面接官から、名乗る名前を決めるよう求められたことから分かる。

クロスライン。リゼルグにとって口にすることはおろか、二度と他人に呼ばれるとは思わなかった名前だった。

ある時リゼルグは、クロスラインを名乗るのをやめた。ただ名前を捨てただけではない。リゼルグは、クロスライン家に生を受けた事実を抹消したかったのだ。

「彼らが僕に期待していたのは、『クロスラインの人間として振舞うこと』。それだけだった」

「そしてその中であなたは、役者であつたわけだ。クロスライン家という舞台の上で」

リゼルグは小首を傾げて微笑む。

「喜劇でしょう」

毎朝鶏の声で目覚め、使う予定が無い剣術の腕を磨き、おかしくなくても笑い、笑顔で市民の手を握る。手を差し出すタイミング、微笑む時の表情、相手の手を握った時の力加減。どれをとっても完璧だった。

「それでお前は、クロスラインを辞めたのか」

先祖が遺した財産と名門というイメージ。それにかじりついていれば、一生苦勞することなく生きていける。出される食事も美味い。

花嫁も器量がいい娘の中からより取り見取り。

だからリゼルグが家を出ると宣言した時、父や兄が口を揃えて言ったのだ。

「一体お前は、何が不満なんだ」

彼らの言う通りだろう。自分はむしろ、恵まれた生活をしているとリゼルグも思った。父母とて、自分が憎いわけではない。大勢の兄弟からいじめられることも無かった。望めば全てが与えられていたように思う。事実、リゼルグが何かを手に入れられなくて歯がゆい思いをしたことは、一度も無かった。

だからこそリゼルグは思う。

あの家での生活は、満足できても、幸福では無かったのだ。

今でもあの家の住人達は、人形劇を続けているのだろう。

「そして家を出る時に、一つだけ条件を出されました」

「……それがお前の『死』ってわけか」

クロスラインからはぐれ者が出ることは許さない。たとえ噂でも、勘当された落ちこぼれが出たなどと、人の口に上ることは許さない。

それがリゼルグが最後に聞いた、父の言葉だった。そして、リゼルグが家を出る当日に、彼の死亡診断が下った。

リゼルグはあの家で過ごした記憶、その中で共に過ごした家族のこと全てを消し去りたかった。クロスラインという舞台を離れた彼には、既に必要の無いものだったからだ。舞台の上にいた自分は、あくまで他人に求められて作り上げた「演目」に過ぎない。

「……そんなあなたにクロスラインの名前を利用しろというのは、少々酷ですなあ」

そう言ってミチザネはイズルを見たが、イズルはどこ吹く風という顔をしている。ただ、彼が真剣に聞いているだろうことは、微動だにしないその瞳から分かる。

「僕のことなら、気にしないでください。ただ……正直僕も、武器商と取引はおろか、実際に会ったことも無いんです。あくまで親族に、そういう付き合いがあったっていうだけですから」

「マジかよ……。ここまで話進めておいて、そりゃねえぜ」

今度はイズルからミチザネの方を向いて、二人同時にため息をついた。ミチザネはそのまま、頬杖をつくように腕を組む。リゼルグは困ったように笑った。

「僕、自分にそういうコネがあるなんて一言も言っていないんだけど……」

「くっそ、なんでこんな話になったんだ」

「全く人騒がせな」

ミチザネが呆れたようにかぶりを振る。

「お前だろ！言ってるじゃねーよ！」

すかさず、イズルはミチザネの腕を掴んでひねりあげた。

「いた、いたたた！！痛い痛い！勘弁！」

イズルとミチザネが低レベルな争いをするのを見守りながら、リゼルグは再び口を開いた。

「だから、兄貴に会おうと思う」

ミチザネが悲鳴を上げるのとリゼルグが言い終えるのは、ほぼ同時だった。

リゼルグの兄は、スパニッシュの方で事務所を構えて、武器商の斡旋をしていると言う。クロスライン家の中で早く時代の変化に気づき、兵器の売買に興味を持った人間だった。工場建設の為に土地開発や、技術者の確保など、製造ラインの管理も請け負っているらしい。

「ふむ、いわゆるコーディネーターって奴ですかね。プロデューサーよりの。商才が無いとできないもんですよ。感心感心」

「は？なんだそりゃ。コーディネーターとかプロデューサーとか。新手のハンドガンか」

「子どもは知らんでもいいことですよ。それにしてもいいんですか？お言葉ですが、勘当同然のあなたに、お兄さんがお会いしてくれる保障はありますか？」

「分からない。ただ、商談相手としてなら、会ってくれと思う」

「ふむ……」

「他に宛てがねーんだ。ガタガタ言ってんじゃねーよ」

「それもそうで」

リゼルグとミチザネの寸劇を見て、再びリゼルグは微笑む。こんな風に笑うことも、あの家にいた時は望むべくも無かった。家の大広場で見物したお芝居も、用意されたダンスの相手も、全ては自分の為の、こしらえものだった。

そして、

もう二度と、クロスラインと名乗ることも、その血筋の人間と会うことが無いと思っていた。

第2章 三十七話

アンリとルーチエが万密院を発つて、五日経った。早ければ五日目の夜の内に帰ってくるはずだったが、彼らが戻ってきたのは、その三日後だった。八日目の夕方、第一武隊指揮官室に、出発した時と全く同じ姿のアンリとルーチエが帰還した。

彼らは八日前に旅立った時と何ら変わりなく、ゼーノの前に姿を現した。彼らが捕らえてくるはずの「彼」の姿は、どこにも無かった。

「（あの二人がぬかったとは考えにくい……）」

ゼーノは茶を飲む時も食事をする時も、全て指揮官室の中で用を済ませていた。どうせ監視されているのだ。どこで食事しようか会話しようが大差ないのだが、結局この場所にいるのが一番落ち着く。この場所はゼーノが万密院に入ったばかりの頃にもあって、時間を見つけては、彼はこの部屋に通った。指揮官としてではない。士官として、上官と話をする為に訪れたのだ。

今から十五年ほど前のことになる。ただの孤児だったゼーノを、一武隊の指揮官にまでのし上げたのは、この上官の力による所が大きいと、ゼーノは見ていた。

今もゼーノは、自分の出身、生まれの親を知らない。育ての親は、ここから二十キロほど離れた集落に住んでいた猟師だ。とはいえ、既に集落は壊滅して存在せず、猟師の安否も知れないのだから、ゼーノに故郷と呼べる場所は無いと言える。

行く宛ての無い孤児の行く末など知れているが、その中で彼は、最も可能性が低い道を選んだ。権力者の目に留まり、拾われたのである。

冬も末、寒さが一年の中で一番厳しくなる季節、ゼーノは飢餓と寒さで意識を失いかけていた。廃屋の中でいくらか風を凌いでいる

が防風も完璧ではない。体の疲れはとづくに限度を越えて、横たわっている石床の冷たさが、石のものなのか自分のものなのかさえ、よく分からなくなっていた。

そこに、後に彼の上官となるジーク・ローンダインが現れたのは偶然だった。そしてそれは、偶然のまま終わるはずだった。

ローンダインは総長の命を受けて、至急万密院に戻る途中だった。しかし不幸にも、馬が負傷していた。代わりの馬を探そうにも場所が悪い。廃墟のど真ん中で、既に日も落ちた。しかも吹雪いている。その上この場所は、盗賊や戦災孤児達の巢窟だった。年長の孤児達が組織だって野盗まがいのことをしていることを、ローンダインはよく知っていた。連中に情けを見せた知り合いが、何人もやられている。

そして、お互いにそうした最悪の状況の中、ゼーノとローンダインは顔を合わせた。ゼーノは刃こぼれのした剣を、ローンダインは右手に銃を構えた状態で。

「消える。何もしなければ、こちらも命を取ることまでは考えぬ」
痩せぎすで薄汚れたゼーノの全身を見れば、彼に抵抗する力が無いことは分かりきっていた。それでもローンダインは、ゼーノに厳しく当たった。彼らは徒党を組んでいるのだ。甘い顔をしてはならない。必ず連中はつけ上がる。ゼーノはじっと、ローンダインを見据えた。

「大人しく家の中に戻れ。そちらが何もしなければ、こちらは何もしない」

繰り返した。それは多分、ローンダイン自身がそうなってほしいと思っているからだ。しかしゼーノは、両手で剣をひきずったまま、ローンダインに歩み寄ってくる。

「言葉が分からないのか、止まれ」

慌てずローンダインは、手のひらを突き出して、これ以上寄るなというジェスチャーをした。ようやく歩みを止めたゼーノを見てほっとしたのも束の間、彼は、思いがけない光景を見た。

ゼーノは手にした剣で、自分の右手を切り落とそうとした。

ゼーノが手を切り落とすよりも、ローンダインが剣を奪う方が断然早い。ゼーノは剣を掠め取られた反動で、そのまま背中を地面に預けるように倒れた。

「なんとということ……」

ローンダインはひったくった剣を握りながら後ずさった。しかし、ゼーノが口を割ろうとしている様子を見て、すぐに立ち止まる。もそもそと動くゼーノが、自分の力で起き上がるうとしているのだと気づいて、ローンダインは思わず手を貸していた。

「何故あのようなことを」

そして、ゼーノが身を起こすのと同時に訊ねていた。ゼーノはやつれた頬と、乾いた唇を動かして答える。

「昔から……相手に攻撃する気が無い時は……相手に、右手を差し出す……」

それはローンダインも知っている。しかしそれは、挨拶をする時の話だ。利き手を見せ、武器と害意が無いことを相手に知らせる為の合図である。

「馬鹿者。右手を差し出すとは、そういう意味では無い。利き手を見せて武器を所持していないこと、利き手を預けることで相手への信頼を示すという意味だ」

「でもそれじゃ……信じてもらえない……。その程度じゃ、あんた……僕のこと、信じてくれないだろ……」

それはその通りだった。今もローンダインは、ゼーノを信用してはいない。物陰から、ゼーノの仲間がこちらの様子を伺っているかも知れないのだ。旅人や商人からくすねた猟銃を、こちらに向けている可能性だってある。

「僕には金も無い、家も無い、親も無い。立派な血筋って奴も。孤児だから……赤の他人のあんたに、信用してもらえないようなものなんか、何も無い……」

ゼーノは、ゆっくり一言ずつ、ローンダインの目を見ながら喋る。
「僕があんたに見せられるのは、『覚悟』だけだ。それだけでしか、あんたに信じてもらえない」

ゼーノがそう言つて気を失うのと、ローンダインがゼーノの異変に気づいたのは、ほぼ同時だった。

飢餓と空腹が限界に達していたゼーノを、ローンダインは付き人の馬車に載せてやり、ひとまずミルクを与えてやった。口を開け、喉の奥に流し込んでやる。ゼーノはもごもごと口を動かしているが、意識があるのかは分からなかった。

気絶しているらしいのいいことに、ローンダインはゼーノの持ち物を検めた。といっても、ゼーノは汚れた布の服を着たきりだ。他に武器や所持金、携帯食などは見当たらなかった。

「本当に丸腰で俺に向かつてきたのか……」

勿論、ゼーノが囷だったということも考えられる。こちらが油断した隙に、隠れている仲間が狙撃してくる可能性もあった。もっともそうだった所で、自分が囷になっていることをゼーノが知っていたかどうかは分からない。

「ローンダイン殿、この子どもはどうするのですか」

部下に言われ、ようやくローンダインはその後の対応に困った。命の危機に思わずゼーノを馬車に乗せてしまったが、このまま連れ帰るわけにはいかない。門番にならいくらでも言い訳が立つが、総長の目はごまかせない。

「あと五百メートルもすれば、街にたどり着ける。ひとまず動ける馬を引いて、街まで歩くしかあるまい」

ゼーノのことは街に着いてから考えよう。自分が助けた時点で、ゼーノは仲間内に戻りづらくなっているのだ。仲間からどんな疑いをかけられるか分からない。

僅かな数の馬を引き、ローンダイン一行は、五百メートル先の街を目指した。

宿を取ると、ゼーノを見た女将が、慌てて毛布を貸してくれた。さすがに汚れた格好のままベッドに寝かせるわけにもいかず、ゼーノは毛布に包まって床の上に寝ることになった。とはいえゼーノは気を失ったままだから、ローンダインが毛布に包めてやった。身体が温かくなってきたからか、ゼーノからすうすうと安らかな寝息が聞こえてくる。

「……………」

他に部屋が無いというので、ローンダインとゼーノは一人部屋に泊った。付き人が「見張りが必要なのでは」と進言してきたが、ローンダインは断った。相手は息も絶え絶えの子どもである。心配はあるまいと、そう言って返した。

女将がスープを運んできたので、ローンダインはゼーノの頬を叩いた。「温かい内に飲め」と言っていると、ようやくゼーノは目を覚ました。ゼーノはすぐに、セットでついてきたパンもたいらげた。そして、

「僕……助かったのか」

今頃ゼーノは言った。おかしくて、思わずローンダインは噴き出す。

「当たり前だ」

「食い物もベッドもあるから、天国かと思った」

「ははは」

ゼーノはきよきよと辺りを見回し、自分の身体をぺたぺたと触っている。まだ生きた心地がしていないのだろう。そして、自分を見ながら微笑んでいるローンダインに向かって言った。

「軍人さんでも、そういう風に笑うんだね」

「……ああ」

「これから、どうするの」

それが問題だった。ローンダイン達だけなら国へ帰れる。国境もすぐそこだ。しかし、ゼーノはこのまま連れて行けない。彼を捕虜

と偽るには若すぎる。まだゼーノは、十二、三歳と言ったところだろう。

「そう言えばお前、名前は？」

まだお互いに名乗っていないことに気付いて、ローンダインは自分から名乗りをあげた。

「僕はゼーノ。親はそう呼んでくれた。本当の親じゃないけど」

「何か得意なことは？」

「狩り。よく父さんと一緒に、山で鹿とか猪を仕留めに行った」

「銃の腕に覚えはあるか？」

「空を飛んでるツバメでも撃ち落とせる自信がある」

「……その言葉、本当だな？」

「信じてくれていいよ」

ローンダインは思わず、肩をすくめて小さく笑った。信じてくれと言ったかと思えば、信じてくれていいなどと、一体、何様のつもりなのだろうか。

「どうしたの？」

「いや……」

ゼーノは訝んでいたが、ローンダインは相変わらず笑い続けた。しかし、思い出したように佇まいを直す。

「私に考えがある。君を、我がグロワール・エペの士官候補生として受け入れたいと思うのだが、どうだろうか？」

「グロ……何？」

「グロワール・エペだ。その名は、『栄光の前に翳される剣』と言う。万密院直属の軍隊だ」

「軍隊……」

「表向きは自警団ということになっている。しかし、規律があつて訓練された者のみが所属するのだから、軍隊と呼んで差し支えないだろう」

「……要するに人殺しか」

「馬鹿を言つな。確かに我々は、任務の内容によっては人も殺そう。

しかし、我々にはルールがある。規律がある。裁判官は刑法に従って死刑を執行するが、誰も彼を人殺しとは呼ばないだろう」

「でも、あんたらの言うルールっていうのは、多分、正義のことなんだろ」

「正義ではない。大義だ」

「大義？」

「正義とは良いもののことだ。だが、良いことが正しいこととは限るまい。しかし大義とは理屈で決められる。よって合理的だ」

「合理的な理由があるなら殺されてもいい人間なんて、いるのかよ」
「合理的な理由で殺されるのではない。合理的な理由によって裁かれるのだ。大義も同様だ。殺すことが目的なのではない。ただ、手段にはなりえる」

「分かった。理屈はよく分からないけど、あんたがエペっていうものの為にすごく尽くしてるんだってことは、よく分かったよ」

「知った風な口を……。しかし、賢いな。お前は」

「でも、僕……俺には、大義とか正義とか要らない」

「……では、何を？」

「力がほしい」

ゼーノとローンダインの出会いには偶然だった。それは間違いない。しかしその偶然をものにしたのは、紛れもなく、ゼーノ自身の力である。

第2章 三十八話

エペで士官候補生の育成を始めたこと、ゼーノがローンダインに見せた覚悟、ゼーノをいっばしの士官に育て上げたローンダインの手腕。

どれが欠けても、自分が指揮官に成長することは無かった、とゼーノは思う。ゼーノには土壇場で覚悟を決められる腹があつたし、運よくタイミングにも恵まれ、ローンダインという上司を得ることができた。有能な上司は部下の良い所を上手に引き出してやれる。優れたシェフと同じだ。彼らは材料を選ばない。そして、素材を一流の物に仕立て上げる。

ゼーノが士官学校をトップの成績で卒業したのは十四年程前、わずか一年で卒業するという偉業を成し遂げた。今もこの数字が最短記録になっている。しかも、ゼーノが貴族の家庭に生まれたのではない、平民出の子どもということも、彼の業績を伝説化させていた。しかしそれらは、ほんの始まりに過ぎなかったのだとゼーノは知る。エペの門をくぐった後に、彼はようやく、ローンダインの真意を知った。

八年前のことだった。珍しくローンダインが外に出ようと言うので、二日の休暇を取り、彼とゼーノは隣の街へ来ていた。私服で出かけ、観光客が利用する警備が手薄な宿をあえて選んだのは、何かわけがあるのだらう。ゼーノはローンダインの行動を、冷静に分析していた。

二人は部屋を別々に取り、ローンダインは一番奥にある部屋を選んだ。その手前がゼーノの部屋になる。他の宿泊客を寄せ付けない配置だ。ゼーノは今、ローンダインの部屋にいる。

「万密院は民衆が期待するような組織ではない。逆だ。彼らは民衆の期待を利用している」

エペに正式に配属されて五年。ゼーノも、百人ほどの部隊を率いる立場になった。そのゼーノを前に、ローンダインが淡々と話す。

「万密院がヘリテージを利用するのは、人々の生活を豊かにする為ではない。人々の生活を豊かにするのは、ヘリテージを公に利用する口実が必要だからだ。俺達エペがそうであるようにな」

エペは自警団という名目で作られたが、その実態は、国家を相手取って渡り合える防衛力を持った軍隊である。それを公然と設立する為に、自ら「自警団」などという呼称をつけた。

しかし、街の警護はエペ全体の仕事の一角にも満たないし、つまり所、人員もその程度しか割かれていない。

とはいえ、エペの全容を知る者は万密院の中にしかない。その上、エペに配属されるのは天涯孤独、あるいは社会から存在を抹殺された者と決められている。エペからの情報漏えいを、徹底的にシヤットアウトする為だ。よって民衆は、この事実を知らない。

「お前も、研究塔を見たことがあるだろう」

万密院の敷地の外れにある塔のことだ。中に入ったことは無かったが、ゼーノも外観だけは見たことがある。用が無ければ、まず寄りつかない場所だ。塔に近付こうとすると、すぐ衛兵に呼び止められてしまう。常にその四方を衛兵達が囲っていた。

「あの場所が何の為にあるか知っているか。知らないだろう。俺もこの立場になってから、ようやく知った」

そこでゼーノも初めて知ることになった。研究塔での人体実験、そこで飼われるものの生活と末路。そして、何の為に実験が行われるのかを。

「馬鹿馬鹿しい……。不死の兵士など」

ゼーノがそう口にしたのは、心から、その発想が馬鹿馬鹿しいと思ったからだ。しかし、もしそれが実現したらと考えると、恐ろしくもある。

未だ研究の余地があるエフェリムの遺産、これからも発展するであろう技術。それらを囲い込み、私利私欲に利用する者。そして、

その強欲者を守る為に必要な、最強の軍隊。

何より恐ろしいのは、不死の軍隊が完成を見れば、万密院がそれらを意のままに操るのは、造作も無いであろうことだ。生命の理よりも、人の精神を御する方が容易い。

「万密院の上の連中……元老院は、本気で考えている。己らの不老不死化と、彼らを守る最強の軍隊を作ることな。その為にヘリテージの研究、研究塔という檻がある。いずれはそこで、兵士の製造が始まるのだろう。既にあの場所で飼われている者達は、そのプロトタイプと言えるな」

「……何故その話を俺に？」

もしローンダインの口から割れたと知れば、ローンダインも無事では済まない。当然、話を聞かされたゼーノも相応の扱いを受けることになる。

とはいえ、ゼーノに恐れは無かった。元々ローンダインに拾われなければ捨てた命である。今更惜しいはずも無い。ただ、何故ローンダインが自分に話を聞かせたのかだけは、知りたかった。

「俺が心血を注いで尽くした万密院は、もうこの世に無い。今の万密院は、強欲な年寄り達を生かす為の、巨大な揺りかごだ」

「それで……どうされるつもりです？」

ローンダインクラスの間になれば、おいそれと万密院を抜けることはできない。その上、彼は万密院の真の目的を知っているのだ。一生を万密院で過ごさなければならぬだろう。そう考えると、思考の行きつく先は、多く無かった。

「糾弾されるのですか。万密院の行っていることを。あるいは……」

「謀反を起こすか」

謀反。その為の宛てはあるのだろうか。ローンダイン一人に、それほどの力があるとは思えない。

「……あなたは、共犯者が欲しいのですか？」

「共犯者というよりは、後継者だな」

俺一人で謀反は起こせまい。そう言っつて、ローンダインは椅子か

ら腰を浮かせた。

「イブリース。彼らとのパイプラインを持てれば、あるいは」

ローンダインの死は、その二日後に訪れる。彼は、夕暮れに鐘が四回鳴る頃、処刑された。理由は聞かされていない。知ったところで意味は無いだろう、とゼーノは思う。ただ、ローンダインが何をしたのかは大体察しがついた。その日以来、エペの隊員一人ひとりに、監視がつくようになったのだ。

万密院の情報、とりわけ研究塔での研究内容。それが外部に流出した恐れがある。新しい上司からゼーノがそう聞かされたのは、監視がつくのと、ほぼ同じ時期だった。

ゼーノは考える。本当にローンダインは、外部へ万密院の情報を売ったのだろうか。その答えは藪の中だ。とはいえ、ローンダインがそんなリスクを取ったとは思えないし、売り込むツテがあるとも思えなかった。

けれどそんなことは問題にならない。彼の目的は、あくまで万密院の動揺を誘うことだったのだろう。事実、その情報に踊らされたようで、一年間、万密院下における監視の目が厳しくなった。

そして今、再び万密院内部での不義が疑われている。今回の場合は、六年前とは訳が違う。実際に、咎負いが居なくなっているのだ。嚴重に彼を管理していたが故に、疑われる者が非常に限定されてしまった。

ゼーノは、ローンダインの言葉を思い出す。彼が後継者が必要だと言った、その後のことを。

「もし俺に十分な力があつたなら、万密院の中で騒ぎを起こした後を狙って謀反を起こすだろう。一瞬の隙、あるいは一分の綻びを狙うのだ」

咎負いの失踪は、もしかすると、ただの開幕ベルに過ぎないのかも知れない。誰かが、この混乱に乗じることを、狙っているのでは

ないだろうか。

ローンダインはゼーノのことを後継者と呼んだ。彼がゼーノに継いで欲しかったものは、何なのだろう。

イブリースは、古くから万密院と対立してきた組織だ。イブリースもヘリテージを収集しているが、万密院と決定的に違うのはそのスタンス、「先人の過ちを繰り返さない」としていることだ。彼らがヘリテージを集めるのは、ヘリテージの悪用を防ぎ、「封印」することだった。

よって、真つ向から万密院と対立する。思想も違うから相容れない。万密院は私利私欲にヘリテージを利用しようとするが、イブリースはそれを阻止する為に活動している。

昔からその存在だけは分かっていたが、イブリースは表の歴史に決して出てこようとしなかった。その為、所在が全く掴めなかった。拠点の所在は定かではなく、もしかすると、定期的に移動しているのかも知れない。

ローンダインが彼らとパイプを持てなかったのは、立場上の理由は勿論、そうしたイブリースの性質のせいでもある。

ただ、イブリースと万密院が全面戦争を起こすのではないか、という噂もあった。ゼーノの知らない所では、着々と軍備の増強がされているらしい。何の為かは不明で、上からの情報は全く無い。

もしかすると、それは、非公式の行動なのかも知れなかった。つまり、謀反を起こそうとしている誰かが居て、うっかり情報が漏れるようなことをしてしまい、ゼーノの耳に入るようなヘマをしたということも考えられる。

「……………」

ゼーノはカップに入ったコーヒーを口元に運んだ。カップの中はどす黒く、底が見えない。どれだけ砂糖を入れても、ブラックホールのようにそれを吸い込んで、跡形も無く消していく。

もし謀反を企てる人間が居たとして、自分はそのことを上層部に報告するだろうか。

多分、しないだろう。

万密院に忠誠を誓う自分は、ローンダインと共に死んだのだ。鐘が四つ鳴った、あの日から。

だからこそ、ルーチェ達の失敗も糾弾せずに、目を瞑っている。

ゼーノは、カップに満ちたコーヒーを、一気に飲み干す。舌の上を滑る僅かな甘みと、大多数を占める苦味が、たとえようも無く心地良かった。というより、今の心地をどう表現していいのか、彼自身にも分からなかった。

第2章 三十九話

ノックをする前に、声がした。

「入りなよ」

いつもそうだった。ノックする前に、必ず中から声をかけられる。「いつもいいって、言ってるのに」

アインスはむくれながらアンリを出迎えた。アインスはシーツを頭からかぶって包まる。

アンリとルーチェは、手配犯を捕えることができなかった。よつて、アンリはエペの任務から暫く外れることになり、今はアインスの訪問だけがアンリの仕事である。早い話が、謹慎だ。

「ふーん、アンリでも失敗することがあるんだね」

「恐縮です」

「ねえ、アンリ」

アインスはシーツから顔を出した。

「前にも言ったけど、僕の先祖はね、不老不死の研究の為に、色々な能力を持つ遺伝子と交配されてきたんだ。その結果、子孫の僕には、色んな能力が不完全な形で引き継がれた」

アインスが横目に花瓶の花を見遣ると、まるで蠟が溶けるように、花弁が燃え盛った。

「この能力も、本当は、大勢の人間をいっぺんに殺す為のものだった。でも僕の場合は、目の前にいる相手にしか効果がない。それも、一度に一人の相手にしか使えない。だから、兵器としての有用性は低い」

アンリはコップに入った水を、焼けた花弁にかけて消火する。花弁は縮れ、生前の姿は見る影も無かった。

「他にも、こんな能力がある」

そつとアインスは、コップを持ったアンリの手を握った。

「触れた相手の、記憶を読むことができる」

アンリが身を翻した時には遅く、アインスは、得心が言ったように笑った。

「今までブラッシングを頼んでたのはただの気まぐれじゃなくてね、君の記憶を読みたかったからなんだ」

振り返っても、アンリは依然、仮面のような表情を崩さない。しかし、まっすぐアインスを見つめている。アインスは、もう一度笑った。

「君はテロリストだ。ここではない遠い所、今から十年近く前、少年兵として紛争を経験している。その時に君を拾った男がいて、彼が君を士官学校にやって、一人前の兵士に育てあげた。君は、ある時はゲリラ兵士として、諜報員として活躍した」

そうだろう？と言って、アインスは首を傾げる。

「二年前に起きた事件は、君が主犯だろう。祭りの最中に、教会が爆破されたっていう事件のことさ。本来、翌週に決行するはずだったのに、早まった部下が、先に事を起こしてしまった。君にとっても、これは、計算外の出来事だったんだ。それでも手際よく撤収させて、何の痕跡も残さなかったのは、素晴らしかったと思うけどね。その後君は、万密院の内情を探る為に、エペに入隊した。ヘンドリクセンという、他人の身元を使ってね」

「……それで大体、私の記憶の全てですね」

「それでも、訊きたいことがあるんだよ。一つ目、君の本名は？」

「分かりません。拾われた時に、初めてヘンドリクセンという名前を与えられました」

「二つ目、どうしてテロリストになんか？」

「仕事の内容は、重要な問題ではありません。ただ、私を拾ったあの男の元でなら、自分の能力を最大限に活かせる。そう思いました」

「能力ねえ……」

「あの男風に言うなら、人生はゲームなのです。世の中にはルールがあって、誰もがその中でランクづけされる。弱肉強食、とも呼ばれるシステムです。その中で自由に動き回るには、より高いランク

へ上がる為の『力』が必要です。

私は無力な少年兵でした。だから分かる。自分を生かすも殺すも、自分次第なのです。死んだ後に絵を評価される画家のように、埋もれたり認められなかったりした力は、無意味です。自分を生かす力と、それを発揮できる舞台だけが、私には必要なのです」

「それが……誰かの駒として生きるってこと？」

「駒だからこそ、誰に使われるかは、自分で選びます」

「ふうん……」

アンリから顔を背けて、アインスは再びシートに包まった。

「僕は自分で能力を選べない。使われる相手を選べない。この薄い扉一枚、突き破って外に出ることだってかなわない。完全に負け試合だよ」

アンリが手を伸ばすと、それを察知したのか、アインスは更に身を丸くする。

「レストランで外食する。服屋で試着する。本屋で立ち読みする。夕食が用意された家へ帰る」

風呂で一日を回想する、明日着る服の準備をする、ぼんやり明日することを考えながら、眠りに就く。

「どこに行けば、そういう力が手に入るんだろう」

それから数日、アインスがゲームをやりたいと言いだすので、アンリはチェス盤を買って、研究塔を訪れた。

アインスは他にすることも無いせいか、教本を片手に、すぐに腕を上げていった。といっても、割と無鉄砲な駒の進め方をするせいで、アンリには敵わずにいる。それでもアインスは楽しらしく、ベッドサイドには常にチェス盤が置かれていた。

「前は、こんなことを考えたことがなかった」

駒を進めながら、アインスは独り言のように漏らす。

「僕には、研究塔の中の出来事が全てだったからね。それさえも、全部壊れちゃえばいいって思ってたけど」

言いながら、アインスは窓の外を見た。万密院の建物が邪魔をして、街並を見ることはかなわない。

「アンリのせいかもね。言ってみれば、君は、外国から来た人なわけだし」

黙って進めたアンリのナイトが、アインスのポーンを取った。

「……ねえ、アンリ。ルールがあってランクがあるなら、どうすれば、高いランクに上げれるのかな」

「ゲームに勝つことです。ルールとランクだけでは、ゲームとは呼べません。その中での、ランクをめぐる争い。人はそれをゲームと呼びます」

「なるほどねえ……」

「それが、何か？」

「ねえ、アンリ」

アインスのビショップが、アンリのナイトを取った。

アンリは、顔を上げる。

「ねえアンリ、ゲームをしよう」

第2章 四十話

アンリは研究塔の階段を昇っていた。謹慎期間中は訓練もできないので、することが無い。左手には、昨日燃えた花の代わりの百合の束。これは研究塔の敷地内で育った人工植物だ。既に地上には、自然発生の百合は存在しない。

「失礼します」

そう言つてノックしながら、アンリは中の住人の返事を待つ。

「はいはい」

最近投げやりになってきたアインスの返事を聞いて、アンリはそつと、扉を開けた。

部屋の中に、アインスが居た。ただしその視線は、窓の外を向いている。ここ一カ月くらい、アインスが窓の外を見ていることが度々あった。ただし、研究塔の建物に遮られた外の世界を、アインスが眺めることはかなわない。

「じゃあ、やろうか」

そう言つて、アインスはようやくアンリの方を振り返つた。そして、サイドテーブル置きっ放しになっていることが常になったチェス盤を指差す。

アンリがテロリストとアインスに知れて一日。アンリの身の回りは、何一つ変わらなかった。それが二日、三日過ぎても、矢張り同じだった。

「告発されないのですか。私を」

ナイトの駒を動かしながら、アンリは淡々と訊ねる。アインスは駒を進めるのをためらう素振りを見せたが、質問には間髪入れずに答えた。

「そんなことできないよ」

「何故です？」

「ゲームの相手を失くすから」

「ゲームの相手ですか。どちらかというと、私はゲームの駒ですが」
「……前から思ってたんだけどさ、チェス駒の形って、何か意味があるの？」

「一応。必ずしも、駒の動きと一致する由来ではありませんが。それによりも重要なのは、駒ごとに役割があるということです」

「役割？」

「一個軍隊築くのであれば、役割の発生は必然です。スポーツでは『ポジション』とも呼ばれます」

「ふーん……。そういえば、訊いたこと無かったけど、アンリは、エペの中ではどういうポジションなの？」

「遊撃兵ですね。ゼーノ隊長が軍師、イズルが偵察兵、ルーチェが白兵、リゼルグが護衛兵、衛生兵と遠戦兵は別部隊です。ただ、隊長自身は火戦も得意なようです。自ら前線に立つことは、あまりありませんが。」

エペは、このように、五、六人の人員によって編成される『武隊』です。こうした数人での集まりですら、行動を共にするとなれば、役割が必要になる」

「役割ね……。僕はスポーツをしたことがないし、生まれてこの方ずっと一人だったから、よく分からないな」

「ゲームする上で重要なのは、誰を倒すかということと、誰と一緒に戦うか、です。個人の能力は合わさるとその倍以上の効果を発揮することがあるし、足の引っ張り合いにしかないこともある。」

自分が誰に挑んでいるのか、今一緒にいる仲間と自分に何ができるのか、よくよく知ること、勝利への道筋ロードマップを作ることができます」

「……なるほどね。チェスと同じ、か」

「まさしく」

「何で君が自分のことを駒って言うのか、分かったよ。分かった気がしてるだけかも知れないけど」

「そう真意から遠くもないでしょう」

「まあいいや。要は、駒も人も、使い方次第ってことでしょ」

「ええ。ですから、良き駒の使い手を見つけることも、駒にとつては重要な事です」

「それが君の言う、『あの男』ってわけ？」

「恐らく。今まで見た中では、あの男が一番のプレイヤーです」

「その男が君に、僕を殺すように言ったわけ？」

駒を摘んだまま——アンリは伏せた瞳を上げて、アインスを見上げた。そのまま駒を盤面に置く。相手のクイーンから反れるように「一瞬だけど、さっきアンリが『告発されないのですか』って言った時さ、少しだけ殺意を感じたんだよね。基本的に僕って、人からは、『恐れ』『殺意』『哀れみ』しか向けられないからさ。こういうことには敏感なんだよね。特に殺意はさ、命に関わるじゃない。まあ、どれでも相手を殺しちゃうけどさ」

君が初めてだよと言って、アインスは笑った。

「僕に殺意を向けて殺されなかったのは。ゲームの相手を失いたくないからっていうのもあるけど、一つ訊きたいことがあってさ。君は、いつから僕を殺そうと思った？昨日、僕が君の出生を暴いた時？あの後、僕が密告すると知れないと疑いだしてから？」

アンリは顔を上げてアインスを見つめた。それが、とても自然なことにように。

「初めて会った時から、ずっと」

そのまま、アンリは黙った。

しばらくは、アインスも黙っていた。やがて思い出したように。

「はは……」

それを合図にして堰を切ったように、アインスは笑った。

大音声を響かせる。何が愉快なのか、押しとどめることもせずに、ひたすら笑った。

アンリはアインスがするように任せた。アインスを止めることもなく、部屋を出て行くことも無かった。

ようやくアインスは、笑うことをやめた。辺りにチェス盤や駒がひっくり返っている。それにも構わずに、素早くそれでも自然に、彼は、アンリの手を握った。逃がさない、と言わんばかりに。

「へーえ……。君は僕と心中したって構わないと……。そう思ってたのか」

アインスの「記憶を読む能力」からは、逃げられない。アンリは大人しく頷いた。

「もし任務に失敗すれば、僕もろともに消えろ、と……。そんな要求を呑むなんて、君は案外、思い切ったことをするね。それとも単に、命知らずなのか」

「それくらいの覚悟が無いとできないミッションに私が選ばれた、というだけのことです」

「……………」

「チップよりも命の方が、ゲームに対する真剣味が、遥かに増すというものです。多分あの男にとっては、それくらいの意味しかないでしょう。私が死ぬ必然はどこにも無い。私から男の身元が割れることはありませんから。なので同じように、あなたが死ぬ必然も無い」

「ひどいなあ。危うく僕は、気まぐれで殺されるかも知れなかったのか」

「あの男は私に対して、ただ単に、『ただで死ぬな』と言いたかっただけなのだと思います。私が死んでから後のことは、私にとって、何の意味もありません。あなたが死のうと生きようと、死後の私には、何の影響も無い」

「それはそうだね……………」

「さて、私をどうされますか」

明らかに追い詰められる側にあっても、アンリは淡々としていた。「ここまで露見したわけです。私がスパイであること、私があなたを殺すことも厭わないこと……。さすがにあなたも、安穩としてはられないでしょう」

「……………」

「あなたの能力で私を殺すことは造作も無い。あの男は駒を失う。私はただ死ぬだけ。あなたが躊躇する理由は無い。遊び相手は、上に要求すれば用意してもらえるかも知れません」

「……ふざけるな」

一瞬、何が起きたのか、アンリは分からなかった。

やがて、初めて聞くアインスの罵声に――アンリは口を閉じた。アインスは、今までアンリが見てきたどの表情よりも凶暴に……感情をむき出しにしていた。

「君じゃなきゃダメだ。君は僕を恐れたり、哀れんだりしない。おべっかを使わない代わりに、蔑んだりもしない。僕とイーブンにゲームをしてくれるのは、君だけだ」

アンリの手を握るアインスの力は、まるで、逃がすまいと必死だった。爪がアンリの手のひらに食い込むほど、力強く握っている。

「君だけなんだよ……」

そのまま、アインスは勢い良く顔を伏せった。

どうするべきか考え、やがてアンリは、結論を出した。

このままにいるしかないだろう。

自分には何もできないが、逆に、何もしない方がいいように思える。

よく分からないが、なんとなく、そんな気がする。

こういった気の迷いやあやふやな判断が、戦場での生き死にを致命的にする。

それを良く分かっているはずなのに、何故かアンリは、大人しくしていた。

「ただ死ぬだけなんて、言うなよ……」

しゃくり上げるアインスの声が聞こえる。

「……アンリは、頭がいいけど、馬鹿だよ」

この言葉にどう答えるべきか。

そう考えつつ、アンリは、自分が的確な答えを返せるとは思えな

かった。そして多分、ここで求められているのは、明確な「解答」ではない、とも考えた。だから、正直に、思ったことを伝えた。

「……そうかも知れません」

数日が過ぎた。アンリが訪ねても、アインスはシーツに包まっているだけだった。更に二日過ぎて、ようやくアインスは、ベッドから体を起こした。

「おはよう」

早朝、まだ日差し弱い折に訪ねると、アインスはすっかり目が覚めているようで、しっかりした口調でそう言った。

何があつたのだろうか？

しかし、特に追求せず、アンリは花瓶に生けた花を取り替えた。サイドテーブルに置かれたチェス盤の上には、駒が並んでいる。

「？」

駒はどれも八の側に集められ、唯一白のキングだけ、一の側に置かれている。よって全ての駒が、白のキングの方を向いていることになる。敵対している、とも言える。

「ねえアンリ」

アンリがチェス盤に気づいたことを見計らったように、アインスが口を割った。

「最高の駒、最高のプレイヤー。ゲームをするのにはまだ一つ、何か足りないと思わない？」

え——？

アンリがその問いに考える暇もなく、アインスの白い手が、アンリの腕を掴んだ。

アインスは、反対の手で、そっとチェス盤に手をかける。そしてひっくり返した。

駒がパラパラと床に落ちる。少しの反動を見せて、しかし、すぐ大人しくなる。アインスはチェス盤の角を、そっと持ち上げた。

「最高の舞台だよ。戦場って言うてもいいかも知れないけど」

多分、それが最初で最後だった。
アンリは思わず、身じろぎした。

初めてアインスに、未知を感じた。本能が回避しろと告げる、未知の何かを。

「やってみたくない？」

アンリの手を握るアインスの力は逃がすまいと、爪がアンリの手
のひらに食い込むほど、力強い。

「やってみたくない？」

アインスは、笑って言った。

「最高のゲーム」

第2章 四十一話

午後の診察が終わったメレグは、レストランへ向かった。最近はどこに居てもオールド・ワンの視線を感じる。

。どこか人の居る所で気を紛らわせたい。そう思って、メレグはわざわざ一駅先の店を選んだ。と言っても、適当に目についた店に入っただけだ。何か頼んで、出来る限りここで気分を落ちつけてから帰りたい。パスタと前菜、食後に紅茶を頼んで、メレグは窓の外を見る。

カタロスの話だと、万密院の中では、内部分裂まで起きそうな気配がある。危機的状況の時こそ、人は団結すべきだが、えてして結果は逆になる。一番多い原因は、「相手への不信」だろう。元々万密院は、規則・恐怖・利害で統制された組織である。どれか一点でも欠ければ、互いが互いを食い合うようにして、崩壊するだろう。利害関係を失った者は他に先じて利益を確保しようとし、恐怖を乗り越えた者は恐怖の根源を断つことを考え、規則から脱却した者はどんな手段を使っても自分を守ろうとする。どれにしる、万密院崩壊の一手になりえる。

既に食事は終え、二杯目の紅茶に手をつけていたメレグの所へ、ボーイが寄ってきた。まだポットには、十分な量の紅茶が入っている。

「……何か？」

「こちらを」

そう言っただけボーイは、一揃いのカップとソーサーをテーブルの上に差し出す。ミルクも用意されていた。メレグはストレート派だ。滅多にミルクは入れない。

そこで

「紅茶だって、聞いたからさ」

聞きなれた声でした。

「だから、自分で頼んで持ってきた」

デカンタの中で、淹れたてのコーヒーが波打っている。色は、向こう側を全く見通せない、ストレートの黒だ。

「カタロスクン達は、無事、ロッキットを脱出したよ」

コーヒーの入ったデカンタを片手に、オールド・ワンが微笑んだ。

不運は唐突に訪れるが、オールド・ワンは、彼自身がそうしたいと思った時に訪ねてくる。彼は、気まぐれのような不運と違って、狙った獲物を射止めるまで追い求める。

自分にそうできる力があると、知っているからだ。

「不思議に思っていたんですが」

「何？」

最初からそこが自分の席だったように、オールド・ワンはカップにコーヒーを継ぎ足している。

「どうしてあなたは、彼らが捕えられるのを阻止できなかったのですか？あなたの『目』が、彼らを監視していたはずです。だからこそあなたは、彼らに迫る追っ手を、全て返り討ちにすることができた」

「あれ？知ってたんだ。ぼくとしては、影から救いの手を差し伸べるあしながおじさんのつもりで、二人には黙ってたんだけどな」

そもそもぼくのせいなんだけどね、と言って、オールド・ワンは笑う。

「ジェット氏に追っ手が来ていたなら、当然、彼らにも刺し向けられていたでしょう。それなのに彼らの生活には何の変化も無く、むしろ、ジェット氏が死ぬまで、自分達に刺客を向けられていることに気付いていないようでした」

「その言葉、半分は予想で、半分は推測って所だね」

「ええ。ですが、あなたが今、事実であることを認めてくれました」
「そうだね。でもそうだとすると、そのことに何の意味があるだろう？」

オールド・ワンはポケットに手をつ突っ込む。「不作法な」とメレグが注意する前に、ポケットに突っ込んだ彼の右手が、テーブルの上に差し出された。その指の間からこぼれてきたのは――

「サイコロ……？」

二組みのサイコロだった。サイコロはテーブルの上を転がって、メレグの目の前で止まる。

「ねえメレグちゃん。ゲームを楽しむなら、君はどの人になりたい？ 観客？ それともプレイヤー？」

「……………」

「ぼくの一族は観客になることを選んだ。ラジオと一緒にね、飽きるのが嫌だからたくさん番組が欲しいってんで、世界のあちこちに『目』を放っている。世界は大きな舞台で、その中で人々はヒーローであり、ヒロインであり、ヒールであり、エキストラだ。誰かの住むアパートも由緒ある遺跡も、彼らにとっては、舞台の上にあるセットに過ぎない。選挙や戦争はイベントの一つだし、人々の噂話はこれから起こる事件のイントロダクションで、何気ない人々の仕草全てが伏線になりえる。ワールドワイドで変わり続ける、終わりの無い番組の誕生だ。全世界をリアルタイムで中継中、ってとこだね」

巨大スクリーンと、辺りを覆い尽くすほど存在する映写機。そんなものを、メレグは想像する。気に入らない映像はカット、もしくは上映中止だ。そのままフィルムを入れ替えてやればいい。

「でもね、それじゃ面白くないんだよ。ひたすら長いだけのフィルムを見させられるなんて、ぼくには耐えられない」

オールドワンはテーブルの上からナプキンを一枚とって、そこにマス目を描いた。すごろく、という奴だろう。あみだのようになったマス目が並んでいる。オールド・ワンはサイコロを一つまみして、手の平の中で転がす。

「一番楽しいのはどれだろう。観客？ それともプレイヤー？」

オールド・ワンはテーブルの上にある入れ物から角砂糖を二つ取

り出して、マス目の上に載せた。角砂糖を駒に見立てているのだろ
う。

「違うね。ゲームマスターだよ。ゲームの創造主が、一番楽しい」
安全圏でスリルを楽しむ観客。ゴールに待つ報酬を目指すプレイ
ヤー。創造主はプレイヤーの道のりに、様々な障害を仕掛ける。

オールド・ワンは、サイコロを振った。創造主が作る道の上を、
角砂糖は進む。神の定める法に則り、オールド・ワンが用意したサ
イコロの出す目に従って。

第三章 四十二話

俺の中にある一番古い記憶は列車の中で作られた。ただの箱のよ
うな車両の中に、申し訳程度に置かれた座椅子。それでも、この頃
の列車と言ったら、まだまだ庶民が乗れるようなものでは無かった。
俺はカムラッドで仕事をするまで、一度も列車に乗ったことが無
い。だからこれは、俺がカムラッドに拾われる前の記憶なのだろう。
そして、そこには居たはずなのだ。俺を連れて、どこかへ行こう
とする誰かが。

何が原因かは分からない。俺が覚えているのは、その列車がレ
ールから外れて、窓の外の景色がゆっくりと回転していった所までだ
った。

俺は体を起こす。どうやら転寝をして、小さい頃の夢を見ていた
らしい。夢の内容までは思い出せなかったが、なんとなく分かる。
あの頃の夢を見ていたのだろう。船に揺られて、体が列車に揺られ
て過ごしたあの時のことを思い出したのだろう。さて、そろそろこ
の船旅も終わる。もうすぐ港に着くはずだ。

俺とカタロスがロッキットを出たのは二日前だ。荷物を下ろし
て港に着いたのはいいものの、その先のプランは全く無い。とりあ
えずは、ソドムに戻ることを考える。

「列車か馬車……。まあ、徒歩は無いよな」

このキンデルガルデンの街は、ソドムまで、列車で一日ほどかか
る距離にあった。馬車ならその三丁四倍はかかるだろう。

「まあ、どれにしても……」

金が。

「無一文ですよ。どうしましょう？」

俺のポケットマネーは捕まった時に没収されたく、銅貨一枚
も残っていなかった。カタロスに至っては身一つで牢から出てきた

ままだから、売っ払って足しにできるようなものは何一つ無い。

「お前、手品とかできる？」

勿論期待はしていない。ただ、もしも思っただけ訊いてみる。

「いいえ、何も」

「俺はナイフ投げならできるな」

「僕は、その……。的ならできます！」

「いや、いい」

そんな行きつ戻りつな会話をして、結局何一つ決まらないまま、俺達は港で潮風に当たっていた。積み荷を降ろしている船乗りが、俺達に声をかける。

「兄さん達どうした？宿が決まってねえのか？」

「いや、宿というか……。まあ、そうだな。一泊するだけの金も、今は無いしな」

そもそもこの船も、ユノー達の取り計らいで載せてもらったのだ。しかも二泊三食つき。あいつらにそんなことをする義理は無いのだから、今思えば、とても手厚いもてなしだったと言える。あの性悪眼鏡にもいい所があるじゃないか。いや、老師に言われたからそうしただけなのかも知れない。奴なら「泊る部屋？あなた達なら、倉庫で樽と一緒に横になってるだけで十分でしょう」とか言いそうな気がする。

「だったら探索隊に加わったらどうだ？この間の遠征で、欠員を出しちゃったらしくてな。向こうの事務所で募集してるぜ」

「探索隊？」

「知らんのか。キンドルガルデンは、ネフェリムの子孫が移り住んでできた街だ。この周囲三十km圏内はヘリテージの宝庫って言われてる。どの勢力からも独立を保っていて、この街自体が一つの国になってるのさ」

「永世中位国か」

「だからここへの入国には、滅法厳しい検査が入る。まあ、何で兄さんらが、あの場所からこの船に乗ったのか詮索はしねえけどさ」

船に乗った後、船員から渡された許可証にはそういう意味があったのか。俺は慌てて、ポケットに手を入れて、適当に突っ込んでおいた許可証がちゃんとあるか確認する。

「でも、あそこで人を乗せたのは久しぶりだな」

この船はキンデルガルデンとロッキットを往復する為だけの船だ。当然この男は、あの場所がどういう所なのか知っているのだろう。

「ま、仲良くやんな」

そう言って船乗りは、仕事に戻っていった。

もはや昼飯にありつく金さえ無い俺達は、否応なく探索隊とやらの事務所に向かった。主な仕事は、ヘリテージの発掘。場所はデカイ看板が出ていたのすぐ分かる。短期の仕事もあるらしく、俺達は迷わず「一週間の遺跡調査」の仕事を選んだ。

短期の臨時参加とはいえ、面倒な身分証明が必要だと思っていたが、それも難なくクリアした。ここで、例の許可証が役に立ったのだ。

「なるほど……あの場所からの来訪者は、久しぶりです」

受付の女は、意外そうな口調とは裏腹に、眼鏡の奥にある瞳を微塵も動かさずに言った。

「承知いたしました。寮の部屋をお貸ししますので、ご案内します。丁度今から昼食の時間ですし、そちらもよろしければ」

一々説明を入れる必要が無いくらい話ほとんどん拍子に進み、俺達は出来たてのソテーにありつくことができた。海がすぐそこあって、焼き魚のソテーだった。

「……人間ってのはおかしなもんだな。疑われたら疑われたで怒るが、疑われずに全て肯定にされると、それはそれで納得がいかない」「きつと、疑われることを期待するからでしょう」

本当に、人間ってのはおかしなもんだ。

仕事は明日からなので、俺達は夕食まで外をぶらつくことにした。ネフェリムの子孫が移り住んだという街。確かに、街のここにおートマータを見ることが出来る。電話やラジオは、どの店にも常備されていた。庶民の家にも一台ずつあるのが当たり前らしい。それどころか、食べ物も長期保存できる「冷蔵庫」というものもあるらしい。俺も聞いたことはあったが、実物を見たのは初めてだった。そんな物が、給料の一カ月分で買えると言う。

一方、カタロスは何を見てもあまり驚いたりせず、しげしげとオートマータを見つめていた。化石を見つめる学者のように見入っている。

「どうした？」

「いえ、時代は変わったんだな……. と思って」

「そうだな。ちょっと前まで、列車なんて無かったらしいしな。電波で山を三つ越えた先の出来事もすぐ分かる。便利になった」

勿論、それを悪用する奴らもいる。ここ十年の兵器の進化は、明らかにヘリテージによるものだ。正確には、万密院のヘリテージの研究結果だが。

「この街に住む人達は、みんなネフェリムの子孫なんですね」

「まあ、ずっと住んでる奴はそうだろう」

「彼らは、自分達の先祖をどう思ってるんでしょう」

「いつに無く真面目くさった声だった。俺は思わず、横に並ぶカタロスを見上げる。」

「どうって……。感謝してるんじゃないか？今の生活があるのも、先祖のお陰だろうし」

「ネフェリムがどうやって生まれたか、ご存知ですか？」

「え？確か……. 神の使いが、人間の女との間に子どもを作ったからだよ」

「ええ。神の導きを忘れて歡樂に耽った結果、彼らは罰せられました。樂園を負われ、人間の女と築いた土地を焼き払われたのです」
その言い伝えはソドムにも残っている。ということはこの場所も、

昔は、死体と灰に覆われた廃墟だったのだろうか。

「罪深い血がこの場所に流れ、今も子孫達の体の中を巡っている」

「……………」

「消えないもののですね。犯した罪も、その証拠も」

かつてこの街も、焼き払って無に帰さなければならぬ程の、罪悪が溢れる土地だった。

もし罪がネフェリムとその子ども達のなら、そこに与えられる罰は、何なのだろう。

第三章 四十三話

昼食を済ませた後は何をするでもない、俺は宛がわれた部屋でごろごろして、カタロスはラウンジから持ってきた観光雑誌を眺めていた。資金に余裕ができれば、最後にこの街を見て回るのもいいだろう。郷土料理も楽しめるかも知れない。ただ、「子孫の生き血そっくり！ヘモグロビンも生き活きヘルシートマトスープ」だけは、やめておいた方が良さそうだ。観光地には誰かの悪ふざけでできたような珍味とか、聖人の生首を象った魔除けとか悪い土産物が必ずある。誰のセンスがそれを許すのかさっぱりだ。

俺達の部屋をノックしたのは、隊長を名乗る女だった。歳は二十代後半か、既に三十路へ足を突っ込んでいるかどうかという所だろう。頭に巻いたバンダナの下から波打った黒髪が広がっている。

「正確には私達、なんだけど」

扉を開けると、女の後ろには壁のような男が立っていた。むすつとしていて名乗りもしない。男は頭にかぶった羽帽子の下から、鋭い瞳でこちらを睨めつけている。肩甲骨まである男の髪は銀色に染め抜かれていた。この地域の出身ではないのだろう。

「申し訳ないね。こいつ、ちょっとシャイなの。フリードって呼んであげて。私のことはジェニーでいいから」

二人を部屋に入れてやると、カタロスが俺の後ろへ寄ってきた。余所者を見た子どもが、親の背後に隠れるのと似ている。

「それで、話つてのは？」

「ユノーに確認が取れたわ。ロツクイットからの志望者は本当に久しぶり。あなた達、ここで稼いだらそのまま家へ帰るつもり？」

「あんた達ともそれっきりのつもりでいる」

「つれない坊やだねえ。人生は一期一会、今日の初対面は未来の親友かも知れないってのに」

「何度も言っようで悪いが、話つて？」

「そこのお兄さん、カタロスさんでいいのかな。面白い素質を持ってるって聞いてね」

カタロスは、微かに肩を震わせたようだ。こいつは気配を隠すということを全くしない。カタロスが相手だと、完全に女のペースで話が進んでしまうだろう。

基本的に交渉の条件は後出しの方が有利だが、会話の主導権は自分で握らないといけない。できれば、そうと相手に気づかれずに。俺は、そつと予防線を張り始めた。

「自分達で志願しておいて何だが、こいつはトレジャーハントに向いてない。運動不足と方向音痴で、正直、あんた達の足を引っ張るんじゃないかと思う」

と、ここでカタロスが肩を落とす気配を感じた。一々反応するなよな。本当のことだけど。

「カタロスさんにはマギテックの才能がある」

カードを切ったとばかりに、女はにやりと笑った。

「マギ……何だ？」

「ヘリテージの中でも、未知の原理によって動く装置や物体を、私達は『マギ』って呼んでる。マギテックってのは、マギを操作できる人のこと」

ロッキットでのことを言っているのか。確か「プロジェクタ」という機械の干渉を、カタロスが跳ね除けている。

「昔はこの街にも、マギを操作できる人間がたくさん居ただけだね。血が薄まるほど使い手も減ってたわ。その力も昔に比べれば弱くなってきたって、ばあちゃん達も言ってる。まして、お兄さんみたいに天性の才能で力が使える人間なんて、ここにだって一人もいないわ」

「何が言いたい」

女の笑顔の意味が分からなかった。

だからこそ俺は、警戒した。

「別にあなた達をどうしたいってわけじゃないの。ただこうしてく

れって、お願いするだけ」

「断る」

既に俺達の周囲には、罨が張られている。

そんな感じがした。俺は不測の事態を思っ、そつと尻ポケットのナイフに手をやった。

「およし」

ジェニーは右腕を水平に上げた。前へ出るなど、制するような動きだ。

後ろの男だ。フリードに対して、手綱を引くように氣勢を制したのだ。

「申し訳ないね。こいつ、ちょっとシャイなの。シャイだから、警戒心が強い」

ジェニーが顎を上げると、フリードはスツと左手を差し出した。

その手にはポケットサイズの小銃が握られている。

「だから、敵意とか悪意には、人一倍敏感」

全て見透かされている。

俺の後ろにいる男に交戦の意志が無いことも見抜かれているだろう。カタロスは驚いて、ずっと固まったままだ。こいつの場合、いざという時になっても、自分で攻撃を避けることさえできない。それは瞬発力が無いからじゃなくて、判断力が無いからだ。カタロスは戦いの中でどう行動すれば良いのかを想像できない。

相手がプロ二人なら、確実に俺達の方が負ける。

「別に、あなた達をどうしたいってわけじゃないの」

もう一度言っ、ジェニーは笑った。

「ただ、これから連れて行く場所は物騒だから、少し注意しておこうと思っただけ」

俺達が自分達に逆らっ、てこないことを確かめて、ジェニーはようやく、腕を下ろした。フリードも一歩後ろに下がる。

さっきの不穏な空気も、こうやって自分達の優位を見せつける為に作りだしたのか。飾らない笑顔を見せるジェニーの計算高さに、

俺はうんざりした。反面、こいつが隊長であれば、旅はいくらかマシだろうとも思う。

「観光に行くわけじゃない。危険はある程度、承知の上だ」

「そうね、少なくともあなたはそんな感じだわ。今まで何してきたのか知らないけど、どういう環境で生活してきたのかはなんとなく分かる。ただ、後ろのお兄さんにはお守が必要そうだけど」

「お守をつけてでも、カタロス連れて行きたい理由があるんだろう」

こいつらの理由は勿論、カタロスの素質に関わるものだろう。それをどうしたいのかまでは知らないが、少なくとも、その力でこいつらの状況が変わる可能性がある。

「たまにいるのよね。観光記念にここへ来る人。探索って言葉のせいかしら。聞こえがいいものね」

「調査、発掘、探検、探索。やることは全部一緒だろ」

「そうかもね。でも、探索隊って言っても、その中には色んなグループがあるわ。私達のグループが、何て呼ばれてるか知ってる？」

俺はもう一度、ジェニーとフリードを見遣った。まるで喪に服するように二人は全身黒づくめだ。カラスのようにも見え、葬列者のようにも見える。

「墓泥棒よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2590i/>

帰葬本能

2011年10月10日03時12分発行